桜文論叢

第101巻　2020年３月

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

目　　次

論　説

フランソワ・ラブレーの作品に見る近代軍事革命 …… 石橋　正孝 ……001

ドゥルーズ『襞 ― ライプニッツとバロック ― 』の
ホワイトヘッド …… 吉澤　　保 ……025

Pragmatic Effect of Tautological Reduplication …… 田中　拓郎 ……071

研究ノート

ラグビー選手におけるトレーニング合宿前後の体組成変化 … 高階　曜衣 ……087

論　説

吉田松陰『涙松集』の「吉備宮」歌解釈考
―― 今の世は君の誘子そいとおふみたふれきためてくしのみをとり ―― … 小野　美典 ……122

フランソワ・ラブレーの作品に見る近代軍事革命

石　橋　正　孝

序

本稿では，フランソワ・ラブレー（1483-1553）の前期二作品，『パンタグリュエル』，『ガルガンチュワ』における戦争描写を近代軍事革命の文脈で読み直し，実際の戦術変化をラブレーの作品と照合していく。

ラブレーの作品の軍事的側面についての研究は，『ガルガンチュワ』におけるピクロコル戦争に関して，すでに1907年に S.-C. Gigon が作品中に出てくる戦闘ユニット，武器の用語，戦闘の舞台などの精細な資料的裏付けを行っている(1)。しかしながら，そこで示されていることは，ラブレーが軍事用語に精通していたということと，仮説としてのラブレーの愛国主義的要素の強調であり，議論としての価値は現在では失われている。以来，ラブレーにおける軍事的描写に関する研究はほとんど扱われたことがない。むしろ，事実上放置されてきた感が否めない。したがって，まずこうした背景について，ラブレー研究の系譜と軍事史の関係に対する考察が必要となる。

ラブレーの描く巨人物語は『パンタグリュエル』(1532)，『ガルガンチュワ』(1534)，『第三の書』(1546)，『第四の書』(1552)，死後出版で真偽の確定していない『第五の書』(1564) があるが，時期・作風で30年代の最初の二作品と40年代以降の作品に大きく二つに分けることができる。フランソワ１世の庇護のもとで比較的自由な作風を謳歌した前期に比べて，プロテスタントの台頭によ

る宗教対立の緊張の高まりと，ソルボンヌ神学部・ローマ・カトリックとの対立から，弾圧を恐れて社会風刺・体制批判もより難解・晦渋なスタイルになっていく後期ではかなり作風が異なる。一般的に受け入れられているラブレーの作品のイメージは，前者を中心としたものとなっている。

もともと，中世のブルターニュ民間伝承の中の巨人物語を題材とした「ガルガンチュワ大年代記[2]」の続編の意味合いでラブレーが『パンタグリュエル』を書くことになるが，その成功から改めて父親の物語である『ガルガンチュワ』を書くことになる。系譜的に第一の書の『ガルガンチュワ』が第二の書の『パンタグリュエル』の後に書かれたのはそのためである。

ラブレーの作品が過去５世紀にわたって受容されてきた際のイメージは，社会一般，すなわち作品を読んでない前提で受容されているものとしては，大食漢の巨人の滑稽物語であり，また，実際に作品を読んだ読者層にとってはM. バフチンがグロテスク・リアリズムと呼ぶところ[3]の文化・肉体の「下」の部分に関しての誇張表現と，その下に隠された晦渋な人文主義的メッセージ探しが中心となるだろう。

このように，研究者にとっても大まかに人文主義と文化人類学的構造主義の二大潮流のどちらに重点を置くかでアプローチを大きく二分することができる。人文主義的読み方の代表としては，イギリス人のカトリック神父であるM. スクリーチの研究[4]，また人類学的，民間伝承のアプローチとしてはロシアのM. バフチンの研究[5]がそれぞれを代表する双璧の包括的研究として存在してきた。

二つの主要な包括的研究がいずれもフランス人ではなくロシア人，イギリス人によってなされると，ラブレー研究のすそ野が広がり，1922年以来70年ぶりの本格的なラブレー全集がM. ユションの校正により1994年に出版され[6]，M.-M. フラゴナールの現代語訳も2017年に出て[7]，21世紀に入り，一般的に受容されてきた大食漢の巨人の糞尿譚というだけのイメージを払拭するように，これまでの研究の集大成としてラブレーの全体像をとらえる[8]時期に来ているように見える。

こうしたラブレー研究の流れの中で，必然的に多くの研究アプローチがスクリーチ - バフチンの二大潮流にからめとられる形となっていた。とはいえ，この二つの潮流でラブレーの作品のすべての要素がくみ取れるわけではない。代表的な反例の一つが『パンタグリュエル』，『ガルガンチュワ』での詳細な戦闘描写であり，その背景としての16世紀ヨーロッパの軍事史であるといえる。

逆の言い方をすると，16世紀軍事史が歴史的意義を与えられるようになったのは1956年に M. ロバートが近代軍事革命の意義を最初に提唱し，G. パーカーによってあらためて1976年に取り上げられて以来[9]，比較的最近のことであり，ラブレーの作品の戦争描写も，S.-C. Gigon の用語解説にとどまらず，こうした軍事革命の視点からの新しい読み方をしなければならなくなっているのである。

この近代軍事革命の意義とは，銃火器の進化が戦場での決定的要因となるにつれて，国家はより大きな投資を軍事技術の発展に投じるようになり，より大きな財政負担がかかるようになる。すなわち，火器の発達が，近代化と国家の官僚機構の巨大化を促進させるという考え方である。

戦争の世紀：イタリア戦争，宗教戦争

実際，前世紀に火器が発明され，徐々に進化をとげ普及をしはじめた16世紀のヨーロッパは，いたるところで，絶え間なく戦争が起きていた。実に95パーセントの期間が戦争に費やされ，ほぼ３年間隔でヨーロッパのどこかで戦争が起きていた[10]。その中でもとりわけフランスは，15世紀末から60年以上にわたるイタリア戦争（1494-1559）に始まり，続けて直後に起こった宗教戦争（1562-1598）とで16世紀は占められており，その継続期間，その規模を含めて，16世紀はまさに「戦争の世紀」[11]とよぶことができる。

イタリア戦争の背景：フランス統一

16世紀前半を占めるイタリア戦争の政治的背景としては，第一に国内の安定

が挙げられる。15世紀半ばまで続いたイギリスとの100年戦争（1337～60, 1415～1453）とペストの流行は，フランスに対しては国土の荒廃と同時に，封建領主の権力を大きく疲弊させるという副次的効果をヴァロワ家にもたらした。この機を生かして，その後の40年ほどの間に，ヴァロワ王朝はフランス全土に群雄割拠の状態であった封建領主の制圧を着実に進めていった。神聖ローマ帝国に属し，反フランスの代表格ともいえたブルゴーニュ伯は，1488年にルイ11世に敗れ，1491年にシャルル８世がアンヌ・ド・ブルターニュと結婚してブルターニュを手に入れるとフランス全土がほぼ制圧されることになる[12]。また，封建勢力を制圧したとはいえ，いまだ不安定な国内秩序を安定させるには，対外戦争は戦略的に重要な役割を担ってくれた。不満分子の目を外に向け，大規模軍事戦争のロジスティックの実践を通して，法服貴族と呼ばれる新興ブルジョワ階級を中心とした官僚機構を整備することもできた。こうして，国内の反乱を恐れることなく，政治的・社会的安定という副次的効用も担う形で，対外進出をうかがう機は熟したということができる。

第二に，イタリア戦争の最も直接的要因として，北イタリアのもつ地理要件がある。フランスの16世紀の対外領土政策の最重要課題は，パリに次ぐ第二の経済都市のリヨンを守ることにあった。経済的要衝であるリヨンへの緩衝地帯を少しでも拡大するために，隣接するイタリア北部の獲得が必要であった[13]。

半世紀に渡ったこの戦争はフランスの敗北に終わるが，文化的にはこのイタリア戦争をきっかけに，政治的・社会的に安定期に入りつつあった[14]フランス国内に，イタリア・ルネサンスを流入させ，フランス・ルネサンスをもたらすことになる。フランス・ルネサンスの最盛期に生まれた『パンタグリュエル』と『ガルガンチュワ』には，必然的にこうした政治的枠組み・歴史的事件への言及・暗示を多く見出すことができる。主人公のガルガンチュワ，パンタグリュエルにはフランソワ１世，敵として登場するピクロコル，ディプソードには宿敵として神聖ローマ帝国のカール５世をモデルとして読むことができるが，16世紀の生き証人として軍事史をつづった軍人のモンリュックによれば，ヴァロワ家のフランソワ１世とハプスブルグ家のカール５世のライバル関係は，

「宿敵として，相手の偉大さへの妬みも拍車をかけて，20万人の兵士と百万の家族を破滅させた[15]」ほどに，大きな犠牲を払うライバル関係となっていた。

半世紀に渡り断続的に続いたこの戦いは全体として大きく二つの局面に分けてみることができる。第一の局面は，1515年のマリニャンにおけるフランスの勝利と武器工房として有名なミラノの獲得であり，カール５世の神聖ローマ帝国・スイス連合に対するフランス軍の軍事的優位が示された戦いである。また，中世からのフランス軍の主力となっていた重騎士部隊の最後の栄光となった戦いである。

第二の局面は1525年のパヴィアにおけるフランス軍の歴史的敗北においてフランソワ１世が捕虜となった事件である[16]。ここで，フランス軍の重騎士部隊は惨敗を喫し，中世までのフランス騎士の軍事的名声に終止符か打たれることになる。以後は，神聖ローマ帝国に優位に戦局が進み，フランソワ１世の死後1549年に跡を継いだアンリ２世は，1559年のカトー・カンブレシス条約でイタリアに対する影響力を完全に失うことになる。

軍事革命：火器の発明

このように，イタリア戦争はヴァロワ家とハプスブルク家の代理戦争の場となり，半世紀に渡った絶え間ない戦いは，封建的軍隊の近代化を絶えず促進し，逆に戦争は科学技術の絶え間ない進化の場を提供し続けることとなった。J. ブラックが指摘するように，戦争というのはまさに，必要にかられて技術の進歩が促進されていく現場であり，とりわけ戦術，医学，工学，化学の分野での技術促進が促される土壌を提供していたのである[17]。ルネサンス人として多くの学問に精通していたラブレーは，デュ・ベレー公に付いて諜報員としてイタリアに何度も滞在し[18]，イタリア戦争でみられた軍事的近代化を目の当たりにして，それを作品に反映させたことはある意味当然のことであった。

「世に普及している優雅にして精緻な印刷術は，神的霊感により我が時代に発明されたものであり，一方で悪魔の教唆で発明されたものが火砲である[19]。」

16世紀前半のフランス・ルネサンス，ユマニスムの真髄を表している，ガルガンチュワからパンタグリュエルに宛てた手紙の中で，火器と活版印刷の二大発明の対比がなされていたが，印刷術同様に前世紀には発明されていた火器が16世紀には火力・射程の両面で改善され，とりわけ射程の改善により，対陣する敵との距離が大きく広がることになる。この陣営を構える際のお互いの空間的距離の広がりは，それまで戦場の主役であった重騎士を時代遅れなものとし，封建貴族として中世フランスに群雄割拠していた貴族階級は力の優位を失い，王宮に集う宮廷貴族へと没落していく。この火器のもたらした戦場での一大変化は，戦術・戦略の変化のみならず，社会秩序にも変化をもたらしたのである。E. ガランが指摘する通りに，戦争における変化が社会の変化をそのまま表していたのが16世紀であった[20]。

同時に，ガルガンチュワからパンタグリュエルに宛てた手紙の終わりの方には以下のような記述も見いだされる。

> 「要するに，お前には今のうちに広大で深淵な知識を身に着けてほしいのだ。なぜなら，やがて成人して年を重ねた時には，この穏やかで安息な学問の暮らしから抜け出て，騎士道および武器の扱いを学び，悪人たちの攻撃から我が家を守り，何事につけわれらが友人たちを助けに行かねばならないのだ[21]。」

人文主義者として平和と寛容を唱えたエラスムスに崇拝の念を隠さなかったラブレーであるが，その一連の巨人物語における戦闘場面とそこでの身体描写には，戦争の残酷さに対する忌避はなく，むしろ逆に必要であるならば戦いを積極的に肯定する姿勢がうかがえる。ここに，ラブレー研究の陥りがちな罠がある。上述したようにバフチン的な民衆文化の系譜，スクリーチ的な人文主義的な知の系譜に収まってしまった研究アプローチでは，こうしたラブレーの軍事を肯定する面は人文主義者のレッテルと折り合いが悪く，それがいずれの研究の系譜からもラブレーの軍事面が放置されてしまった理由といえるだろう。

マリニャンの勝利 1515：鉾槍兵（hallebardier）の登場

「神よ，バイヤールに祝福あれ[22]」

1515年のマリニャンの戦いにおいては，フランスはスイス連邦軍に対して華々しい大勝利をあげた。これは，伝統あるフランス騎士道の最後の輝きであり，まさに中世騎士道を体現した英雄バイヤールの目覚ましい活躍に代表されるような，重騎士ユニットで構成される軍隊の最後の舞台となった。重騎士団は，騎士そのものが重戦車のような武器の役割を担い，馬ともども鎧で覆われた騎士の長槍による突撃は，騎馬が加速装置の役割を担い，騎士は長槍を固定し照準を定める砲塔の役割であった。一度敵陣に到達すると，この突撃戦車は敵に壊滅的な打撃を与えることになった。イタリア戦争の前と初期においては，すべての陸上兵器の開発はこの戦場でもっとも恐ろしい兵器である重騎士をいかに攻略するかに集約されていた。

しかしながらマリニャンの戦いでは，フランス軍重騎士団の勝利には，大砲と歩兵の働きが欠かせなかった。「ガルガンチュワ」において，修道士ジャンがピクロコル軍の騎士隊長の突撃を止めるシーンには，当時の歩兵優位と騎士殺しの様子が，ラブレー特有の誇張表現の中にも見出せる：

「（…）ただ一人，ティラヴァン隊長だけは，長槍を固定して低く構え，修道士の胸の真ん中に全身の力を込めて突いた。しかし，この恐るべき僧服に触れると，あたかも小さな蝋燭で鉄床を叩いたかのように鉄の刃先がぐしゃっと潰れてしまった。それに対して修道士は十字の棍棒でティラヴァンの襟元から肩の間に激しい一撃を加えたため，ティラヴァンはその衝撃で一瞬にして動きが止まり，馬の足もとへと落下した[23]。」

マリニャンの戦いにおいてフランス軍と直接戦ったのは，カール５世と連合したスイス連邦長槍歩兵隊[24]であったが，これは長槍歩兵（piquier）と鉾槍歩兵

（hallebardier）の混成体であり，コンパクトな四角形の密集隊形でつくる壁から剣山のように突き出し長槍（pique）は，フランス重騎兵団の突撃を阻止するのには極めて有効であった。スイスの長槍隊とそれを模倣してカール５世の父親であるマクシミリアン１世が創設した神聖ローマ帝国軍の長槍密集隊であるランスクネ（lansquenets）隊の戦術は，四角い密集隊形の外側に長槍隊（piquiers）を配置し，中央に鉾槍隊（hallebardiers）を配置することで，長槍をハリネズミのように外に向けて全方位から重騎士の突撃を止め，一度突撃を阻止されて停止した重騎士を今度は内側に配置されていた鉾槍兵（hallebardiers）が複雑に入り組んだ刃を騎士の鎧の襟首にひっかけて，まさにジャン修道士がしたように騎馬から引きずり下ろし，囲んで虐殺するというものだった。そのため，長槍隊（piquiers）の長槍（pique）は，固いトネリコ材で18フィート（5,83メートル）の長さを持ち，騎士の長槍（lance）が自分に届く前に敵の騎馬の胸に届くように作られていた[25]。

一方の重騎士の方は，1515年，マリニャンの戦い当時の騎士の甲冑の装甲は，足の先から頭までの完全装備で40キロから50キロの重さに達していた。さらに，40キロの重さの槍（joute）を腋に固定して敵陣地に自らが砲弾となり突撃していくのである[26]。この最大で90キロにもなる武装一式の重さは，当然のことながら戦闘の際の正確な動きを保つために極めて大きな力と技術を必要としたのであり，現実問題として日常から常に鍛錬に専念でき，高価な甲冑を揃えることのできる特権的貴族階級でなければ戦闘ユニットとして機能させることは不可能であった。したがって，重騎士という戦闘ユニットは必然的に貴族階級，中でも封建領主として収入が十分の貴族のみに許されたものであった。

ここで留意すべき点は，貴族階級の騎兵と平民階級の歩兵の間の憎悪の感情である。敵の騎士相手には寛容の美徳を発揮したバイヤールも，火縄銃の銃手は容赦なく全員絞首刑にしたように，一度捉えられたら騎士に殺されることが確実な歩兵の側も，禍根を残さぬよう，騎馬から引きずり下ろした騎士を確実に殺していたのである。ラブレーの戦闘シーンに見る残虐性は，敵への敬意を示すという騎士道が平民階級の歩兵には適用されないことが挙げられると同時

に，フランスにおける平民階級と貴族階級の間の戦場における憎悪の感情が背景にあることも見逃してはならない。

また一方で，フランス軍の重騎士の殺戮に猛威を振るったスイス鉾槍兵団も，大砲の火力の前には無力であり，彼らと同じ武装をしている敵歩兵の密集隊形に対しても有効な攻撃力を持たなかった。 同じ歩兵部隊の中でも，これが銃兵隊と鉾槍隊の違いであり，J.-H. ヘイルが指摘するように，以降の戦場は銃兵隊が主力となる[27]。結果として，火縄銃で武装した歩兵隊，もしくは火縄銃手部隊を後方部隊として備える歩兵部隊は，多くの戦いにおいて騎士軍団を撃破する主役を担い，騎兵隊は後方支援，もしくは背後からの奇襲のために少数が歩兵部隊を補佐する形となっていった。

こうして歩兵隊が貴族の重騎士に対して優位をもつことがマリニャンの戦いで示されて，10年後のパヴィアの戦いを迎えることになる。結果的に，フランス軍はカール５世の軍に「貴族の大殺戮[28]」と呼ばれた大敗北を喫することになる。

パヴィアの敗北 1525：軽騎兵の台頭と規律の重要性

> 「パヴィアの戦いの逃亡兵などは，耳や尻尾を切った犬同然に去勢してくれよう。どうせ臆病熱が続くだけだ。彼らの親愛なる王様を置き去りにしてあのような苦境に置くらいなら，なぜその場で死のうとしないのか。卑劣にも逃げて生き延びるくらいなら，勇敢に戦って死んだ方が，よほど名誉で優れたことであろうに[29]。」

フランスが大敗してフランソワⅠ世が捕虜となったパヴィアの戦いについて，ジャン修道士はこのように戦場から逃走した兵への憤りをみせる。このパヴィアの脱走兵への侮蔑は，修道士に代弁させて当時の貴族階級の誇りを示すと同時に，戦場で潰走した平民傭兵への侮蔑を示しているのである。そしてこの階級蔑視は，フランス軍の近代化を神聖ローマ帝国軍より遅らせる要因の一つとなる。

マリニャンからパヴィアの10年の間に，戦闘ユニットとしての騎士の戦術的重要性の低下は決定的となった[30]。イタリア戦争を開始したころのシャルル８世の軍隊は三分の二が長槍で武装した重騎兵で構成されていたが，パヴィアの戦いの時のフランソワ一世の軍隊では，全体の五分の一に過ぎず，それも徐々に火器，歩兵にとってかわられることになる。この意味でまさに，パヴィアの戦いはまさに，中世騎士文化の終焉を象徴する戦いであったといえる。パヴィアの９年後の1534年のガルガンチュワの中では，グラングジエの軍隊構成には，その変化がはっきり示されている。

「兵士の数は，一万五千の重騎兵，三万二千の軽騎兵，八万九千の火縄銃手，十四万の傭兵，一万一千二百門のカノン砲，バジリク砲，スピロル砲，四万七千の砲手がおり，すべて六か月と四日間分の給料は支払い済みだったし，その分の食糧も補給されていた[31]。」

合計334200の軍隊のうち，重騎士はわずか15000のみであり，全体の五分の一，すなわちパヴィアの戦いの構成と一致している。また，給料が払い済みというところからわかるとおり，軍が傭兵で構成されている点も，当時の実際の軍隊構成を忠実に反映したものとなっている。それでも，フランスは中世よりヨーロッパに勇名をとどろかせた騎士団の誇りを捨てることができない間に，カール５世のスペイン・神聖ローマ帝国軍は，より一層の近代化を進め，戦場での優位をすでに失っていた騎士ユニットよりも，歩兵隊の強化に重点をおいたのである[32]。

この理由は，フランス軍の中に騎士道精神とその誇りが強く残り，歩兵重視の軍隊への改革に精神的な抵抗が強かったのに対して，スペイン・神聖ローマ帝国ではフランスと異なり「歩兵＝平民に対する貴族の侮蔑」が存在していなたかったことが大きい[33]。加えて，スペイン軍はフランス軍だけではなくグラナダ戦争におけるナスル朝との戦いで，軽騎兵と歩兵の重要性を理解していたのである。

しかしながら，フランスにおいては精神的支柱としていまだ戦場の主役であった重騎兵からは，直接対決をしない遠隔攻撃ユニットの倫理的「卑劣さ」への侮蔑は強く，バイヤールは捉えた火縄銃手[34]をすべて絞首刑にしていた。騎士道の鏡と言われていたバイヤールが1524年，パヴィアの戦いの前年に火縄銃の銃弾で命を落とすことは，騎士道の象徴的終焉としてみることができるだろう。一方で，フランソワ１世と対峙するカール５世を念頭においてラブレーが描いたディプソード軍の軍隊編成は，この10年間の戦術的大転換を反映している。：

「…わが軍には三百人の巨人がおり，いずれも建築用の切り石で身を固め，驚くべきほどの大きさです。とはいえ，一人を除いては閣下ほどの大きさには及びません。その一人とは，狼男の名を持ち巨人族の長をしている者で，この者は一目巨人ほど大きな鉄床で全身を包んでおります。また，十六万三千の歩兵はみな小悪魔リュタンの皮で身を固め，いずれも力と武勇に優れております。また，一万一千四百の騎兵，三千六百門の二重カノン砲，数限りもない弩銃砲は数え切れぬほど，九万四千人の工兵がおります[35]。」

ラブレー特有の空想と写実の混交の中で，写実の部分を読み解く必要があるが，重量級の鎧で全身を包むのは，巨人と頭目の狼男のみで，注目すべきは「十六万三千もの歩兵」は「小悪魔リュタンの皮」という巨人たちとは異なる軽い武装であることで，また歩兵の十分の一以下の「一万一千四百」の騎兵隊は歩兵たちの後に列挙されることである。歩兵は軽装であり，騎兵隊よりも重視されているのだ。そして多数の火器をそろえたこの近代的な軍隊構成は，戦場での時空間の概念を大きく変えることになる。「三千六百門」の二重カノン砲を構えた敵陣に到達するためには，兵たちは，より遠い射程から攻撃を開始し，敵陣に到達するまでの距離はますます広がり到達するのが難しくなっていく。結果として，敵陣に到達するためのユニットの移動速度が勝敗を決める決定的な要因の一つとなるのである。 そこでは，「一目巨人ほど大きな鉄床で全身を包

んで」いては，速度が落ちて敵陣に到達する前に粉砕されてしまうので，歩兵隊は「小悪魔リュタンの皮で身を固め」た軽装で速度を重視している。

マリニャンの戦いの時のフランスの騎士のように90キロもの装甲をまとった騎士の突撃は，火器によって拡大した戦闘空間の中で敵陣に到達する前に粉砕されてしまうことになる。D. マッカーシーが指摘する通り[36]，火器の発明で戦場での移動速度が重視されるようになる中で，馬の甲冑を外し速度を取り戻した軽騎兵は戦場で再び機能するようになるのであり，15世紀後半から16世紀前半にかけて，緩やかに，しかし着実に軽騎兵の数が重騎兵の数を上回るようになった[37]。パヴィアの戦いでの敗北でこの事実を受け入れざるを得なくなったフランス軍は，以後は中世からのフランス軍の誇りであった重騎士軍団をあきらめ，速度重視の軽騎兵を事実上の騎馬隊の主力とすることになる。

また，騎兵の役割の転換と同時に見逃せないのが，戦術における指揮官の判断の重要性と指揮官の指令に従う軍隊の規律である。

> 「敵兵は規律も秩序もなく潰走し始めた。部下の数人の兵は，退却する敵兵を追撃しようとしたが，修道士は引き止めた。なぜなら，追走して隊列を乱すことで，城中の敵軍からの逆襲を蒙ることをおそれたからであった。修道士はその後しばらく待ち構えていたが，向かって来る敵兵が誰もいないのを確かめてから，フロンティスト公爵をガルガンチュワのもとに送り，軍を進めて城門からピクロコルが退却するのを防ぐようにとすすめた。ガルガンチュワは急いでそのとおりに兵を動かし，セバスト将軍麾下の四軍団を派遣した[38]。」

ジャン修道士は，逃げようとする敵を追走する部下を引き留め，「戦列をみだし」てしまうことを禁じ，戦況から判断して上官のガルガンチュワに進言をする。戦術の中心にあるのが，指揮官としての判断能力と司令官のガルガンチュワとの連携である点が注目に値する。戦場においてはすでに，個々に武勇を発揮する騎士の能力は主役ではないのである。また，指揮官であるガルガンチュワ，歩兵隊長であるジャン修道士の連携と同時に，砲火と歩兵の連携は歩兵の

前進に欠かせないものであった。敵の火砲により歩兵の進路が塞がれないように歩兵隊の前進速度に合わせて砲火を放つ必要があったからである。

「修道士は，自ら包囲していた側面が手薄になり，見張りもいなくなったのを見ると，大胆にも城に進み寄り配下の数名とともに城壁の上へ登りつめた。正攻法で正面から戦うよりも，突然現れて不意をうつほうが，敵に対して恐怖と混乱を与えると考えたのである。しかしながら，万一の場合に備えて城外に残した二百名の騎兵隊を除き，部下の兵士たちが全部城壁に登りきるまでは，声を一切あげず，全部が登りきったところで，修道士は部下の兵達と一斉に大きな鬨の声をあげた。そして，この城門の守衛兵をなんの抵抗も受けずに殺害して扉を開き，待ち構えていた味方の騎兵たちを導き入れ，全軍あわせて東の門めがけて勇んで馳せつけた。大混乱の東の門に着くと，背後から全力で敵に突撃をかけた(39)。」

ここでも，二つの点で従来の戦術が否定されている。まず，正面突破の否定である。ジャン修道士は，フランス重騎士団のように敵陣に正面から突撃をかけていく戦術が火器の前ではもはや通用しないことを知っていた。「正攻法で正面から戦うよりも，突然現れて不意をうつほうが，敵に対して恐怖と混乱を与えると考えた」彼は，率いる歩兵たちと敵陣に到達して通路を確保すると，「万一の場合に備えて」いた独立行動部隊の騎馬隊を導き入れ，敵陣を蹂躙する。

もう一点の重騎士の否定は，個々の勇猛さの否定であり，連携の重要さの強調である。ここにみられるのは，優秀な指揮官のもとでの規律と連携が重視されている点であり，中世重騎士団の攻撃のように個々の騎士の勇猛さに依存しないのである。中世までは，騎士は自らの勇猛さを示すためには，指揮官の命令を無視することは当然のことであった(40)。しかしながら16世紀の戦場においては，全ユニットが高い機動性をもって司令官の指揮通りに動くのである。

このように，16世紀初頭，マリニャンとパヴィアの二つの戦いの間で，わずか10年の間に，兵器・戦術の変化が引き起こしたもう一つの変化が指揮官の資

質であった。戦術能力，戦場での判断能力が，武器の扱い，勇猛さよりも重視されるようになったのである。パヴィアの戦い以降，戦いの目的は，J.-M. サルマンが指摘するように[41]，常に主導権を握りながら敵を破壊し，かく乱し，圧力をかけ，分散させ，殲滅することであり，指揮官の第一の資質は，勇猛さでも騎士道精神でもなく，狡猾さなのである。指揮官に求められるのは，手持ちの兵力をいかに臨む戦術に適合させるかとなったのであり，合理性が求められるようになったのである。

結論

ここまでラブレーの作品の中の戦闘描写をイタリア戦争の近代軍事革命になぞらえて読んできた。ラブレーの作品の中の様々な軍事用語，描かれる戦術が，誇張したスタイルの中にも極めて史実に忠実であることがわかる。フランソワ I 世の命を受けたデュ・ベレー卿に付き従ってフランスのスパイとしてイタリアを往復し，イタリア戦争での戦術の大きな変化にも立ち会ったラブレーの作品には，文学が現代的に賦課された意味合いとしての虚構の概念とは異なり，軍事的歴史的資料としての価値を見出すことができる。近代の入り口における生き証人として，その学際的博識に裏打ちされた史実の詳細を空想的表現の中に織り交ぜたラブレーの作品は，16世紀の文学研究に従事する者が，歴史研究との境界が曖昧なままに seizièmist（16世紀研究家）と言われる理由を強く提示し，同時に，その作品には文学研究という，当時には存在していないジャンルを超えた多角的アプローチと，必然的に文学を超えた結果が要求されることを示してくれる。

歴史的考察：Isomorphisme militaire近代軍事革命と西洋のアイデンティティーとしての軍事的同一性

軍事的考察の視点からは，火器の発達がもたらした近代軍事革命を作品からなぞっていくことになった。繰り返し行われたイタリアおよび今のオランダ・

ベルギーを構成するフランドル地方をめぐるフランスと神聖ローマ帝国の争いは，西洋文明に二つの根本的な変化をもたらすこととなった。一つは，社会構造の変化であり，火器の発明が騎士による突撃という中世の戦場を支配した戦術を時代遅れのものとし，必然的に，騎士としての軍事的優位を根拠にしていた封建領主の権力が失墜することとなった。

もう一点は，スペイン，イタリア，ドイツ，フランスという主要国が深く関わったイタリア戦争を通して，各国の軍事的・戦術的同一性が西洋諸国にもたらされ，西洋というアイデンティティーを生み出す契機となったことである。

中世までは，キリスト教共同体の意識が台頭するオスマントルコの脅威に対抗する求心力として機能していたが，イタリア戦争でフランソワ１世がカール５世に対抗するためにオスマントルコと同盟を組むことが象徴的に示しているとおり，宗教改革の波はとりわけ1520年以降，J. Hale が指摘するように，「ギリシア正教の管区ではないヨーロッパを，カトリックとプロテスタントに二分する結果となった[(42)]」のであり，キリスト教共同体としてのヨーロッパの同一性が解体されたのである。

このアイデンティティーの危機において，絶え間ない戦争は戦術・軍事技術の革新をもたらし続け，互いに争いあっていたヨーロッパ諸国に軍事的同一性という新たなアイデンティティーをもたらすこととなった。兵器・戦術の大きな変化は，それが有効であると判明すると，ただちに敵に模倣される。こうして火器の登場と重騎士の無効化いう新たな兵器とその運用戦術をお互いに取り入れることで，1494年の時点では大きかった軍隊間の戦力構成の不均等が，1530年くらいまでには解消されることになる。繰り返される戦争を通して互いの国にもたらされた軍事的同一性なのである。

また貴族の個人個人の勇敢さ・技量に依存していた重騎士の戦力としてのばらつき・不均等は，軍事近代革命の後に主力の位置を騎士からうばった歩兵隊においては規律によって解消された。そもそも歩兵といっても，もとは騎士の従士が騎士の「子供＝ enfant」として戦場に従軍してきたものが，かつての主君の家臣であることをやめ，「歩兵＝ infanterie」として戦場での主力部隊

となっていくのである。J.-P. メイヤー[43]が指摘するように，この下剋上によって封建社会が崩壊するのである。貴族階級の騎士ユニットがもっていた技量・美徳としての勇猛さは，必要なかった。その代わりに平民の歩兵部隊には，戦術の合理性を追求する指揮官の下で，規律と機動性[44]が追求されることになる。

イタリア戦争が終わると，それまでの対外戦争で比較的平穏を保っていた国内において，イタリア戦争の終了を待っていたかのように，宗教戦争が一気に激しくなり内戦の様相を呈するようになっていく。この戦いは，宗教の戦いであると同時に，カトリックのヴァロワ家とプロテスタントのブルボン家の戦いでもあり，最終的にはブルボン家の勝利で次の17世紀に絶対王政の最盛期を迎えるブルボン王朝が成立することになる。

イタリア戦争ではヴァロワ家対ハプスブルグ家の争いであったが，宗教戦争はヴァロワ家とブルボン家の戦いであった。フランスを含む西洋はこのように宗教の対立と王家の対立が入り組んで常に分裂の危機にさらされながら，繰り返される域内の戦争を通して軍事的同一性を維持し続け，それが西洋というアイデンティティーを保証し続けたのである。

文学的考察：16世紀研究における文学的課題としての空間描写

一方，文学研究の観点からは，今回の考察はラブレーの作品を歴史的資料としてとらえて史実と照らし合わせたことによる軍事的考察が中心となり，現代的意味合いにおける虚構を前提とする文学研究とはならないだろう。歴史の観点から見た場合，「書かれたもの以外」を扱う考古学に対して「書かれたもの」を扱う歴史学は，書いた人間の視点に含まれる政治性その他のバイアスを排除しなければ，客観的史実にたどり着くことはできない。ここで，文学を歴史的資料として扱うことと，文学作品に見られる歴史的事象の描き方との間に，果たしてどこまで明快な境界線を引くべきであろうか。

とりわけ，虚構空間という近代文学特有の物語の在り方・捉え方に対して，16世紀は活版印刷により口承から読書へと物語の受容の仕方が大きく変容する

時代であり，物語における真実性が，「本当にあった出来事」を強調することに焦点を当てる真実性から，語られる虚構空間の緻密な構築（l'effet de réel[45]）に依拠する「本当らしさ，もっともらしさ（le vraisemblable[46]）」と同義の真実性へと変容していく時代である。この大きな転換期において，とくにラブレーのような博覧強記のルネサンス人が，虚構に史実を織り交ぜた作品を提示している時に，どこまで歴史的資料としての価値を見出すか，どこまで歴史的資料としての価値を否定するか，ここを曖昧にしたままの16世紀文学研究は，フランス文学研究の社会において，中世にも属さず，また17世紀以降の近代の流れにも属さない傍流に位置付けられてしまう要因ともなっている。

そうした背景を踏まえたうえで，あえてここから今回見てきたラブレーの作品の中から文学的テーゼを見出すのであれば，近代軍事革命によって戦場の時空間が広がったことと，作品における空間描写にどのような関連があるかを考察することができるかもしれない。ここまで見てきた戦闘描写は，絵画における遠近法が発明された時代，虚構空間における写実性の高まりを空間描写の変化にどのように見出せるかというような考察も可能であろう。かつて M. マクルーハンが，その「グーテンベルクの銀河系」の中で，ウィリアム・シェイクスピアの「リア王」から初めて文学の虚構空間に喪失点がもたらされたと主張したが[47]，その主張は理論的根拠を提示できたとは言えない。とはいえ，M.-M. フォンテーヌが指摘するように[48]，絵画・物語における認識論が双方向的に影響しあう中で，中世までの二次元的な表現が，16世紀から17世紀にかけて三次元的な表現を獲得していくという考えに反対はなさそうに思える。問題は，叙述的言説ではなく描写的言説の中での空間描写に対して，言語における「消失点」をどのように学問的に証明するかという方法論の確立にかかってくるといえるだろう。

しかし今回の考察では，ラブレーの作品の中の史実に忠実な軍事的側面に焦点を当てることが目的であった。フランス16世紀文学を代表する作家として位置づけられているが，ラブレーが巨人の物語を書き始めたのは本人が50歳になってからであることを忘れてはいけない。法律家の家に生まれて，修道僧と

して，医者として，そしてデュ・ベレー卿に従ってフランスのイタリアにおける諜報活動のスパイとして生きたラブレーが，人生の後半にさしかかった時に，我々の時代の意味でいう作家としての自覚もなく，文学的価値というものを意図して書いたものでもなく，ソルボンヌの検閲を潜り抜けるための政治的動機から虚構の形式を借りたという点も否定できないであろうこれらの作品には，ラブレーに貼られたレッテルである人文主義的な作家という先入観を持たないように，現代的意味合いでの文学などの学問領域を越えて，あらゆる角度からのアプローチが必要であり，その帰結として導かれる議論も領域を文学に限定するのは不可能であろう。

注

(1) S.-C. Gigon, « L'Art militaire dans Rabelais », Extrait de la *Revue des Etudes rabelaisiennes,* 5e année, 1er fascicule, Revue des études rabelaisiennes, V, Paris, Honoré Champion, 1907, n° 52.

(2) *Les grandes et inestimables chroniques : du grand et énorme géant Gargantua*, dans Francis Valette, édition critique de *La légende joyeuse de maistre Pierre Faifeu* de Charles de Bourdigné, Paris, Droz, 1972

(3) M. Bakhtine, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et sous la Renaissance,* trad. de russe par A. Robel, Paris, Gallimard, 1970, 1993.

(4) M. Screech, *Religion, morale et philosophie du rire*, *The Rabelaisian Marriage*, Londre, Cambridge University Press, 1958, traduit en français par Ann Bridge, *Etudes Rabelaisiennes*, t. XXVIII, Genève, Droz, 1992 ; *Rabelais*, Londre, 1979, traduit en français par Marie-Anne de Kisch, Paris, Gallimard, 1992 ; *Rabelais et le mariage*, *Etudes Rabelaisiennes*, t. XXVIII, Genève, Droz, 1992.

(5) M. Bakhtine, *Ibid.*

(6) M. Huchon, *François Rabelais : Œuvres complètes*, Paris, Gallimard « Bibliothèque de la Pléiade », 1994.

(7) M. -M. Fragonard, *Rabelais, Les cinq livres des faits et dits de Gargantua et Pantagruel*, Paris, Gallimard « collection Quarto », 2017.

(8) M. Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011.

(9) M. Robert, *The Military Revolution*, Belfast, Sallman,1956 ; G. Parker, *La Révolution Militaire : La geurre et l'essor de l'Occident 1500-1800,* 1976, trad. de l'anglais par J. Joba, Paris, Gallimard, 1988.

(10) G. Parker, *op. cit.*, p.18 : « En effet, au XVIe siècle, la guerre était omniprésente en

Europe plus que pendant les autres siècles. C'est le début de la période qui fut « la plus extrême pour le nombre relatif des années de guerre (95%), pour leur fréquence (environ une tous les trois ans), leur durée moyenne, leur étendue et leur ampleur»

(11) M.-M. Fontaine, ***La Représentation du corps à la Renaissance***, Paris, Amateurs de livres, 1990, p. 2.

(12) Voir B. Quillet, ***La France du beau XVIe siècle***, (***1490-1560***), Paris, Fayard, 1998, p. 12.

(13) Voir A. Jouanna, ***La France du XVIe siècle ; 1483-1485***, Paris, PUF, 1996, p. 4.

(14) Beau XVIème,「美しき16世紀」という表現は，この政治的・文化的に安定した社会全体の繁栄期を指しており，ルネサンスという社会の１割未満のエリート階級の間でのみ共有された文化現象とは異なる意味合いで使われる。Voir B. Quillet, ***op.cit.***, pp. 10-11.

(15) B. de Monluc, ***Les Commentaires***, éd. P. Courteault, Paris, Gallimard, collection « Bibliothèque de la Pléiade », 1964, p. 30-31 : Ils étaient les « ennemys jurez et envieux de la grandeur l'un de l'autre, ce qui a cousté la vie à deux cens mil personnes, et la ruyne d'un million de familles ».

(16) パヴィアの戦いにおけるフランス軍敗北の戦術的詳細については，Voir R. Knecht, « Monluc et l'art militaire », dans ***Monluc, d'Aubigné***, : deux épées, deux plumes : actes du colloque Monluc, d'Aubigné, les événements en Aquitaine après 1560 tenu à Agen, Estillac, Casteljaloux, Nérac les 4,5 et 6 oct.1996, Agen, Centre Matteo Bandello, 1999, p. 116.

(17) Voir J. Black, ***A Military Revolution ? Military Change and European Society***, London, Macmillan, 1991, p. 6.

(18) ラブレーの生涯に関しては，出生も含めて諸説あり続けたので，最新のものに依拠する。Voir M. Huchon, ***Rabelais***, pp. 10-11.

(19) 本稿で引用されるフランソワ・ラブレーの『第二の書パンタグリュエル物語』，『第一の書ガルガンチュワ物語』に関しては，日本では1941年から手掛けられた渡辺一夫の名訳がその古典的文体にも関わらず不動の地位にあり，半世紀以上経って2012年に出た宮下志朗訳も渡辺訳に代わることができないまま現在に至る。本稿では註（7）の M. Huchon の版を使用する。F. Rabelais, ***Œuvres complètes***, M. Huchon (éd.), ***Pantagruel***, ch. VIII, p. 243-245. « Les impressions tant elegantes et correctes en usance, qui ont ésté inventées de mon eage par inspiration divine, comme à contrefil l'artillerie par suggestion diabolicque. »

(20) E. Garin, ***L'Homme de la Renaissance***, Paris, Seuil,1990, p. 13 : « Nous sommes à une époque de changments rapides dans les activités qu'exercent les hommes, et dans leur manière de la exercer. Il suffit de penser, à propos de la transformation des manières de faire la guerre, aux répercussions qu'ont eues les nouvelles

techniques de l'art de la guerre, les nouvelles armes et les nouvelles machines, d'une part sur l'architecture et, de l'autre, sur les armées, des condottieri aux mercenaires. On cite souvent les observations, perspicaces et subtiles, de Guichardin sur le changement radical de la guerre au quinzième siècle, et pas seulement à cause de l'introcution de la « fureur de l'artillerie ». Les défenses changent elles aussi les architectures des villes. Mais avant tout ce sont les armées qui changent et les manières de diriger les hommes, et les hommes eux-mêmes. »

(21) *Pantagruel*, ch. VIII, p. 243-245 : « Somme que je voie un abîme de science. Car dorénavant que tu deviens homme et te fais grand, il te faudra issir de cette tranquillité et repos d'étude, et apprendre la chevalerie et les armes pour défendre ma maison, et nos amis secourir en tous leurs affaires contre les assauts des malfaisants. »

(22) *Gargantua*, ch. XXXIX, p. 108 : « Feste Dieu Bayart ».

(23) *Gargantua*, ch. XLIII, p. 117 : « (...) Tyravant, lequel coucha sa lance en l'arrest, et en ferut à toute oultrance le moyne au milieu de la poictrine ; mais, rencontrant le froc horrifique, rebouscha par le fer, comme si vous frappiez d'une petite bougie contre une enclume. Adoncq le moyne avec son baston de croix luy donna entre col et collet sus l'os Acromion si rudement qu'il l'estonna : et feit perdre tout sens et movement, et tomba es piedz du cheval ».

(24) スイス傭兵部隊は，フランス革命まで常にフランス軍歩兵部隊の中核を成していた。当時は戦争の度に傭兵部隊がどちらの陣営にでもつくことがあった。Voir J. Jacquart, *François Ier*, Paris, Fayerd, 1981.p.83, p. 87.

(25) L. Funcken, *Le Costume, l'armure et les armes au temps de la chevalerie. 2 :Le Siècle de la Renaissance*, Paris, Casterman, 1978, p. 14.

(26) J.-J. Jusserand, *Les Sports et jeux d'exercice dans l'ancienne France*, première édition en 1901, Paris-Genève, Champion-Slatkine, 1986, p.7.

(27) J.-H. Hale, *Artistes and warfare in the Renaissance*, New Haven, Yale Univ. Press, 1990, p.viii : « During the period (from the mid-fifteenth to the mid-sixteenth century) covered by this book, the Art of War underwent important changes. Infantry, rather than cavalry, became the decisive arm. »

(28) J. Jacquart, « De quelques capitaines des guerres d'Italie », dans *Passer les Monts*, p. 84.

(29) *Gargantua*, ch. XXXIX, p. 108 : « Par dieu je vous metroys en chien courtault les fuyars de Pavye. Leur fiebvre quartaine. Pourquoy ne mouroient ilz là plus tost que laisser leur bon prince en ceste necessité ? N'est il meilleur et plus honorable mourrir vertueusement bataillant, que vivre fuyant villainement? »

(30) J.-P. Mayer, *Pavie, 1525 : l'Italie joue son destin pour deux siècles*, Le Mans : Cénomane, 1998, p. 38. : « l'armée de Charles VIII était composée de deux tiers de

cavaliers. A Pavie, en 1525, celle de François Ier n'en comportera plus qu'un cinquième. A coté de la cavalerie lourde, on emploie désormais des unités autonomes de cavaliers légers à la façon turque : ce sont les stradiots vénitiens ou les chevau-légers français. Excellentes unités de patrouille ou de coups de main, ces chevau-légers ne sont pas encore très efficaces dans la bataille elle-même ni contre la cavalerie lourde, ni contre l'infanterie puissamment armée qui demeure encore maîtresse du terrain et dont la puissance ne fait que s'accroître au détriment d'une cavalerie dont le rôle va en diminuant. »

(31) *Gargantua*, ch. XLVII, p. 127. : « Les gens estoient quinze mille hommes d'armes, trente et deux mille chevaux legiers, quatre vingtz neuf mille harquebousiers, cent quarante mille adventuriers, unze mille deux cens canons, basilicz et spiroles. Pionniers quarante sept mille, le tout souldoyé et avitaillé pour six moys et quatre jours. »

(32) J-M. Sallamann, « L'évolution des techniques de guerre pendant les guerres d'Italie（1494-1530）», *Passer les Monts*, Paris, Honoré Champion, 1998, p. 60.

(33) *Ibid*., p. 67.

(34) 戦場における火縄銃とその銃手の登場は，1520年代に認められるが，当初は数的にはごくわずかであったが，ひとたび騎士に対する有効性が認められると，戦場での普及は早かった。Voir Monluc, *Les Commentaires*, p.34, *Escarmouche de Saint-Jean-De-Luz*,（1523, sept.）: « Il faut notter que la trouppe que j'avois, n'estoit que arbalestiers : car encores en ce temps-là, il n'y avoit point d'arquebuziers parmy nostre nation. Seulement, trois ou quatre jours auparavant, six arquebuziers gascons s'estoient venuz rendre du camp des ennemis de nostre costé, lesquels je retins, parce que, par bonne fortune, j'esoits ce jour-là de garde à la porte de la ville, et l'un de ce's six estoit de la terre de Monluc. »

(35) *Pantagruel*, ch. XXVI, p.306 : « … en l'armée sont troys cens Geans tous armez de pierre de taille, grands à merveilles, toutesfois non tant du tout que vous, excepté un qui est leur chef, et a nom Loupgarou, et est tout armé d'enclumes Cyclopicques. Cent soixante et troys mille pietons tous armés de peaulx de Lutins, gens fortz et courageux : unze mille quatre cens hommes d'armes, troys mille six cens doubles canons, et d'espingarderie sans nombre : quatre vingtz quatorze mille pionniers … »

(36) D. MacCarthy, *La Cavalerie au temps des chevaux*, Editions Presse Audiovisuel, 1989, p.63 : « Les expéditions entreprises en Italie par les rois de France à partir des toutes dernières années du XVe siècle allaient entraîner une transformation radicale de la cavalerie française. L'allégement maximum de l'armure des cavaliers et la disparition totale de celle des chevaux développeront la création de compagnies de cavalerie légère dont les effectifs dépasseront ceux de la

gendarmerie d'ordonnance ; celle-ci, par fidélité à des traditions anachroniques, conservera tout son pesant armement défensif. Grâce à cet allégement, la cavalerie retrouvera la vitesse que son alourdissement avait rendue aléatoire, sinon impossible. »

(37) Voir F. Lot, *Recherches sur les effectifs des armées françaises des guerres d'Italie aux guerres de Religion,* Paris, EHESS, 1962.

(38) *Gargantua*, ch. XLVIII, p. 130 : « Par quoy se mirent en fuyte sans ordre ny maintien. Aulcuns vouloient leur donner la chasse, mais le Moyne les retint craignant que suyvant les fuyans perdissent leurs rancz, et que sus ce poinct ceulx de la ville chargeassent suz eulx. Puis attendant quelque espace, et nul ne comparant à l'encontre, envoya le duc Phrontiste pour admonester Gargantua à ce qu'il avanceast pour empescher la retraicte de Picrochole par celle porte. Ce que feist Gargantua en toute diligence et y envoya quatre legions de la compaignie de Sebaste ».

(39) *Gargantua*, ch. XLVIII, pp. 130-131 : « Le moyne voyant celluy cousté lequel il tenoit assiegé, denué de gens et guardez, magnanymement tyra vers le fort et tant feist qu'il monta sus luy et aulcuns de ses gens pensant que plus de craincte et de frayeur donnent ceux qui surviennent à un conflict, que ceulx que lors à leur force combattent. Toutesfoys ne feist oncques effroy, iusques à ce que tous les siens eussent guaigné la muraille, excepté les deux cens hommes d'armes qu'il laissa hors pour les hazars. Puis s'escria horriblement et les siens ensemble, et sans resistance tuèrent les guardes d'icelle porte, et là ouvrirent es hommes d'armes et en toute fierté coururent ensemble vers la porte de l'Orient, où estoit le desarroy. Et par derrière renversèrent toute leur force. »

(40) J. Jacquart, « De quelques capitaines des guerres d'Italie de la réalité à l'image » dans *Passer les Monts*, pp. 85-86.

(41) J.-M. Sallmann, « L'évolution des techniques de guerre », *Passer les monts*, p.80. Après cette phrases citées, l'auteur cite des phrases de Hélène Vérin dans sa *gloire des ingénieurs. L'intelligence technique du XVIe au XVIIIe siècle*, Paris, 1993, p.93-94. « Les véritables vertus d'un homme de guerre se révèlent à sa faculté de bien concevoir et entreprendre ses desseins, pour définir une conduite qui réduise l'incertitude, la difficulté tenant à la multiplicité des facteurs en jeu. »

(42) J. Hale, *La Civilisation de l'Europe à la Renaissance*, 1993, Paris, Perrin, 1998, p. 5.

(43) J.-P. Mayer, *Pavie 1525 : L'Italie joue son destin pour deux siècles*, 1998, p. 35 : « L'un des grands changements, c'est la férocité des combats favorisée par l'émergence des grands changements nationaux et l'emploi d'armes destructrices. Au début du XVIe siècle les états nationaux et les clivages idéologiques s'imposent. La féodalité est finie, la guerre n'est plus uniquement un sport réservé à l'élite

nobiliaire ou la seule occupation épisodique d'aventuriers sans foi ni loi. Chaque soldat désormais a conscience d'appartenir à un groupe, les uns sont espagnols et fiers de l'être, les autres luthériens, certains suisses. »

(44) E. Werner, *Montaigne stratège*, Lausanne, Editions l'Age d'Homme, 1996, p.12 ; La guerre, explique Montainge au chapitre II, 9, est d'abord et avant tout affaire de mobilité. Les combattants doivent donc pouvoir se déplacer rapidement dans l'espace, et à cette fin ne pas porter d'armes trop lourdes, susceptibles de les gêner dans leurs déplacements.

(45) Voir R. Barthes « L'effet de réel » dans *Littérature et réalité*, G. Genettes et T. Todorov, (sous la direction de), Paris, Seuil, 1966, 1982pp. 81-90.

(46) *Idem.*

(47) M. Mcluhan, *la galaxie gutenberg*, t. 1 et t. 2, trad. par J. Paré, University of Toronto Presse, 1962, Gallimard, Paris, 1977, pp. 44-47 : « Le Roi Lear est la première manifestation verbale, dans l'histoire de la poésie, de l'angoisse de la troisième dimension. ».

(48) M. M. Fontaine, « L'Espace fictif dans l'Heptaméron de Marguerite de Navarre » dans *Libertés et Savoir du corps à la Renaissance*, Paradigme, Caen, 1993, pp. 345-362.

ドゥルーズ『襞 — ライプニッツとバロック — 』のホワイトヘッド

吉　澤　　保

はじめに

『襞 — ライプニッツとバロック — 』（1988年）は，ジル・ドゥルーズによる独創的なバロック論，ライプニッツ論である。ここでライプニッツ哲学は，バロックの哲学として提示されている。九章構成のこの著作の第六章で，アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドが取り上げられる。ホワイトヘッド哲学は，ストア派，ライプニッツに続く，第三の出来事の哲学として，また，ライプニッツのバロックの哲学に対するネオ・バロックの哲学として，定位されている。出来事とバロックという二つの観点から，ホワイトヘッドは召喚されている。本稿が試みるのは，ホワイトヘッドを取り上げるこの章の記述に照準を合わせながら，ドゥルーズとホワイトヘッドとの関係に光をあてることである。この試みは単にこの章の参照だけに留まらない。ドゥルーズのホワイトヘッドに迫るには，ホワイトヘッドそのものに向かう必要がある。また，『襞』全体の読解を，つまりドゥルーズのライプニッツを，またドゥルーズの他の著作を，殊に最後の著作『哲学とは何か』（1991年）をも呼び寄せることになる。『哲学とは何か』には僅かながら，ホワイトヘッド，ライプニッツへの言及があり，本稿のテーマを考える際に不可欠である。

本稿は，キース・ロビンソンの論稿「襞の政治学的存在論に向けて：ドゥルーズ，ハイデガー，ホワイトヘッド，そして「四つ襞の」出来事」への反駁

も試みる。この論稿によれば，ドゥルーズは，襞という概念を展開させ，それを出来事という概念に結びつけるが，こうすることで，ライプニッツ，現象学と対決している。殊に，四つ襞の出来事（性起）という概念を展開する後期ハイデガーと対決している。この対決は，ドゥルーズの（後年の）著作において，確実にしかし間接的に行われているが，『襞』でもっとも顕著に見られる。この著作の主に第六章で，ドゥルーズは，ホワイトヘッド，殊にその出来事概念を援用するが，それは，ハイデガーの出来事の存在論を拡張して，「「is」が最後に「and」に屈する」に至らしむるためである。ドゥルーズは，襞という概念の展開によって，ライプニッツへ回帰しようとするが，それだけではなく，現象学を批判し，また，ホワイトヘッド的出来事によって，ハイデガー的存在の位置ずらしを行おうとしている。存在のこの位置ずらしがもたらすことになる新しい存在論は，同時に，新しい政治学，つまり，差異の政治学，非表象の政治学でもあろう[1]。

ロビンソンの以上のような論稿から本稿に関わる命題を取り出すなら，次のようになる。『襞』で，第一に，ドゥルーズは，ライプニッツ，ハイデガーと対決している。第二に，その際に，ドゥルーズは，ホワイトヘッドを援用している。ハイデガーが現象学的志向性を批判しながら，実はその志向性に囚われたままである，という点において，ドゥルーズは，自らの著作でハイデガーを批判しているが，本稿が認めるのは，この限りにおいてである。ハイデガーの四つ襞の出来事まで批判しているかどうかについては，本稿は考察しない。本稿は，ハイデガーそのものには向かわない。

ドゥルーズが『襞』でライプニッツと対決しているという第一の点について，本稿は反対する。確かに『差異と反復』（1968年），『スピノザと表現の問題』

1 Keith Robinson, « Towards a Political Ontology of the Fold: Deleuze, Heidegger, Whitehead and the “Fourfold” Event », in *Deleuze and The Fold: A Critical Reader*, Palgrave Macmillan, 2010, pp. 184-202. なお，引用において〈　〉が付される語は，原文中では大文字で始まる。引用における［　］内の記述は，論者による補足・説明などである。引用の原語はその訳語の直後に〔　〕内に示す。

（1968年），『意味の論理学』（1969年）などでは，ライプニッツは，両義的に取り上げられていた。つまり肯定と否定の両面で提示されていた。しかし『襞』は，ライプニッツを批判的に提示していない。本稿は，ドゥルーズとライプニッツそのものとの関係には立ち入らない。本稿が主題とするのは，ドゥルーズのホワイトヘッド論であるが，この点でドゥルーズのライプニッツ論は関係してくる。その限りで，本稿はライプニッツを取り上げる。ここで言うライプニッツはドゥルーズのライプニッツにすぎない。

『襞』がホワイトヘッドを肯定的に取り上げているという第二の点について，本稿は，ロビンソンに反対しないが，その説明についてはロビンソンに与さない。本稿が最終的に目指すのは，単にドゥルーズが提示するホワイトヘッドだけではない。ドゥルーズが提示するホワイトヘッドが，その肯定性において提示されていることに反対しないが，ドゥルーズのホワイトヘッドは，ホワイトヘッドそのものではない。ここに，ドゥルーズとホワイトヘッドとの対照の可能性がある。両者の共通性への理解を深化させることは重要であるが，両者の還元できない差異を看過しないこともそれに劣らず重要である。

1．究極的なもの ― ホワイトヘッド『過程と実在』

『襞』のホワイトヘッドの「出来事〔événement〕」はカオスから導出されるが，それに向かう前に，ホワイトヘッド哲学そのものがどのような理論的出発点をもつのかを垣間見ておく。ホワイトヘッドによれば，哲学は，具体化を説明するものではない。抽象的なもの（単なる意識・私的感覚・情動など，抽象的な能力など）を一次的なものとして，そこから我々の経験を説明することは退けられている。逆に，哲学は，具体的なものを一次的なものとして，抽象化を説明するものである。『過程と実在』第一部・第二章は，この著作の，後に詳細にわたって展開される議論を要約している箇所である[2]。「現働的な

2 Alfred North Whitehead, *Process and Reality*, The Free Press, 1978, part I, chapter II, section I.

〔actual〕直接経験の究極的〔ultimate〕事実は，現働的存在〔actual entity〕，抱握〔prehension〕，そして結合体〔nexūs〕である。他のいっさいは，我々の経験にとって，派生的な抽象である[3]」。つまり，我々の経験において最も具体的なもの，一次的なものは，「現働的存在（エンティティ）」，「抱握」，「結合体」に他ならない。

> 「現働的存在（エンティティ）」 ― 「現働的生起〔occasion〕」とも称される ― は，世界がそれから構成される終極的な〔final〕実在的な〔real〕物である。これよりも実在的なものを見出そうとして現働的存在（エンティティ）の背後を調べることはできない。それらは互いに相違している。神は一つの現働的存在（エンティティ）である。そしてはるか彼方の空虚の空間における最も瑣末な一吹きの実存〔existence〕もまた，そうである[4]。

現働的存在（エンティティ）は，「終極的な実在的な物」である。この背後に，もっと実在的な物を探すことはできない。言い換えれば，我々の経験を説明するために，現働的存在（エンティティ）の背後に向かう必要はない。そして現働的存在（エンティティ）は，様々に分析しうる。現働的存在（エンティティ）を抱握に分析する仕方（「区分」と呼ばれている）は，「現働的存在（エンティティ）の本性における最も具体的な要素を示す」ものだ[5]。抱握は，「関係性の具体的事実」である[6]。現働的存在（エンティティ）は，抱握し合うゆえに含み合っている。この含み合いという事実が現働的存在（エンティティ）の「共在性〔togetherness〕」であり，この共在性が「結合体」である。結合体は，現働的存在（エンティティ），抱握がそうであるように，実在的でかつ個体的なものである[7]。

第一部・第二章・第二節で提示されている四つの「範疇」のなかの一つ，「実存の範疇」は，この著作で登場する存在（エンティティ）をその例証（特殊事例）とする

3 *Ibid.*, p. 20. actual entity は actual に対応する仏語の actuel を「現働的存在（エンティティ）」と訳すのに合わせて「現働的」とした。
4 *Ibid.*, p. 18.
5 *Ibid.*, p. 19.
6 *Ibid.*, p. 22.
7 *Ibid.*, p. 20.

ものである。既に触れた，ⅰ）現働的存在（エンティティ），ⅱ）抱握，ⅲ）結合体の他に，ⅳ）主体的形相，ⅴ）永遠的客体，ⅵ）命題，ⅶ）多様体（多様性）〔Multiplicity〕，ⅷ）コントラストがあげられている。「実存のこうした八つの範疇のうちでは，現働的存在（エンティティ）と永遠的客体が，ある極端な終極性をもって際立っている」。永遠的客体は，「事実を特殊的に決定するための，純粋な潜勢態」あるいは「限定性の形相」である[8]。それはまた「プラトン的形相」である[9]。抱握は，物的抱握と概念的抱握とに分かれる。前者は，他の現働的存在（エンティティ）（結合体としての）を抱握するものである。後者は，永遠的客体を抱握するものである[10]。永遠的客体は，現働的存在（エンティティ）の一つである神の「原初的本性」を構成している。神の「結果的本性」は，他の現働的存在（エンティティ）に対する神の物的抱握から結果する。神は原初的本性（永遠的客体）として他の現働的存在（エンティティ）に働きかけるが，逆に反作用もうける[11]。

四つの範疇は，Ⅰ 究極的なものの範疇，Ⅱ 実存の範疇，Ⅲ 説明の範疇，Ⅳ 範疇的拘束〔obligation〕である[12]。上述したように，実存の範疇は，この著作で登場する存在（エンティティ）がその例証となるものであった。説明の範疇，範疇的拘束も同様である。Ⅰの究極的なものの範疇は，残りの三つの範疇において前提された一般的原理である。究極的なものの範疇の一つである「創造性」は，「究極的事態〔matter of fact〕を性格づける，普遍的なもののうちの普遍的なもの」である。それは，究極的原理であり，この原理によって，「離接的な仕方で〔disjunctively〕宇宙である多〔many〕が，接合的な仕方で〔conjunctively〕宇宙である一つの現働的生起となる」。共在性という究極的な形而上学的原理は，「離接〔disjunction〕において与えられた諸存在（エンティティ）とは別の，新しい存在（エンティティ）を創り出す，離接から接合〔conjunction〕への前進」で

8 *Ibid.*, p. 22.
9 *Ibid.*, p. 44.
10 *Ibid.*, p. 23.
11 *Ibid.*, pp. 31-32.
12 *Ibid.*, p. 20.

ある[13]。そして，これら究極的原理は現働的存在（エンティティ）において現れている。「現働的存在（エンティティ）の生成〔becoming〕においては，離接的多様性における多くの存在（エンティティ）の潜勢的統一性 ― 現働的でも非現働的でもある ― は，一つの現働的存在（エンティティ）の実在的統一性を獲得する[14]」。

究極的なものに着目して，この著作の一次的諸概念を一瞥したが，ここで確認しておきたいのは，現働的存在（エンティティ）であれ，永遠的客体であれ，創造性であれ，それら究極的なものが，通俗的に理解されるカオスには見えないということである。創造性において登場する離接としての多は，カオスに近いかのように見えるが，これは，創造性において接合たる新たな一に解消されるものにすぎない。

2．出来事 ― 『襞』のホワイトヘッド

まずホワイトヘッドの出来事の本性を問う第六章を概観する。例えば，「一人の男が車にひかれた」ということは，出来事である。「巨大なピラミッド」も，「その一時間，三十分間，五分間…の持続」も，「〈自然〉の推移」も，「神の推移」も，「神の一視点」も，すべて出来事とされる。ドゥルーズがあげる事例は，ホワイトヘッドの『自然という概念』から引かれている[15]。

「すべてが出来事であるための，出来事の条件とは何か。出来事は，カオスの中に，カオス的な多様体〔multiplicité〕の中に，生じる。ただし，それには，ある種の篩が介入することが条件である」。「すべて」が出来事であるためには，１）カオスとしての多様体，２）篩，が必要になる。カオスとしての多様体に篩をかけることによって，出来事は生ずる。しかしながら，カオスその

13 *Ibid.*, p. 21. disjunction と conjunction には，自然学的あるいは生物学的意味だけではなく，論理学的意味も込められている。前者は「選言」，後者は「連言」でもある。

14 *Ibid.*, p. 22. 強調はホワイトヘッドによる。

15 Gilles Deleuze, *Le pli : Leibniz et le baroque*, Minuit, 1988, pp. 103. Whitehead, *Concept of Nature*, Cambridge University Press, 1920, p. 69, p. 74, p. 165. ただし神については明示的に語っているわけではない。

ものが「実存しているのではない」という。カオスそのものは，「抽象されたもの」にすぎない。カオスが，本来的に篩から不可分であることがその理由とされる。つまり，カオスと篩は常に共にある。篩を強制的に剥ぎ取ることによって，カオスの本性が，遡及的に構成されうるにすぎない。篩を捨象したカオスは，「純粋な〈多〉」，「純粋な離接的多様さ」とされている。このようなカオスが篩を通過することで，「何か（無ではなく）」が出現する。「何か」は「〈一者〔One〕〉」であるが，まだ「統一性〔unité〕」つまり「個体（抱握）」ではない。「任意の特異性〔singularité〕」，「不定冠詞」である。これは，後述する外延である。篩は，「弾力的でかつ形相のない膜」，「電磁場」，「［プラトンの］『ティマイオス』の受容者」に見立てられている。ここでカオスのイメージを提示するにあたり，ドゥルーズは，ホワイトヘッドではなく，ライプニッツの考えに，つまり，「可能なものの集合」，「無底の闇」，「無限小のものないしは無限に小さいもの，としてのありうべきすべての諸知覚，の集合」に依拠している。後述するように，ホワイトヘッドは，『襞』のライプニッツに合わせて改変されている[16]。

このように，篩を備えたカオスから，すべては，つまり出来事は，生ずる。出来事には四つの構成要素がある。1）「外延〔extension〕」，2）「内包〔intension〕」，3）「個体」，4）永遠的客体。構成要素はこの順序で導出される。

外延が存在するのは，「一つの要素〔élément〕が後続する諸要素上で広がり，この要素が一つの全体となり，後続する諸要素がその諸部分となるという場合」である。ドゥルーズが敷衍するところによれば，外延は，それ自体「一つの部分」であり，なおかつ「諸部分をもつ」ものである。ドゥルーズは，外延を，フラクタルな洞窟に喩えている。「洞窟さえも，カオスではなく，一つの系列〔série〕である。その［この系列の］要素は更に，ますます微細になってゆく物質に満たされた洞窟である。これらの洞窟の一つ一つは，後続する洞窟に及んでいる」。このように，外延の定義は，部分から全体へ向かうの

16 *Le pli*, pp. 103-104.

ではなく，全体からその諸部分へ向かって行われている。この点は重要である[17]。外延は，「全体と諸部分との連結〔connexion〕」であり，「最終項も極限〔limite〕もない無限的系列」を構成している。音波・光波などの振動，時空が外延である。外延は，「不定冠詞」，「無よりもむしろなにか」，「任意の特異性」とも形容されている[18]。

内包は「内的な〔intrinsèque〕諸特性をもつ」ものである。外延も既に内的諸特性をもつが，内包において内的諸特性は，外延とは異なる新たな無限的系列を構成する。内包の無限的系列は，「極限に向かって収束している」。また，「諸極限の間の関係は，接合〔conjonction〕を生み出している」。音の高さ・強度・響き，色の調子・価値・飽和度，物質などが内包である。内包は，「強度〔intensité〕」，「度合〔degré〕」，「物〔chose〕」，「あれよりもむしろこれ」，「指示代名詞」とも呼ばれている[19]。

個体の記述は三つの観点に区別できる。1）個体は，まず外延と内包とから導き出されている。外延と内包とはそれぞれ要素と呼ばれるが，個体は，「諸要素の合生〔concrescence〕」である。2）個体はまた「抱握〔préhension〕」でもある。「すべての物は，自らに先行するものと，自らに随伴するものとを，抱握している。そして，近傍から近傍へ〔de proche en proche〕世界を抱握している」。「抱握のベクトルは，世界から主体へと向かっている」。抱握の与件は，抱握の「公的な諸要素」であり，抱握の主体は，「内密のあるいは私的

17 時空は外延である。『科学と近代世界』でホワイトヘッドは，カントが『純粋理性批判』で示す「外延量」と「内包量」とを取り上げる。カントの議論では，外延量は部分が全体に先行し，内包量は全体が部分に先行する。ホワイトヘッドは当然，時間を内包量 ― 『襞』の用語法でいう外延に相当 ― とする。「時間は原子的（つまりエポック的［つまり不可分的なもの］）である。しかし時間化されるものは分割可能である」（Whitehead, *Science and the Modern World*, The Free Press, 1925, pp. 125-126.）。時間だけではなく外延において全体は，その諸部分からつくられるのではなく，一挙に与えられる。吉澤，「ドゥルーズにおける出来事 ― ホワイトヘッドとともに ― 」，『津田塾大学』第43号，2011年，pp. 303-328.

18 *Le pli*, p. 105.

19 *Ibid.*, p. 105.

な要素」であり，私的な要素は，「直接性，個体性，新しさ」を表している。3）抱握されるものもまた抱握であり，「あらゆる抱握は抱握の抱握」である。それ自体「私的な」抱握は，他の抱握に対して「公的なもの」である。あるいは，抱握は，他の抱握を客体化し，他の抱握にとって自らを客体化する。抱握は，公的なものかつ私的なもの，潜在的なものかつ現働的なもの，である[20]。

抱握には更に，「主体的形相」，「主体的目標」，「最終的段階としての満足」という三つの性格がある。1）主体的形相は，「データが主体において表現される仕方である。あるいは，主体がデータを能動的に抱握する仕方である」。主体的形相には，情動〔émotion〕，評価〔évaluation〕，計画，意識などがある。この形相において，「データは，主体の中に折り畳まれている。形相とはつまり，「感じ〔feeling〕」あるいは様式である」。2）主体的目標は，「抱握における一つのデータから別のデータへの移動，生成〔devenir〕における一つの抱握から別の抱握への移動，を可能にし，未来をはらんだ現在に過去を導き入れる」。3）最終的段階としての満足は，「主体が，抱握が自分自身のデータで満たされる際に，ますます豊かな私的生に到達しながら，自己［主体自身］に満たされる仕方，を示している」。それは，「自己享受〔self-enjoyment〕」であり，「聖書的かつ新プラトン主義的観念で，イギリス経験論はこれを最も高度な点にまで高めた（とりわけサミュエル・バトラー）。植物は，神の栄光を歌っている[21]」。

外延，内包，個体が「流れ」であるのに対して，永遠的客体は，「恒常性」，

20 *Ibid.*, pp. 105-106.

21 *Ibid.*, pp. 106-107.「表現することは常に，神の栄光を歌いたたえることである。すべての地層が神の裁きであるからには，歌を歌い，自己を表現しているのは，植物と動物，蘭と雀蜂，ばかりではない。岩山も河の流れさえも，およそこの地球［大地］上にある地層化された一切のものが歌っている」。Deleuze, Guattari, ***Mille plateaux***, Minuit, 1980, p. 58. ホワイトヘッドの抱握は，『千のプラトー』で言う「地層」に相当する。地層は「形相」と「実体」とからなり，「組織と展開の平面」上にある。この点は後述する。また『襞』と刊行時期の近い『哲学とは何か』でも同様の記述がみられる。Deleuze, Guattari, ***Qu'est-ce que la philosophie ?***, Minuit, 1991, p. 200. この点も後で取り上げる。

「あらゆる瞬間を通じて同じままに留まる」もの，である。流れにすぎないものに対して「これは，同じ川だ，同じ物だ，あるいは，同じ機会だ」と言うことができるのは，永遠的客体があるからだ[22]。また別の観点から言えば，外延，内包こそが流れであり，個体は抱握である。永遠的客体は「流れのなかで実現される純粋な〈可能性〔Possibilité〕〉である。また，抱握の中で現働化される純粋な〈潜在性〔Virtualité〕〉でもある」。後述するが，ホワイトヘッドの出来事は，ライプニッツに合わせて，物の側面（外延，内包）と，魂の側面（個体）とに分けられている。永遠的客体は，物の側面に対応する可能性であり，魂の側面に対応する潜在性でもある。永遠的客体は，出来事の中に「進入する」ことから，「進入〔ingression〕」でもある。具体的には例えば，永遠的客体は，１）音，色のような〈質〉，２）ピラミッドのような〈形態〔Figure〕〉，３）金，大理石のような〈物〉である[23]。

『襞』では，純粋な離接的な多から一者が生ずるとされる。『過程と実在』で，創造性あるいは現働的存在（エンティティ）は，離接的な多から接合的な一が生ずることであった。この限りでは，両者は一致している。

１．しかしながら，そもそも『過程と実在』は，離接的な多自体を一次的なものとしているわけではない。離接的な多は，究極的なものを規定する上で言及されるにすぎない。『襞』はカオスを一次的なものとしている。『過程と実在』では，多から新たな一への生成は創造性による。『襞』では多に既に創造性があり，篩は抽出するものにすぎない。離接的な多あるいはカオスに，『過程と実在』は創造性を認めていないのに，『襞』は認めている[24]。

22『差異と反復』で，再認は，存在の類比の側に属するものとして批判された。Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, pp. 174-175, etc.

23 *Le pli*, pp. 108-109.

24「多様体を，別の六種類のいずれかの存在（エンティティ）に属する統一性をもっているかのように取り扱うことは，論理的錯誤を生む。［中略］多様体に関する創発的進化はない」。*Process and Reality*, p. 30.「多様体」は，離接的多であり，上述した『過程と実在』実存の範疇の vii) 多様体のことである。「別の六種類」の存在（エンティティ）とは，「ｉ）現働的存在（エンティティ），ii）抱握，iii）結合体，iv）主体的形相，ｖ）永遠的客体，vi）命題」の

２．『襞』によれば，カオスの篩から，外延，内包，個体，永遠的客体が，この順序で，後続するものが先行するものからという仕方で，導出される。『襞』の一が単なる要素（外延）にすぎないのに対して，『過程と実在』の一は現働的存在（エンティティ）である。『襞』では，現働的存在（エンティティ）に相当する個体（抱握）は三番目の構成要素にすぎない。永遠的客体も四番目の構成要素にすぎない。『過程と実在』では，現働的存在（エンティティ）と永遠的客体こそが，一次的概念であるが，『襞』では，これらの要素は四つの要素の一部に過ぎない。

３．『襞』では，外延，内包は物質的なものであり，個体，永遠的客体は精神的なものである。このように，物質的なものと精神的なものとの二元性が際立っている。『過程と実在』は，二元性を認めるにしても，現働的存在（エンティティ）を超えない。ホワイトヘッドは，自然哲学に留まっていた時期から思弁的形而上学を構築する時期へと移行したが，『襞』にはこれらの二つの時期の要素が混在している[25]。

３．世界の包摂 ― 『襞』のライプニッツ

第六章で論じられた出来事は，ホワイトヘッドだけではなく，ライプニッツにも帰せられている。構成要素のそれぞれにおいて，ライプニッツの対応する概念への言及が見られる[26]。出来事概念は，ホワイトヘッドのものだけではなく，ライプニッツのものでもある。また『襞』全体で，ホワイトヘッドはライ

ことである。多様体は以下なども参照。*Ibid.*, p. 24. 離接の多様体と，接合の一者（現働的存在（エンティティ））とのうち，ドゥルーズは前者に，ホワイトヘッドは後者に，一次性をみている。

25 ホワイトヘッドは，応用数学の教授としてロンドン大学に在籍する間に，自然哲学三部作と称される『自然哲学の認識論的諸原理』（1919年），『自然の概念』，『相対性の原理』（1922年）を刊行する。1924年ハーヴァード大学に哲学教授として招聘されアメリカに移住してから，形而上学三部作と呼ばれる『科学と近代世界』（1925年），『過程と実在』，『観念の冒険』（1933年）を上梓する。このように通常，自然哲学の時期と形而上学の時期とは区別される。

26 例えば *Le pli*, p. 107, p. 109, etc.

プニッツに対応させられている。『襞』のホワイトヘッドを定位するには，『襞』のライプニッツにも目を向ける必要がある。

『襞』のライプニッツ哲学の構図は次の通りだ。「それ［世界］は，魂において現働化され〔s'actualiser〕，物体［身体］〔corps〕において実在化される〔se réaliser〕[27]」。ライプニッツにおいて，一次的にあるものは世界に他ならない。そして，世界から出発して，まず魂が，次に物体が，成立する。もちろんこれは，時間的にこの順序で成立するということでは決してない。そして，世界も魂も物体もいずれも襞であり，魂と物体との間も襞である。しかもこれらの襞はいずれも無限に至る。ライプニッツ哲学がバロックの哲学たる所以である。バロックは「無限に至る襞」と定義される[28]。

> それゆえ世界は二度折り畳まれる。世界は，それを現働化する魂において畳まれ，それを実在化する物体において更に折り畳まれる。それぞれの場合に，魂の本性に対応する，あるいは物体の規定に対応する，法則の体制に従いながら，そうされる。そして，二つの襞の間には，間襞〔entre-pli〕，〈二襞〔*Zwiefalt*〕〉，二つの階の屈曲部，不可分性の帯域〔zone d'inséparabilité〕 ― それは，蝶番，縫い目をなす ― ，がある[29]。

物体のほうが「折り目〔repli〕［接頭辞 re-］」で魂のほうが襞〔pli〕である理由は，以上の点を理解するなら，首肯できる。『襞』第一部「襞」が，下から上への言わば自然な順序に従い，第一章で物体を，第二章で魂を，取り上げるのに対して，『襞』第三部「物体をもつこと」は，魂から物体への移行を主題として取り扱う。

しかしながら『襞』のライプニッツ哲学はもう一つの構図をもつ。第二章では，屈折〔inflexion〕から包摂〔inclusion〕への移行が示される。言い換えれ

27 *Ibid.*, p. 163.
28 *Ibid.*, p. 5.
29 *Ibid.*, p. 163. 強調はドゥルーズによる。

ば，包摂は，屈折である世界からモナド（魂）に向けて行われる（屈折からの包摂は後述する）。第四章は，この包摂を拡張している。包摂は，もはやモナドに限らない。第四章は，充足理由を，つまり包摂を，主題とする。第一章，第二章が，既に物体と魂との区別を前提に議論を展開していたのに対して，第四章は，世界との関係で広く包摂を考察している。別の言い方をすれば，一つの包摂を，つまり魂への包摂を，論じた第二章に対して，広く包摂一般を考察している。四種類の包摂は次の通りだ。１）「〈同一的なもの〔Identique〕〉」，２）外延，３）内包，４）モナド。それぞれの主体は，第一番目が神，第二・第三番目が物質，第四番目が魂，である。なお，第三部で魂から物質への実在化が主題となる。

世界は無限なものであるが，四種類あるその包摂もそれぞれ無限である。

> ［１：同一的なもの］始原的諸形相の無限的集合（＝神）。［２：外延］極限のない無限的諸系列。［３：内包］内的（アントランセック）な極限をもつ無限的諸系列。［４：モナド］外的な〔extrinsèque〕極限をもつ無限的諸系列。これらの四つの包摂は，無限的集合（＝〈世界〉）を繰り返し与える〔redonner〕[30]。

つまり，各々の包摂はそれぞれの仕方で世界を包摂している。そして，第四章は，概念の相互の関係（定義）についての考察から第一の包摂を導出し，第一の包摂から第二の包摂を導出し…この順序で第四の包摂までを導出している。つまり，同一的なもの，外延，内包（物），モナド（個体）を導出している。それぞれの包摂は，先行する包摂から導出されるが，同時にそれぞれの包摂は世界の包摂である。

第六章のホワイトヘッドの議論では，出来事の四つの要素として，外延，内包，個体，永遠的客体が示された。外延，内包，個体は，その順序とともに，ライプニッツの包摂の議論と重なっている。永遠的客体も同一的なものも共に

30 *Ibid.*, p. 69. 個々の包摂の詳細は以下を参照（*Ibid.*, p. 77の表も参照）。
1 : *Ibid.*, pp. 58-60. 2 : *Ibid.*, pp. 60-63. 3 : *Ibid.*, pp. 63-66. 4 : *Ibid.*, pp. 66-69.

神にある。この点から，永遠的客体は同一的なものに相当すると言うことができる。永遠的客体（同一的なもの）の順序の違いはあるものの，四つの要素は同じである。『襞』は，ライプニッツとホワイトヘッドとを，言わば収束させようとしている。第六章と第四章との対応関係を看過するわけにはゆかない。ホワイトヘッドの出来事の四つの要素は，ライプニッツの四つの包摂と関係づけて理解する必要がある。どちらがどちらにせよ（あるいは両者ともにせよ），両者はドゥルーズによって近づけられている。

4．単なる出来事としての世界 ― 『襞』のライプニッツ

一次的なものはホワイトヘッド論ではカオスであったが，ライプニッツ論では世界である。両者は出発点において完全に対立するかに見えるが，ライプニッツの世界概念を紐解いてみると，両者の対立は影を潜める。むしろ消失する。

ライプニッツの世界は「〈単なる出来事〔Eventum tantum〕〉」からなる[31]。「単なる出来事」とは，通常我々が考える出来事ではない。我々が目撃する交通事故は，モナドにおいて現働化されたものであり，かつ，物体において実在化されたものである。このような現働化，実在化以前の出来事が，単なる出来事である。先述したホワイトヘッドの出来事とも異なる。「世界＝単なる出来事」は我々の直接的な経験を超えている。単なる出来事はドゥルーズ哲学の最も重要な概念である。『意味の論理学』で「出来事＝特異性＝意味＝生成」として論じられた[32]。そもそもこの出来事概念は，『差異と反復』の「個体化〔individuation〕」の肯定的側面を継承している[33]。『千のプラトー』では「此性〔heccéité〕」などとして，また『哲学とは何か』では「概念〔concept〕」とし

31 *Ibid.*, pp. 141-142.

32 Deleuze, ***Logique du sens***, Minuit, 1969, p. 9, p. 30, p. 68, p. 125.

33 吉澤，「ドゥルーズにおける個体化 ― 『差異と反復』から『意味の論理学』へ ― 」，『仏語仏文学研究』，東京大学仏語仏文学研究会，第38号，2009，pp. 59-78.

て捉え直される[34]。ドゥルーズ哲学は，「存在の一義性〔univocité de l'être〕」と「存在の類比〔analogie de l'être〕」との区別を前提にしている。ドゥルーズ哲学は存在の一義性の哲学である。単なる出来事こそが，存在の一義性の本体である。存在の一義性は「内在〔immanence〕」，「存在の類比」は「超越〔transcendance〕」，「表象〔représentation〕」でもある[35]。『襞』で，単なる出来事は，「理念性としての純粋な屈折」，「中性の特異性」，「非物体的なもの〔incorporel〕」，「非情なもの〔impassible〕」，「純粋な潜在性と可能性」，「純粋な述語」，「〈円環〔Cercle〕〉」，「蔵〔réserve〕」，「死」など様々な言い方で表現されている[36]。

世界は『襞』に特有な仕方で規定されている。「屈折は，線ないし点の，純粋な〈出来事〉であり，〈潜在的なもの〉，勝義の理念性である。［中略］それは〈世界〉それ自体であり，むしろその始まりである[37]」。「屈折」という襞は，「世界＝単なる出来事」と等しいことからも明らかなように，我々が直接的に経験できるものではない。この屈折こそが，世界から，モナドへの現働化と物体への実在化とを記述する。それを試みる『襞』第二章を瞥見するなら，ドゥルーズは，ベルナール・カッシュの議論を参照しつつ，屈折と，それに起こりうる三種類の「変容［変形］〔transformation〕」とについて述べている。ここでは，屈折から，新たな「物体（対象）」概念への生成を示そうとしている。ここで示される「オブジェクティル〔objectile〕」は「本質主義的な対象」ではない。通常，物体は，素材に形（「本質」）が与えられて出来上がるという風に，陶磁器のイメージで捉えられる。オブジェクティルは，このように空間的，固定的（静的）なものではなく，時間的，質的，流動的（動的）なものである。

---

34 *Mille plateaux*, p. 633. *Qu'est-ce que la philosophie ?*, p. 23, p. 26.

35 吉澤，「人間の尊厳と出来事の尊厳 ― ホワイトヘッドとドゥルーズ ― 」，『桜文論叢』第99号，2019年，pp. 21-55, par., pp. 37-38.「ドゥルーズにおける出来事 ― ホワイトヘッドとともに ― 」参照。

36 *Le pli*, pp. 141-142.

37 *Ibid.*, p. 21.「屈折は，それを包み込む魂においてのみ現働的に実存する理念性ないし潜在性である」。*Ibid.*, p. 31.（他に *Ibid.*, p. 20.）

つまり「マニエリスム的対象」である[38]。

屈折からモナドは生じる。「我々は，変化する〔variable〕湾曲〔courbure〕から（凹の側の）湾曲の焦点に，変化〔variation〕から観点に，襞から包まれた状態〔enveloppement〕に，要するに，屈折から包摂に，移った[39]」。屈折という「曲線」の両側は，凹状の側と凸状の側とに分けられる。ドゥルーズの考えでは，屈折から，凹状の側の「焦点」 ― これは既に「屈折」上ではない ― への移行が，「観点〔point de vue〕」の，更には「主体」の，発生を記述することになる[40]。

このように屈折から出発して，物体とモナドとが出現する。ドゥルーズは，その一流の素朴な仕方で，「世界＝屈折」からの，現働化と実在化とを描こうとしている。この屈折自体を経験することは不可能であるが，我々の経験はこの屈折なしには生じない。

> 我々は，出来事を表現する魂と，出来事を実現する〔effectuer〕物体とに既に組み入れられた出来事についてしか，語りえない。しかし，そこから逃れるあの部分がなかったら，我々は，出来事について全く語ることができないだろう[41]。

『襞』が描くライプニッツ哲学は，単なる現働的かつ実在的経験に留まるのではなく，それを超えた「超越論的哲学」である。「ライプニッツの超越論的哲

---

38 *Ibid.*, pp. 20-27.

39 *Ibid.*, p. 30.

40「屈折の一つの分枝から出発して，我々は，次の点 ― 屈折上を走る点でも屈折点そのものでももはやない点，変化（ヴァリアシオン）状態にある［屈折の］諸接線に対する諸垂線が［相互に］交わる点 ― を決定する。これは，厳密に一つの点というわけではない。一つの場所，一つの位置，一つの地勢〔site〕，一つの「線的な焦点」 ― 諸線から出現する線〔ligne issue de lignes〕 ― である。それ［この点］は，それが変化（ヴァリアシオン）あるいは屈折を表象する限りにおいて，観点と呼ばれる」。*Ibid.*, p. 27. 同頁の図も参照。

41 *Ibid.*, p. 142.

学は，現象よりもむしろ出来事を対象としている。カント的な条件付けを，超越論的現働化・実在化という二重の操作によって，置き換えている（アニミズムと唯物論）[42]」。

5．無限としての世界 ― 『襞』のライプニッツ

このように，世界の要素は，単なる出来事，屈折である。それでは世界全体はどうなっているのか。世界は，「無限に無限な〔infiniment infini〕，唯一の収束する〔convergent〕系列」である[43]。「世界は，無数の曲線〔courbe〕に無限の点において接する無限な曲線であり，唯一の変数〔variable〕をもつ曲線であり，あらゆる系列の収束する系列である[44]」。系列は特異性からなる[45]。屈折は曲線を構成するが，それは元々，屈折上を走る「点」であり，更に「屈折点」でもある[46]。この意味で屈折も特異性であり，系列を構成する。「単なる出来事＝屈折＝曲線」は特異性であり，それらは無限に無限な系列を構成している。

既に見たように，世界は屈折であった。ここでは曲線は屈折とほぼ同じものを指している。屈折には三種類の変容が可能であった。三つ目の変容には無限があらわれている。「最後に，屈折それ自体は，無限の変化（ヴァリアシオン）から，ないしは無限に変化する（ヴァリアブル）湾曲から，不可分である[47]」。一つの屈折は既に無限なものである。つまり，無限であるのは，世界全体のみならず，世界の部分もそうである。世界は，フラクタルなものとして，全体と部分との自己相似性をもつ[48]。

---

42 *Ibid.*, p. 163.
43 *Ibid.*, p. 67.
44 *Ibid.*, p. 34. ドゥルーズによる強調。*Ibid.*, p. 80.
45『襞』では四種類の特異性がある。1）屈折。2）「凹の側の曲線の中心」，「モナドの観点」。3）「顕著なもの〔le remarquable〕」，つまり，「モナド」の中における「知覚」を構成する要素。4）「物質」あるいは「広がり〔étendue〕」における「極値」。それぞれ，1が世界に，2，3がモナドに，4が物体に，属する。*Ibid.*, p. 121.
46 *Ibid.*, p. 20.
47 *Ibid.*, p. 23.
48 *Ibid.*, p. 23, p. 62, pp. 104-105.

世界はモナドによって現働化される。つまり「表現」される。また，物体によっても実在化される，つまり「表現」される。世界についての二つの表現があることになるが，二つの世界があるわけではない。世界は「唯一」のものである。少なくとも，同一の世界に所属するモナドと物体とによって表現される世界は，唯一のものである[49]。

ライプニッツのオプティミズムによれば，神は，無数の可能世界から唯一の最善の世界を選ぶ。アダムが罪を犯さない世界，セクストゥスがルクレティウスを犯さない世界などは，現働化されているが，実在化されていない。つまり可能世界に留まる。これらの世界は，唯一の世界から，「不共可能な〔incompossible〕世界」として排除される[50]。ライプニッツのバロックに対して，ホワイトヘッドなどの立場はネオ・バロックになるが，ネオ・バロックでは，共可能性，不共可能性という基準は世界の選別の基準とはならない。不共可能な諸世界（同じことだが，発散する諸系列）も同一の世界に含まれる[51]。

引用したように，世界は「収束する」ものである。「収束する諸系列」からなる。上述したことからも明らかなように，世界の収束性は，その唯一性に等しい。収束する諸系列こそが，同じ一つの世界を構成する。これこそが「共可能的〔compossible〕世界」である。この共可能的世界から発散する諸系列は，もはや同じ共可能的世界を構成しない。不共可能的世界になる[52]。

しかしながら，ドゥルーズの記述からは，世界は常に生成し，新たな特異性が放出されつつあるかのようである。「世界は，特異点の周りで，互い［の系列］において伸展可能な，無限な収束する諸系列である[53]」。新たに生まれた

49「表現」は，ドゥルーズ哲学で常に重要であり，殊に『スピノザと表現の問題』で主題として取り上げられた。以下も参照。吉澤，「ドゥルーズの個体化 ― ライプニッツを中心に ― 」，『仏語仏文学研究』第45号，東京大学部仏語仏文学研究会，2012年，pp. 107-127.

50 *Le pli*, p. 140. *Ibid.*, p. 93.

51 *Ibid.*, p. 80, p. 90, pp. 110-111, pp. 188-189.

52 *Ibid.*, p. 80.

53 *Ibid.*, p. 80.

特異性が，一つの世界に収束すればその世界を構成し，発散すれば別の世界を構成することになる。「それ［世界の戯れ］は，収束・発散の規則を確立し，この規則に従って，これらの可能なものの諸系列は，無限的集合として組織される。個々の集合は共可能的であるが，二つの集合は互いに不共可能的である[54]」。つまり，『襞』では明らかに，一つの可能世界は，他の不共可能な諸世界を前提にしている。神が，それら可能な諸世界から最善の世界を選んでいるからだ。可能な諸世界すべてから出発するとするなら，第六章のホワイトヘッドの議論により近づくであろう。可能な諸世界すべては相互に発散している。通俗的なライプニッツ解釈では，「本質命題（必然的真理）」は可能諸世界すべてで真理とされるが，『襞』はこの解釈を採用しているようには見えない。ドゥルーズの可能諸世界全体は，本質命題が強制するこの必然的限界をもたないため，実質的なカオスにより近づくように見える[55]。

ライプニッツの場合，世界からの包摂がなされるのに対して，ホワイトヘッドの場合，カオスからの篩による抽出がなされる。この点に両者の差異がまずある。ホワイトヘッドの場合，ライプニッツ的な意味での包摂は存在しない。包摂との対比でホワイトヘッドの抱握を考察する必要がある。そしてこの点に，ドゥルーズのホワイトヘッドへの批判を見ることができるかもしれない。『襞』では，ハイデガーとの比較でライプニッツの包摂を正当化する議論が行われていた。ハイデガーの「世界内存在」が世界に対して開かれているのに対して，ライプニッツのモナドは世界に対して閉じている。この閉鎖性にドゥルーズは肯定性をみていた。ホワイトヘッドも，ハイデガー同様，開放性の側にたつが，ハイデガーにおけるように批判されているようには見えない。この問題は後で取り上げる。

『襞』のライプニッツでは，世界から，同一的なもの，外延，内包，モナドがこの順序で導出される。同様に，『襞』のホワイトヘッドでは，カオスから，

54 *Ibid.*, p. 89.
55 本質命題については以下を参照。*Ibid.*, pp. 56-57, pp. 69-70, etc.

外延，内包，個体，永遠的客体がこの順序で導出される。ところで，包摂のなかに同一的なものがあるが，あるいは同一的なものが一番の包摂であるが，これはどういうことか。通常の解釈では，ライプニッツは本質から出発するとされる。つまり，モナドは本質からできているとされる。実際，『差異と反復』では，ドゥルーズも，ライプニッツを，「無限な表象」の哲学に属するものとして，「総合的同一性」のヘーゲルに対する「分析的同一性」に属するものとして，位置づけていた。つまり，本質，可能的なものは，『差異と反復』では，存在の類比の側のものとして批判されていた[56]。同一的なものは明らかに，『差異と反復』の，本質，可能的なものに相当するように見える。しかし『襞』では，同一的なものは，『差異と反復』の場合と異なり，批判されていない。同一的なものは「属性」とされ，この点で唯一，述語とされる他の包摂とは異なる。しかし，同一的なものは，相互に「非関係〔non-rapport〕」にあるとされ，このため批判されない。要は，同一的なものは，「非関係」ゆえに，知的ヒエラルキーを構築しない。知的ヒエラルキーこそが存在の類比をつくりだすものであった[57]。

一番目の包摂として同一的なものが必要なのは，ライプニッツ哲学には，このような「無限的形相」の位置づけも欠かすことができないからである。ドゥルーズは，可能的なものあるいは同一的なものに代えて，出来事から世界を構築するが，ライプニッツを対象とする以上，神の属性である無限的形相に対しても，しかるべき位置づけを与える必要がある。

同一的なものが，相互に非関係にある以上，同一的なものの集合をカオスとみなすこともできるかもしれない。そうすると，同一的なもの（＝カオス），外延，内包，モナドという順序での導出は，ホワイトヘッドの，カオス，外延，内包，個体の順序での導出とまったく重なる。実際，既に見たように，第六章で，ドゥルーズは，ホワイトヘッドのカオスを記述するのに，ライプニッツの

56 *Différence et répétition*, pp. 242-244.「ドゥルーズの個体化 ― ライプニッツを中心に ― 」参照。
57 *Le pli.*, pp. 58-60.

「可能的なものの集合」を援用している[58]。また，後述するように，『哲学とは何か』で，カオスは，「諸規定が素描されそして消失する際の無限的速度」，「二つの規定の間の関係の不可能性」とされる[59]。晩年のドゥルーズは，出来事間の相互発散と，可能的なもの（規定）間の関係の不可能性とを，重ね合わせている。

ホワイトヘッドのカオスを，ライプニッツの唯一の可能世界（あるいはすべての可能世界）に対応させるにせよ，同一的なものに対応させるにせよ，ホワイトヘッドがライプニッツに近づけられているのが分かる。第六章は，第四章との対比で構想されている。その逆もまたそうである。『襞』は両者を不可分なものとしている。

6．二階の哲学 ― 『襞』のライプニッツ

『襞』のホワイトヘッドは，外延，内包，個体，永遠的客体という順序で導出された。つまり大きくは，物質性（外延，内包）から精神性（個体，永遠的客体）へという順序である。これは『襞』のライプニッツも同様だ。包摂の導出は，物質性（外延，内包）から，精神性（モナド）へという順序になっている。ここで明らかにホワイトヘッドは，ライプニッツに近づけられている。ライプニッツ哲学は，魂と物質の二元論哲学として提示されている。正確にはそれは，先に見たように，アニミズムと唯物論である。「あたかも，無限は，物質の折り目と，魂の襞という二つの階をもつかのようである」。下の階は「物質とその諸部分とにおける連続的なものの迷宮」であり，上の階は「魂とその諸述語とにおける自由の迷宮」である。迷宮は語源的に「多〔multiple〕」，まさに多様な襞である[60]。

この哲学は，魂と物質との直接の交流を禁ずるデカルトの二元論とは異なる。むしろ，上の階と下の階とは交流している。「確かに二つの階は交流している

58 *Ibid.*, p. 104.
59 *Qu'est-ce que la philosophie ?*, pp. 44-45.
60 *Le pli*, pp. 5-6.

〔communiquer〕（それゆえに連続的なものは魂の中に上昇してくる）。下の方に感覚的，動物的な魂がある。あるいはもっと言えば，魂の中に下の階がある。そして物質の折り目がこれらの魂を囲み，包みこんでいる」。しかしながら，よく知られているように「モナドに窓はない」。つまり上の階では交流はない[61]。

ライプニッツの哲学にはこのような二元性がある。そして第四章の包摂には，同一的なものはおくと，物質（外延，内包）と，モナド（魂）からなる二元性が確認できる。このようなライプニッツの二元性に，ホワイトヘッドに見られる二元性も対応している。物質（外延，内包）と魂（抱握）が見られる。また，永遠的客体は，魂において現働化し，物質において実在化する。「抱握は常に，現働的なものである（一つの抱握は，他の現働的抱握との関わりでだけ潜勢的である）。その一方で，永遠的客体は，流れのなかで実現される純粋な〈可能性〉である。また，抱握の中で現働化される純粋な〈潜在性〉でもある[62]」。このような二元性の強調に対応するものは，現働的存在（エンティティ），永遠的客体を一次的とみる『過程と実在』には見られない。精神性と物質性との対比は確かにあるが，現働的存在（エンティティ），永遠的客体のなかに位置づけられているにすぎない。例えば，現働的存在（エンティティ）の抱握は三つの要因からなっている。1）「抱握しつつある主体」である現働的存在（エンティティ），2）「抱握される与件」，3）「その主体がその与件をいかに抱握するかの主体的形相」。この場合の1）と3）は言わば精神性の側にある。生成である現働的存在（エンティティ）は，相関する現働的世界（物質性）から出発して最終段階の満足に至る経験する主体性である。2）の抱握される与件は，既に見たように，物的抱握と概念的抱握と分かれる。物的抱握は，他の現働的存在を抱握することであり，概念的抱握は，永遠的客体を抱握することだ。存在〔being〕となっている客体としての現働的存在（エンティティ）が，言わば物質的なものである。概念的抱握の永遠的客体は精神的なものである[63]。『過程と実在』では，現働的存在（エンティティ）（と永遠的客体）以外に実在性が，それゆえに物質性

61 *Ibid.*, p. 6.
62 *Ibid.*, p. 108.
63 *Process and Reality*, p. 23.

も，求められることはない。

7．『哲学とは何か』のライプニッツとホワイトヘッド

『差異と反復』ではライプニッツは両義的に評価されていた。一方で，無限な表象の哲学として，ヘーゲルとともに批判されていた。両者ともに「同一性」から哲学を構築していた。ヘーゲルは総合的同一性の側に，ライプニッツは分析的同一性の側に，位置づけられていた[64]。他方でライプニッツは，世界の先行性を条件とすることで肯定的にも解釈された[65]。一方『襞』では，ライプニッツは，その最大の肯定性において提示されているように見える。批判されているようには見えない。そしてこのようなライプニッツにホワイトヘッドは近づけられている。ドゥルーズは両者をどのように考えていたのか。

この問題を考えるために，『襞』と執筆時期の近い『哲学とは何か』に向かう。ここでは哲学，科学，芸術とは何かが論じられている。『襞』のホワイトヘッド論におけるように，この著作の一次的なものも，カオスである。ところで，この著作によれば，カオスは，我々を物心両面で脅かす敵であり，我々は，カオス ― 殊に心的カオス ― から自らを守るために「オピニオン〔opinion〕」を作り出す。哲学，科学，芸術もまた，カオスに対抗するものである。三者はカオスにそれぞれの平面を描く。ただし，平面を描くには，我々は敵である「カオスに潜る」必要がある。これら相互に還元できない三者は，カオスから派生するものだ。哲学は，「無限［＝カオス］を，それ［無限］に共立性〔consistance〕を与えることで，救う」。哲学が描く「内在平面」は，「共立する諸概念を，概念的人物の作用の下で，無限に担っている」。科学は，「無限を，準拠性〔référence〕を獲得するために，断念する」。科学が描く「座標平面」は，「物の状態〔état de chose〕，諸機能〔fonction〕を，部分的

64 *Différence et répétition*, pp. 61-71, pp. 337-340.

65 *Ibid.*, p. 68. *Ibid.*, pp. 274-275.「ドゥルーズの個体化 ― ライプニッツを中心に ― 」参照。

観測者の作用の下で，その都度規定している」。芸術は，「無限を回復する有限を創造する」。芸術が描く「合成平面」は，「美的形象の作用の下で，諸モニュメントあるいは合成された諸感覚を担っている」。しかし実は，ドゥルーズによれば，「カオスとの闘いは，オピニオンに対するもっと深い闘いの手段にすぎない。というのも人間たちの不幸は，まさにオピニオンから到来するからだ」。カオスは両義的である。物心いずれのものであれ秩序なしに我々が生きられない限りにおいて，カオスは確かに敵である。しかしオピニオンとの闘いに際しては味方に転化する[66]。そもそも一切はカオスに由来する。

この著作におけるライプニッツ，ホワイトヘッドへの言及はまず，科学を論ずる箇所でなされる。上述したように，哲学，芸術同様，科学もまた，カオスから導出される。この著作のカオスは，「無秩序によってよりもむしろ無限的速度」によって定義されている。カオスは「潜在的なもの」であり，そこではあらゆる「形相」が現れてはたちどころに消える。この「誕生と消失との無限的速度」がカオスとされている[67]。「無限的速度＝潜在的なもの」であるカオスに対して，哲学は，概念によって共立性（共立性平面）を与える。共立性は「無限的速度＝潜在的なもの」を保持する。一方，同様なカオスに対して，科学は，「機能」によって「準拠性（準拠性平面）」を与える。準拠性は，潜在的なものを現働化させる。あるいは，無限的速度を減速させる[68]。

---

66 *Qu'est-ce que la philosophie ?*, pp. 186-187, pp. 189-191, p. 194.「カオスに対する闘いは，敵［カオス］との親和性なしには進みそうもない。というのも，別の闘いが展開され，またより大きな重要性をもつからだ。別の闘いとは，オピニオンに対する闘いである。しかしながらオピニオンは，私達をカオスそのものから守ると主張していたのだ」。強調著者らによる。*Ibid.*, p. 191.

67 *Ibid.*, pp. 111-112.

68「科学は，潜在的なものを現働化させることができる準拠性を獲得するために，無限を，無限的速度を，放棄する。哲学は，無限なものを保持しながら，諸概念によって共立性を潜在的なものに与える。科学は，無限を放棄しながら，潜在的なものを現働化させる準拠性を，潜在的なものに諸機能によって与える。哲学は，内在平面あるいは共立性平面をもってことに当たり，科学は，準拠平面によってことに当たる」。強調は著者らによる。*Ibid.*, p. 112.

『哲学とは何か』は，カオスから科学あるいは準拠平面が出現するプロセスについて記述している。準拠平面は，１）物の状態，２）物，３）物体，という段階を経てつくられる。

> ［１］物の状態は，大変様々なタイプをもつ，順序付けられた〔ordonnée〕混合である。混合は，軌道〔trajectoire〕にしか関係しないことさえありうる。［２］しかし，物は，相互作用〔interaction〕である。［３］物体は，コミュニケーションである。［１］物の状態は，閉じられていると想定されている諸系，の幾何学的座標〔coordonnée〕にかかわる。［２］物は，結合している諸系，のエネルギー座標にかかわる。［３］物体は，切り離されて結びついていない諸系，の情報座標にかかわる[69]。

このようにカオスからの現働化によって段階を経て客体性が成立する。哲学の共立性平面にはそれに相関的な概念的人物がいる[70]。同様に，科学の準拠性平面にも，それに相関的な部分的観測者がいる。「科学は，準拠系における諸機能との関係において部分的観測者を出現させる[71]」。ドゥルーズ哲学では，主体性は，派生的に現れるにすぎない。『襞』は確かにライプニッツ論ゆえにモナドが物体に先行するが，モナドはそもそも出来事からなる世界に後続する。哲学であれ科学であれ芸術であれ，まずは，それぞれの平面とその要素が出現し，その後に主体性が登場する。ドゥルーズは，我々の意識が捉える経験を特権化してそこから出発することはない。これは反省による記述を顧みないことではない。我々の経験は，最終的に哲学体系よって説明される。

部分的観測者とは，以下の引用から分かるように「知覚〔perception〕」と「変様〔affection〕」であるが，そのままで我々の主体性を構成しているわけではない。我々はその効果を感じるだけにすぎない。また，それは「真なるもの

69 *Ibid.*, p. 117. より詳細には以下を参照。*Ibid.*, pp. 144-146.
70 *Ibid.*, pp. 67-71.
71 *Ibid.*, p. 122. 強調は著者らによる。

の相対性」を構成するものでもない。「相対的なものの真理」を構成している。つまり，主体的なものであるとはいえ，真理性に到達していないわけではない。一つの観点から真理性に到達している。「認識の限界」をそれに付与すべきではない。「理念的な部分的観測者は，ファンクティヴ〔fonctif〕そのものの感性的な知覚あるいは変様である[72]」。「機能の要素」であるファンクティヴに所属するということは，機能があるところならどこにでも（準拠系ならどこにでも）それは存在するということだ。しかし，観測者は全面的ではない。それは神ではない。観測者が部分的であるということは，「所与の物の状態から過去と未来とを計算できるラプラスの魔のような全面的観測者は存在しない」ということである[73]。物体に遍在する主体性でありながら，絶対の真理性ではなく，相対の真理性しかもたない。

> そうした部分的観測者は，ある曲線の，ある物理系の，ある生ける組織体〔organisme〕の，諸特異点，の近傍に存在している。そして，アニミズムが，器官・機能に内在する微小な魂を増殖させる時 ― ただし，アクティブな〔active〕あるいは有効なあらゆる役割を，それら微小な魂から取り上げて，ただ単に，これら微小な魂を，分子的な知覚・分子的な変様の中心に仕立てあげようとするという条件で，そうする時 ― ，アニミズムでさえも，人が言うほど，生物学的科学から懸け離れてはいない。こうして，物体には，無数の微小なモナドが生息している。部分的観測者によって把捉された，物の状態あるいは物体，の区域を，私達は，部位〔site〕と呼ぼう。部分的観測者は力〔force〕である。ただし，力は，作用する〔agir〕ものではなく，ライプニッツとニーチェとが知っていたように，知覚しかつ感受する〔éprouver〕ものである[74]。

72 *Ibid.*, pp. 124-125. ファンクティヴは *Ibid.*, p. 111.
73 *Ibid.*, p. 122.
74 *Ibid.*, p. 124. 強調は論者による。

冒頭の「そうした部分的観測者は，ある曲線の，ある物理系の，ある生ける組織体の，諸特異点，の近傍に存在している」という箇所は，「部分的観測者」に「モナド」を代置するなら，『襞』の文と言っても遜色がないだろう。ライプニッツの世界は，屈折＝曲線からできていた。実際，この直後，アニミズム，モナドへの言及があり，ニーチェと併記されたライプニッツへと及ぶ。『差異と反復』でドゥルーズはニーチェを存在の一義性の哲学として最も評価したが，ライプニッツはそのニーチェと並び称されている。『襞』のライプニッツ哲学はアニミズムと唯物論と形容された。モナドとしての部分的観測者の役割は，「力」という名称とは裏腹に，実際に「作用する」ことにはない。「知覚すること」と「感受すること」に，つまり「知覚」と「変様」とにある。

論理学あるいは論理との関係で概念を考察する第六章「プロスペクト〔prospect〕と概念」で，ドゥルーズは，もう一度，１）物の状態（＝混合），２）物（＝相互作用），３）物体（＝コミュニケーション）という段階について考察している。既に見たように，物の状態は混合である。より詳細には，「世界 ― その先行的な状態における ― によって現働化された諸所与，の混合」にすぎない[75]。一方で，物体は，混合ではない。その都度「新たな現働化」である。「その［新たな現働化の］「私的な」状態は，今度，新たな物体のために，物の状態を与える」。つまり物体はコミュニケーションである。物体は既に知覚であり変様である。知覚はもはや「物の状態」ではない。「他の物体によって誘発される限りでの物体の状態」である。そして変様は，「他の諸物体の作用の下での，〈力能〔puissance〕－ポテンシャル〉の，増加もしくは減少としての，この物体の状態から他の物体の状態への移行」である[76]。以上のような知覚と変様とは，「スピノザが，〈物の状態〉のなかで把握される物体に関して，［１］「アフェクチオ〔affectio〕」と，［２］「アフェクトゥス〔affectus〕」とについて下した定義である。そして，それは，ホワイトヘッドが，［１］それぞれの物を

75 *Ibid.*, p. 146.
76 *Ibid.*, pp. 145-146.

他の諸物の「抱握」とした時，そして，［２］一つの抱握から他の抱握への移行をポジティブなもしくはネガティブな「感じ」とした時，再発見した定義だ[77]」。

つまり，科学の準拠平面上での物体は，知覚と変様である。知覚はホワイトヘッドの抱握に，変様はホワイトヘッドの感じに，相当する。ここではホワイトヘッドは，ドゥルーズが常に肯定的に評価していたスピノザの継承者である。ここで確認したいのは，『哲学とは何か』で，ライプニッツのモナド，ホワイトヘッドの抱握・感じがともに，科学の準拠平面の，一要素あるいは一段階に相当するとされていることだ。

8．『哲学とは何か』の科学

『哲学とは何か』では，機能である科学は，概念である哲学から峻別されている。潜在性を保持する哲学に対して，現働化である科学は一見するに，批判されているように見える。科学は，『千のプラトー』で「地層〔strate〕」として記述されたものに相当する。『千のプラトー』では，地層は，無機物，有機物，人間という三つに区別されていた。地層は，準拠であり，現働性である。地層は，組織と展開の平面に，つまり存在の類比の側に，位置づけられた[78]。一方で，地層上の「アジャンスマン〔agencement〕」，殊に，出来事は，存立平面（内在平面）に，つまり，存在の一義性の側に位置づけられた[79]。何よりも『哲学とは何か』の科学は，論理学，オピニオンとともに，「プロスペクト」— 「情報提供的命題〔propositions informatives〕」 — である[80]。これら三つの領域は，いずれも機能であり，プロスペクトである。

77 *Ibid.*, p. 146. 強調は論者による。affectio と affectus は以下を参照。Deleuze, *Spinoza : Philosophie pratique*, Minuit, 1981, pp. 68-72. 前者は affection，後者は affect とされる。
78 *Mille plateaux*, pp. 627-628.
79 *Ibid.*, pp. 632-633.
80 *Qu'est-ce que la philosophie ?*, p. 131.

［1］第一に，機能は，物の状態の機能であり，また，一番目のタイプのプロスペクトとしての科学的命題を構成している。機能の項は，独立変数（ヴァリアブル）であり，それ［独立変数］に対して連係［座標］化〔mise en coordination〕と累乗化が行われる。これら連係化と累乗化とは，独立変数間の必然的関係を規定する。［2］第二に，機能は，物の，個体化された対象あるいは物体の，機能である。これらの機能は，論理学的命題を構成している。命題の項は，独立した論理学的原子とみなされた特異的辞項〔terme〕である。これらの辞項に対して，それら［辞項］の述語を規定する記述（論理学的な物の状態）が行われる。［3］第三に，体験［生きられたもの］〔vécu〕の機能は，項として知覚と変様とをもち，またオピニオン（三番目のタイプのプロスペクトとしてのドクサ）を構成している[81]。

概念としての哲学は，この著作で，それ自体としては肯定的に位置づけられているが，哲学における「〈普遍〔Universaux〕〉」によって，哲学は，言わば堕落する。哲学の普遍は，「観照」，「反省」，「コミュニケーション」である[82]。これらは，機能，プロスペクトに他ならない[83]。

以上の観点から考えるに，科学そのものは，『哲学とは何か』で批判的に捉えられているように見える。しかし，仔細に読むと，批判されているのは，科学の哲学との混同であることが分かる。「概念は，それら三つの論証的体系［科学，論理学，オピニオン］のいずれのなかにも，自らの場をもっていない。概念は，科学的あるいは論理学的機能ではないように，体験の機能でもない[84]」。つまり，哲学の概念は，科学でも，論理学でも，オピニオンでもない。

81 *Ibid.*, pp. 146-147.

82 *Ibid.*, pp. 11-12, pp. 48-49. 1）観照：客観的観念論，プラトン。2）反省：主観的観念論，カント。3）コミュニケーション：相互主観的観念論，フッサール。吉澤，「ドゥルーズの賭け ― 『差異と反復』を中心に ― 」，『仏語仏文学研究』第49号，東京大学仏語仏文学研究会，2016，pp. 523-536.

83 *Qu'est-ce que la philosophie ?*, pp. 134-136.

84 *Ibid.*, p. 143.

哲学は，科学，論理学，オピニオンのいずれかに回収される傾向にあるが，ドゥルーズはこれに反対している。つまり，科学は，まさに科学である限り，批判されない。この著作では，哲学，芸術とともに，科学は，カオスとオピニオンとに対抗するものとされている。また，ドゥルーズは，科学における「唯一の法則，唯一の力，唯一の相互作用を求める」「画一化・普遍化のすべて試み」を批判的に見ているが，この原因は，科学そのものではなく，科学と宗教との関係に帰せられている。

> 問題をつくっているのは，科学の哲学との関係というよりも，科学の宗教とのいっそうより情熱的な関係である。そのような関係は，唯一の法則，唯一の力，唯一の相互作用を求める，科学的な画一化・普遍化のすべての試みのなかに見てとることができる[85]。

通常，統一的理論の志向性は科学そのものにあると考えられるであろうが，ドゥルーズは，この点でも，科学そのものを免罪している。科学は，統一的理論への志向性によってよりも，「カオスの秘密」を捉えるために，「様々なポテンシャルを掘り起こそうとする欲望」によって，鼓舞されているとドゥルーズは考えている[86]。

9．『哲学とは何か』の芸術

『哲学とは何か』の結論「カオスから脳へ」でも，ドゥルーズは，ライプニッツ，ホワイトヘッドに肯定的に言及している。ここで提示される「脳」は，

85 *Ibid.*, pp. 118-119.

86「科学は，自らを秩序立った現働的な体系として統一しようとする気遣いによって，鼓舞されているよりも，科学に取り憑いているものの一部分を，科学の背後のカオスの秘密を，潜在的なものの圧力を，把握しかつ連れてゆくために，カオスから遠ざかりすぎないようにする欲望によって，様々なポテンシャルを掘り起こそうとする欲望によって，鼓舞されている」。*Ibid.*, p. 147.

優れた意味での脳である。「構成された科学的対象」としての脳ではない。このような「対象化された脳」は，哲学，芸術，科学を，脳自らの「心的対象」に還元する。この著作の本論で示された勝義の哲学，芸術，科学は，そのような心的対象ではない。カオスとの関係で捉えられた相互に還元できない独自の平面であった。「三つの平面の（統一ではなく）接続〔jonction〕」が，脳である[87]。三つの平面としての哲学，芸術，科学は，言わば「三つの筏」である。「それら［三つの筏］にのって，脳は，カオスへと潜り，カオスに立ち向かう」。これらは，三つのアスペクトであり，それらのアスペクトのもとで，「脳は，主体へと，脳−〈思考〉〔Pensée-cerveau〕へと，生成する[88]」。

このように，結論では，三つのアスペクトの下での，脳の主体への生成が示される。つまり，三つのタイプの主体，あるいは〈私〔Je〕〉が示される。1）哲学の「自己超越体〔superjet〕」，je conçois。2）芸術の injet，je sens。3）科学の éjet，je fonctionne[89]。

哲学のアスペクトの下で，脳は，「自己超越体」としての主体に生成する。「［1］脳が主体に生成するのと，あるいはむしろ，ホワイトヘッドの言葉でいう「自己超越体」に生成するのと，［2］概念が，創造されたものとしての対象，出来事，あるいは，創造そのもの，に生成し，哲学が，内在平面に，即ち，諸概念を担いかつ脳が描く内在平面に，生成するのとは，同時である。こうして，脳の諸運動は概念的人物を産出する[90]」。このように，哲学において脳は「je conçois」としての「〈私〉」に生成する。

---

87 *Ibid.*, p. 196.

88 *Ibid.*, p. 198.

89 superjet「上に投げられたもの」という造語は，subject からホワイトヘッドが作った術語 superject の仏訳である（*Process and Reality*, pp. 27-28, p. 45.）。je conçois は不定形 concevoir の，直説法現在形一人称単数の活用形で，ここでは「concept を抱く」という意味である。injet「内に投げられたもの」と éjet「外に投げられたもの」という造語は，ドゥルーズが以上の事情を踏まえて新たに作り出したものである。je sens「私は感ずる」は不定形 sentir の，je fonctionne「私は機能する」は不定形 fonctionner の，直説法現在形一人称単数の活用形である。

90 *Qu'est-ce que la philosophie ?*, pp. 198-199.

続いて，芸術のアスペクトの下で，脳は，injetとしての主体に生成する。injetとは，「感覚そのもの」，「純粋観照」，「魂」，「力」である。「魂（あるいはむしろ力）は，ライプニッツが語っているように，何もつくらない，あるいは，作用（アジール）しない。ただ現前するだけである。魂は，保存する。つまり，縮約は，能動［作用］〔action〕ではなく，純粋受動〔passion〕であり，先行するものを後続するものの中で保存する観照である[91]」。このように，芸術において，脳は，「je sens」としての「〈私〉」に生成する。また，感覚は，「享受」，「自己享受」とされる。これらは，『襞』のホワイトヘッド論で見たように，ホワイトヘッドの用語である。更に，「植物は，感覚そのものである」という文に付された原注で，ホワイトヘッドは，プロティノスとの関係において，何よりも，新プラトン主義を捉え直す経験論的系譜のヒューム，サミュエル・バトラーとの関係において，言及される（この点も上述した『襞』のホワイトヘッド論との近さを示す）。芸術の「感じる能力」の議論から，ドゥルーズの考察は，生気論〔vitalisme〕についての二つの解釈に及ぶ。一つは，カントからクロード・ベルナールまでの，「〈理念 Idée〉」の解釈である。「〈理念〉」は「作用（アジール）するが，存在しない〔être〕」。つまり「外的脳的認識」という観点からのみ作用（アジール）する。もう一つは，ライプニッツからリュイエールまでの，「力」の解釈である。「この力は，存在するが，作用（アジール）しない。したがって内的な純粋な〈感覚すること〔Sentir〕〉である[92]」。ここでまたライプニッツの名が挙げられる。なお，科学のアスペクトの下で，脳は，éjetとしての主体に，「je fonctionne」としての「〈私〉」に，生成する[93]。

このように，ライプニッツ，ホワイトヘッドは，本論では科学に，結論では芸術に，定位された。この点でこの著作の議論は整理されていないと言うこともできるが，ここで確認したいのは，ライプニッツ，ホワイトヘッドが，哲学そのものにおいてではないにせよ，科学においてであれ芸術においてであれ，

91 *Ibid.*, p. 199.
92 *Ibid.*, p. 201.
93 *Ibid.*, pp. 202-203.

肯定的に位置づけられていることだ。

10. 世界のための存在 ― ライプニッツとホワイトヘッド

以上より，『襞』の，ライプニッツも，ホワイトヘッドも，その肯定性において提示されていることが分かる。つまり，『襞』，『哲学とは何か』では，ドゥルーズの哲学は，以下の二点によって特徴づけられる。1）カオスあるいは（単なる）出来事，の一次性。2）カオスあるいは（単なる）出来事，からの他のすべての導出。カオスから概念が導出される。概念を対象とする哲学そのものはそのまったき肯定性においてある。こうして，哲学体系はどんなものであれ，言わば救済される。これは，この観点からするなら，哲学は，哲学である限り，そもそも概念（＝出来事）から出発するからだ。

以上は，例えば『意味の論理学』における哲学の位置づけとは異なる。『意味の論理学』では，哲学は，大きく四つに分けられた。1）形而上学（「個体」），2）超越論哲学（「人格」），3）「無底」の哲学，4）特異性の哲学（出来事）。『意味の論理学』は，「物体的なもの」と「非物体的なもの」とを区別し，前者は，物体，物の状態に，後者は出来事とされる。また物体的なものは「深さ」に，非物体的なものは，「表面」に位置づけられている。また，深さは更に，「未分化な無底」とされている。深さの物体から表面の生産に向かうのが「動的発生」である。表面の出来事から物体への「実現」に向かうのが「静的発生」である。静的発生は，「存在論的発生」と「論理学的発生」とに分けられ，存在論的発生が，個体と人格という二つの発生を扱っている。この著作では，無底から始まるかのようであり，そこに物体（深さ）とその表面とがあった。四つの哲学は，『意味の論理学』の構図に位置づけられている。個体の哲学，人格の哲学は，物体に「実現」することである。出来事の哲学は，表面に「反実現」することである。この著作では哲学体系はこのように配分される。出来事が，哲学の概念とされることはなかった。また，出来事の哲学が哲学そのも

のとされることはなかった[94]。

『哲学とは何か』でも，言わば，超越の側に言わば堕落するものがある点は，以前と変わらない。客体，主体，コミュニケーションに準拠を求めることで，哲学は堕落する（観照，反省，コミュニケーション）。ドゥルーズは，哲学体系を分類する点では変わらない。しかしながら，哲学体系はいずれも，カオス，概念から出発するという限りにおいては，肯定的なものになる。『哲学とは何か』では，『意味の論理学』の構図が変わった。言わば表面が哲学的概念として権利的一次性を獲得したことになる。そのため，哲学そのものはそのまったき肯定性において現れる。

カオスから科学は導出される。その限り，科学は救済される。哲学に越境する限り，科学は批判されるが，科学である限りにおいて，その肯定性そのものにおいて現れる。『哲学とは何か』では，ライプニッツ，ホワイトヘッドの主要概念は科学に位置づけられるが，それらは批判されていない。『襞』で，外延，内包，個体（抱握），永遠的客体は，出来事とされたが，『哲学とは何か』の観点から言えば，科学の出来事である。科学の出来事は，哲学の出来事であるカオスから派生する。この点から考えるなら，ドゥルーズには二種類の出来事がある。哲学の出来事と科学の出来事，言い換えれば，潜在性の出来事と現働性の出来事，がある。同様に，哲学の出来事と芸術の出来事があると言うこともできる。

『襞』で，ライプニッツとホワイトヘッドとはいかなる関係にあるのか。出来事の哲学という点では共通であるが，ライプニッツはバロックに，ホワイトヘッドはネオ・バロックに，配せられている。つまり，ライプニッツの世界が収束する共可能的世界であるのに対して，ホワイトヘッドのカオスは発散性，不共可能性を含むものである。更に，世界とモナドとの関係（あるいはカオスと抱握との関係）についても考える必要がある。

世界がモナドに先行するという命題はドゥルーズにとって重要だ。

---

94 *Logique du sens*, pp. 122-132, pp. 162-166.『哲学とは何か』より前の著作では，哲学そのものが救済されることはなかった。「ドゥルーズの賭け ―『差異と反復』を中心に ― 」参照。

モナドに対する先行性がある。しかし，世界は，それ［世界］を表現する諸モナドの外には実存しない。ただし，神が，まず，アダムを創造し，その後，アダムに罪を犯させる，あるいはアダムが罪を犯すことに神が気付く，というのではない。神は，アダムが罪を犯す世界を創造し，そしてまた，世界を表現するあらゆる個体の中にその世界を包摂する（ルクレチウスを冒涜するセクストゥス，ルビコン川を渡るシーザー…）[95]。

上述したように，純粋な潜在性である世界は，モナドにおいて現働化される。また，「屈折＝世界」がモナドと物体に生成する。以上のことからも，世界のモナドに対する先行性は肯ける。

しかし引用からもわかるように，この命題は常に次の命題を伴う。世界は，それを表現するモナドの外には実存しない（『襞』では，世界は物体にも表現される）。この命題は，『襞』のみならず，『差異と反復』，『意味の論理学』でも繰り返されていた[96]。神はアダムを創造するのではなく，アダムが罪を犯す世界をまず創造する。そしてこの世界を「アダム＝モナド」は表現する。ドゥルーズはこのような説明を繰り返す。この説明では，世界がモナド以前に実存していたかのような印象を与えるが，そうではない。世界はモナドの外には実存しない。世界はモナドにおいて現働化される。次のように述べる箇所もある。「常に二重の先行性がある。世界は潜在的に最初であるが，モナドは現働的に最初である[97]」。

世界からモナドへのこの複雑な関係は，ドゥルーズ自身が「ねじれ」と呼ぶものだ[98]。この点で，ライプニッツはハイデガーと対比されている。「ハイデガーは，自らが，志向性 ― 主体と世界との関係のまだあまりに経験的な限定としての ― を乗り越えようとする時，窓なきモナドというライプニッツの定式は，この乗り越えの道であると予感している」。ただし，モナドの閉鎖性の

95 *Le pli*, p. 81. *Ibid.*, p. 85.
96「ドゥルーズの個体化 ― ライプニッツを中心に ― 」参照。
97 *Le pli*, p. 69.
98 *Ibid.*, p. 37.

代わりに，ハイデガーは主体の開放性を据えた。つまり，窓なき主体性と言っても，両者は全く対照的だ。ドゥルーズによれば，「現存在」を世界内存在とするハイデガーは，ライプニッツのモナドの閉鎖性を，「世界に代わる存在」を正しく評価できなかった。この点で，ドゥルーズは，ライプニッツを肯定し，ハイデガーを批判しているように見える[99]。

---

99 *Ibid.*, pp. 36-37.『フーコー』（1986年）で，ドゥルーズは，ハイデガー（またメルロ＝ポンティ）と対比しつつ，フーコーをその最大の肯定性において提示する。「意識が，物に狙いを定めること，また，世界において自らを意味すること，以上のことは，フーコーが拒絶することである」。現象学の志向性が批判されている。フーコーは，意識に代えて「言表〔énoncé〕」を，物に代えて「可視性〔visibilité〕」を，据える。「言表は何も狙い定めはしない。なぜなら，それは，何らかの物に関わることはないし，主体を表現することもなく，ただ，言語に，言語存在〔être-langage〕に，関わるからだ」。「可視性は，野生の世界 ― 始源的な（前述的な）意識に対して既に開かれた ― において展開されるのではない。ただ，光に，光存在〔être-lumière〕に，関わっている」。「見ること［可視性］と話すこと［言表］とは，知ることであるが，私達は，話すことを見ないし，見ることについて話すのではない」。「知の以前に，知の下に，何もない。しかし，知は，還元不可能な仕方で，二重であり，話すことと見ること，言語と光，である。それゆえに志向性は存在しない」（Deleuze, ***Foucault***, Minuit, 1986, pp. 116-117. ）。ハイデガー，メルロ＝ポンティも現象学の志向性を乗り越える。しかも，この乗り越えは「〈存在〉の襞」に向けて行われる。しかし，「ハイデガーあるいはメルロ＝ポンティによれば，存在の襞が，志向性を乗り超えるのは，志向性を別の次元において基礎付けるためでしかない。それゆえに，［両者によれば，］〈可視的なもの〉あるいは〈開かれたもの〉は，見させるなら必ず，また話させる。なぜなら，襞は，言語の，自らを話すもの〔se-parlant〕を構成すれば必ず，視覚の，自らを見るもの〔se-voyant〕を構成することになるからだ。そのため，言語において自らを話す世界と，視覚において自らを見る世界とは，同じであるからだ。ハイデガーとメルロ＝ポンティにおいて，〈光〉は，見ることだけでなく，話すこともまた開いている。あたかも，意味作用が可視的なものにつきまとい，また，可視的なものが意味をつぶやくかのようだ。フーコーではこんなふうではありえない。彼にとって，〈光存在〉は，可視性に関わるだけである。そして，〈言語存在〉は，言表に関わるだけである。つまり，襞が，志向性を基礎付ける〔refonder〕ことはありえないだろう。なぜなら，志向性は，知 ― 決して志向的ではない知 ― の二つの部分の間の離接において消滅するからだ」（*Ibid.*, pp. 118-119.）。
フーコーにおいて，知は，二つの形相（話すこと，見ること）によって構成される。形相のそれぞれが，主体と客体とをもつ（話すことと見ることとは，『千のプラ

ホワイトヘッドはハイデガーに似ている。ホワイトヘッドも主体に窓を認めない。そしてこれは，ライプニッツのような主体の閉鎖性ではなく，ハイデガーのような主体の開放性を意味する。しかしながら，ハイデガーの場合と異なり，ホワイトヘッドは批判されているようには見えない。ライプニッツの場合の収束性・共可能性によって特徴づけられる世界に対して，ホワイトヘッドは，発散性・不共可能性によって特徴づけられるカオスを，一次的なものとして提示している。ホワイトヘッドにおいては，主体（抱握）は，世界内存在ではなく，いわばカオス内存在である。しかし，カオスの特徴によって，ホワイトヘッドは批判されない。ライプニッツのバロックに対して，ホワイトヘッドのネオ・バロックがここで示されている。ライプニッツの場合には，閉鎖性とセットの表現あるいは包摂が行われたが，ホワイトヘッドの場合，開放性とセットの捕獲が行われる。ライプニッツの場合におけるような主体性の閉鎖性をドゥ

トー』の人間的地層における，表現と内容とに近い）。二つの形相の関係は，主体と客体との関係，つまり，志向性の関係ではない。二つの形相の間には，「錯綜」，「交差」が存在する。これは，一見，ハイデガーの「二つの間〔entre-deux〕」，メルロ＝ポンティの「もつれ合い〔entrelacs〕」と似ているが，ドゥルーズによれば，そうではない。「二つの間」，「もつれ合い」は，「存在の襞」と一致している。一方で，フーコーの「錯綜は，還元不可能な二つの敵，知－存在の二つの形相，これらの間の，包囲，闘争である。確かに，それは，望むなら，志向性とも言えるが，ただし，可逆的で，二つの方向に多様化され，微細なものにあるいは極小なものに生成した，志向性に他ならない。それはまだ存在の襞ではなく，二つの形相の間の錯綜である。それはまだ襞のトポロジーではなく，錯綜の戦略である。すべては，まるでフーコーが，ハイデガーとメルロ＝ポンティとに対して，あまりにも早く進みすぎたことを非難するかのように展開する」（*Ibid.*, p. 119.）。ドゥルーズが言うところの，ハイデガー，メルロ＝ポンティは，意識から存在者への志向性を乗り越えるために，存在の襞の次元を見いだしながら，ただ単にこの次元から志向性を正当化したにすぎない。一方，フーコーは，この志向性に敵対性を代えている。また，存在の襞が認められるのはようやく「〈自己〔Soi〕〉」においてである。存在の第一の形象である知は，存在の第二の形象である「権力〔pouvoir〕」から発生し，権力は更に，存在の第三の形象である〈自己〉から発生する（*Ibid.*, pp. 120-121.）。〈自己〉とは言いながらも，通俗的な意味での主体性ではなく（ドゥルーズはそう解釈しない），『襞』の単なる出来事（世界，カオス）に，『哲学とは何か』の思考（カオス）に，相当する。

ルーズは評価するが，そのために主体の開放性を完全に否定しているわけではない。ハイデガーの場合とホワイトヘッドの場合とで評価を変えている[100]。

ライプニッツとホワイトヘッド，バロックとネオ・バロック，両者のうちいずれをドゥルーズはより評価するのか。答えは一見自明に思われるが，『差異と反復』，『意味の論理学』などにおけるライプニッツの表現概念の取り扱い，また何よりも，『襞』における主体と世界との関係についての議論を振り返ると，それほど自明には見えなくなる。「世界は主体の中に存在するが，それにもかかわらず主体は世界の代わりに［のために］存在する[101]」。ライプニッツのモナドの，閉鎖性，表現。ホワイトヘッドの抱握の，開放性，捕獲。ライプニッツの「être-pour le monde」の pour は，何よりも代理の意味をもつ。モナドは，世界内存在ではなく，世界に代わる存在である。モナドという有限は，世界という無限を代理している。また，前置詞 pour には，目的の意味もある。モナドは，世界，つまり単なる出来事，のために存在する。モナドは，世界に対して閉じているが，世界のためにある。世界へ回帰することなくモナドに閉じこもり，それにもかかわらず，モナドでも物体でもなく（現働的なものでも実在的なものでもなく），世界（単なる出来事）のために存在することは，ドゥルーズ哲学の倫理に相応しいように見える。ドゥルーズ哲学に目的があるとするなら，単なる出来事以外にはありえない[102]。

11. ドゥルーズのホワイトヘッド，ホワイトヘッド

『過程と実在』は，現働的存在（エンティティ）と永遠的客体とを一次的概念としている。『襞』のホワイトヘッド論では，単なる出来事としてのカオスから，外延，

100 *Le pli*, pp. 110-112.

101 *Ibid.*, p. 35. 強調ドゥルーズ。

102 「出来事にふさわしいものに生成すること。哲学はそれ以外の目的をもっていない」。*Qu'est-ce que la philosophie ?*, p. 151.「人間の尊厳と出来事の尊厳 ― ホワイトヘッドとドゥルーズ ― 」参照。

内包，抱握，永遠的客体が，出来事の四つの構成要素として，派生している。言い換えれば，物質性（外延，内包）と，精神性（抱握，永遠的客体）という二元性が，派生している。第一に，現働的存在（エンティティ），永遠的客体に代わり，単なる出来事（カオス）が一次的になる。現働的存在（エンティティ），永遠的客体は，派生する出来事の構成要素の一部にすぎなくなる。第二に，外延，内包という物質性が強調される。むしろ，現働的存在（エンティティ）が，一方の抱握（精神性）と，他方の外延，内包（物質性）とに引き裂かれる。

このようなドゥルーズによるデフォルメは重要な意味をもつ。ドゥルーズによれば，現働的存在（エンティティ）も永遠的客体も一次的ではない。単なる出来事こそが一次的である。現働的存在（エンティティ），永遠的客体が認められるのも，それが，単なる出来事から派生する限りにおいてである。現働的存在（エンティティ）は確かに，人間固有の認識主体ではない。そこでは意識は本質的なもの，常住的なものではなく，派生的なもの，偶有的なものでしかない。デカルト，カント，フッサールの主体性とは全く異なる。知的存在者に特権的に付与されたものではなく，有機物のみならず無機物にまで拡張された，言わば限りなく物質に近い主体性である。また，生成（ビカミング）としての現働的存在（エンティティ）の言わば生命は短い。生成を終えた後には存在（エンティティ）になり，新たな現働的存在（エンティティ）の合生に関わるだけだ。それは自己同一性を保持しつつ知性的であれ意志的であれ思惟を享受し続ける主体性ではない。それにもかかわらず，現働的存在（エンティティ）には，ホワイトヘッドがロックの主体概念から作りだしたことが象徴するように，主体性の構造の残滓がある。相関する現働的世界（物質性）から出発して最終的な主体的享受（精神性）に向かうという方向性がある。過去から未来への方向性，時間の方向性がある。そこには心的目的およびその享受が経験の現場において発生する可能性がある。その僅かな経験的享受は保存され，その後の現働的存在（エンティティ）に作用する。

> 現働的存在（エンティティ）は，主体的には「絶え間なく消え去る」が，客体的には不死的である。現働態は，主体的直接性を喪失する一方，消え去ることにおいて，客体性を獲得する。それは，自らの不安定〔unrest〕の内的原理であ

> る目的因を喪失するが，作用因を獲得する。この作用因によって，それは，創造性を性格づける拘束性の根拠である[103]。

生成を終えた現働的存在（エンティティ）は，存在（ビーイング）になり，その後の現働的存在（エンティティ）の合生に作用因として働きかける。現働的存在（エンティティ）は単独には死を迎えるが，全体としては死ぬことはない。宇宙全体は目的をもち享受する。すべては現働的存在（エンティティ）であり，それ以外ない。最も瑣末な一吹きの実存だけではなく，神もそうである。

また，神の原初的本性である永遠的客体は，プラトン的形相とされるが，『襞』のライプニッツにおける同一的なものとは異なる。同一的なものは神において無関係にある。無関係ゆえに，知的ヒエラルキーを生み出すことはない。一方で，永遠的客体は同様に神にあるが，相互に決して無関係というわけではない。それどころではない。

> 創造性のこうした原初的な自己超越体［原初的本性としての神のこと］は，その満足という統一性において，すべての永遠的客体の完全な概念的評価〔valuation〕を達成している。これ［この完全な概念的評価］は，創造的秩序が依存する，永遠的諸客体の共在性の，究極的で基底的な調節である。それは，離向〔aversion〕と対向〔adversion〕という形の，すべての欲求〔appetite〕の概念的調節である[104]。

上で見たように，『襞』は，永遠的客体に，再認の機能しか認めていなかった。欲求とその満足に言及するにしても，それは抱握においてであった。『過程と実在』の永遠的客体は，神において既に「概念的評価」，「欲求」である。単に永遠的客体の一部だけではなく，その全体がそうである。それは，知的ヒエラルキーであるだけではなく，実践的ヒエラルキーでもある。確かにアプリオリ

---

103 *Process and Reality*, p. 29. 強調は論者による。以下も参照。*Ibid.*, p. 45.

104 *Ibid.*, p. 32. 強調は論者による。「離向」と「対向」は以下を参照。 *Ibid.*, pp. 253-254.

な目的に向けて予め決定づけているのではない。しかしながら，現働的存在（エンティティ）自体，時間の方向性をもつ主体性の残滓を，またその後の宇宙の状態を規定する客体的役割をもつ上に，更に永遠的客体は，このような現働的存在（エンティティ）が，経験の現場において実践的な目的を形成するように方向付けている。ライプニッツ哲学で言うところの予定調和には程遠いにせよ，全体的調和への傾斜がないわけではない。ホワイトヘッド哲学は，進歩主義の哲学である[105]。

ドゥルーズ哲学は，カオス，単なる出来事を一次的なものとすることによって，進歩主義を排する。出来事はすべて共存している。この点で，現働的存在（エンティティ）において見られた時間の方向性が介入することはない。しかしながら，その一方で，出来事の共存は，永遠的客体の共存のように，ヒエラルキーを生み出しかねない。ドゥルーズは，カオスを，「諸規定が素描されそして消失する際の無限的速度」，「二つの規定の間の関係の不可能性」とした。カオスで，出来事は，共存しつつも，知的かつ実践的ヒエラルキーを生み出さないように，無関係なものとして配される。『襞』では，このようなカオスから，現働的存在（エンティティ）も永遠的客体も派生するにすぎない。ホワイトヘッドそのものが現働的存在（エンティティ）の背後に何らの実在性を認めなかった点との違いは明白だ。進歩の契機

105 Isabelle Stengers, « Thinking with Deleuze and Whitehead : a Double Test », in *Deleuze, Whitehead, Bergson : Rhizomatic Connections*, Palgrave Macmillan, 2009, pp. 28-44. ホワイトヘッドとドゥルーズとを対象とした研究において先駆的かつ主導的役割を果たしてきたスタンジェールは，ホワイトヘッドを出来る限りドゥルーズに近づけようとしている。両者を比較すべきではないという。一般に，比較は，哲学的思考を，中立的な外部から，不動の読者によって，比較されるべきオピニオンに還元する危険性をもつ。スタンジェールはこのような比較に陥ることなく，両者と「ともに」思考しようとする。両者を，中立的な立場から「判断する」のではなく，一方によって他方を，また，各々によって読者を「テスト」することを求めている。スタンジェールに反論するなら，果たして比較は中立的な立場からの判断であるのか。ライプニッツとホワイトヘッド（あるいはハイデガーも含めて）とを比較するドゥルーズは，中立的には全く見えない。スタンジェールがホワイトヘッドを保守的な読解から解放しようという意図は評価する。しかしホワイトヘッドの神をドゥルーズの出来事，骰子一擲，運命愛などに近づけすぎることには反対する（*Ibid.*, pp. 41-43.）。

である学習は，ドゥルーズのカオスにはないが，ホワイトヘッドの宇宙にはある[106]。

指摘した第二の点は，物質性の強調，あるいは現働的存在（エンティティ）の解体である。ホワイトヘッドの現働的存在（エンティティ）は，主体として生成し，客体として存在する。生成（ビカミング）を終えた現働的存在（エンティティ）は，消え去るのではなく，客体として新たな現働的存在（エンティティ）の生成（ビカミング）に参与する。つまり，新しい主体に対する客体となるために，通常言うところの物質に近いものとなる[107]。『襞』は抱握の抱握を認めている。『過程と実在』の議論に従うなら，これで十分なはずにもかかわらず，『襞』は，外延，内包という構成要素を抱握に先行させている。ドゥルーズは，現働的存在（エンティティ）の主体から客体への移行に見られる進歩の可能性を排除している。ホワイトヘッドの現働的存在（エンティティ）一元論に代えて，ドゥルーズは，出来事一元論を打ち立てようとしている。学習そして進歩への傾斜をもつ現働的存在（エンティティ）ではなく，そのような目的論を排除する単なる出来事こそが，ドゥルーズにとっての一次的なものである。ホワイトヘッドの場合，宇宙全体から目的は排除されない。ドゥルーズの倫理が，出来事に生成することであるとすれば，ホワイトヘッド

106 これは，『哲学とは何か』でドゥルーズが，哲学，科学，芸術に「進歩」を一切認めないということではない。例えば，「それぞれのケース［哲学，科学，芸術］で「進歩」を言うことができるとするなら，それはまさに継起のおかげである」（*Qu'est-ce que la philosophie ?*, p. 191.）。しかし，この「進歩」は，一つの目的に収斂する直線的なものではない。例えば，「直線的な時間継起に，哲学が満足していないのと同様に，科学も，満足しているわけではない。科学は，［哲学の］層位学的時間 — 重なり合いの秩序において前と後とを表現する — の代わりに，本来的に系列的な枝分かれした時間を展開している」（*Ibid.*, p. 118.）。「もし芸術において進展〔progression〕が存在するなら，それは，芸術が生きることができるのが，新たな被知覚態〔percept〕の一つ一つを，また新たな変様態〔affect〕の一つ一つを，迂回，回帰，分割線，水準・尺度の変更…として，創造することによる以外にないからだ」（*Ibid.*, p. 182.）。強調はいずれも論者による。そもそも，潜在性（カオス）からの現働化しか存在しない以上，進歩はありえないが，現働性のみをたどるなら，進歩があるようにも見える。それをドゥルーズは否定しない。しかし，我々が知っている現働性は，無限に分岐した（しかもますます分岐し続ける）現働化の一部でしかない。

107 *Process and Reality*, p. 29, p. 45.

の倫理は，そうではない。歴史的経験の現場で見いだされた形相は，目的（人間の魂，文明，平安）になる[108]。

結論

本稿が試みたのは，ドゥルーズとホワイトヘッドとの関係を，ドゥルーズの『襞』に焦点を合わせつつ，解明することであった。『襞』はバロックの哲学としてのライプニッツ哲学を提示するが，九章構成のこの著作の第六章は，ホワイトヘッドの出来事にあてられる。この章によれば，出来事の四つの構成要素である外延，内包，抱握，永遠的客体は，カオスから導出される。『襞』のホワイトヘッド論の特徴 ― 1）カオスの一次性，2）物質性（外延，内包）と精神性（抱握，永遠的客体）との二元性 ― は，ホワイトヘッドの『過程と実在』には見られない。

『襞』で，ホワイトヘッドは，発散・不調和のネオ・バロックと位置づけられ，収束・調和のバロックとしてのライプニッツに対比されるが，ライプニッツにできる限り近づけられている。『襞』のライプニッツ論の構図は，世界が，魂（モナド）において現働化され，物体において実在化されるという命題に集約されるが，同一的なもの，外延，内包，モナドが世界から包摂されるというもう一つの構図ももつ。この包摂の構図は『襞』のホワイトヘッド論の構図と重なる。また，ライプニッツ哲学の一次的なものである世界は，単なる出来事，無限として規定された。更に，ライプニッツ哲学は，モナドと物体とによる二階の哲学とされる。以上の二点からも，ホワイトヘッド論がライプニッツ論に引き寄せられていることが分かる。

刊行時期の近いドゥルーズ（ガタリとの共著）最後の著作『哲学とは何か』にはライプニッツ，ホワイトヘッドへの言及があり，ここでモナドと抱握・感じは，カオスから派生する科学の次元に位置づけられる。現働性である科学の次

108「人間の尊厳と出来事の尊厳 ― ホワイトヘッドとドゥルーズ ― 」参照。

元は，『千のプラトー』の地層（組織と展開の平面）に，つまり，存在の類比に，対応するが，科学である限り批判されない。また，『哲学とは何か』結論でも，ライプニッツとホワイトヘッドは，芸術の次元に，肯定的なものとして定位される。このように，『襞』，『哲学とは何か』において，ライプニッツとホワイトヘッドとがともにおのおのの肯定性において提示されていることが分かる。

『襞』では，世界と主体（モナド）との関係という観点から，ハイデガー，ホワイトヘッド，ライプニッツが比較された。窓なきモナド（主体），主体の開放性という考えを共有しつつも，ハイデガー（世界内存在）が，現象学的志向性の乗り越えが不完全であるゆえに，批判されるのに対して，ホワイトヘッド（カオス内存在）は，発散・不調和のカオスから出発するゆえに，肯定される。ライプニッツが提示する文字通り閉じた（窓がない）モナドは，つまり「être-pour le monde」は，世界に代わるモナド，単なる出来事のためのモナドである。この点から，ライプニッツが，収束・調和の世界から出発するにもかかわらず，ホワイトヘッドに勝るとも劣らず評価されていることが分かる。

ロビンソンの見解について，本稿は，『襞』のドゥルーズが，ライプニッツを批判しているという点には反対し，ホワイトヘッドを肯定的に評価している点には賛成した[109]。しかし，これは，ホワイトヘッドとドゥルーズが完全に

109 ドゥルーズによるライプニッツへの批判的側面が『襞』で消失する点は，ドゥルーズのライプニッツ論を対象とする以下の研究書でも明言される。Alex Tissandier, *Affirming Divergence : Deleuze's Reading of Leibniz*, Edinburgh University Press, 2018, pp. 178-179.『襞』と『哲学とは何か』との関係の深さも指摘される。サマーズ＝ホールを引きながら，哲学体系一般についてのドゥルーズの考えから，『襞』のライプニッツ哲学の肯定的提示が，ドゥルーズの哲学自体と矛盾していないことを示す。「「様々な哲学諸体系は，［相互に］同様な仕方での，世界の客観的な提示である。これらの提示は，それにもかかわらず，お互いに共役不可能なものである。それぞれの提示は，カオスについての一つの観点〔perspective〕を示していて，他の諸観点の可能性を開いたままにしている」（Henry Somers-Hall, « Introduction » to *The Cambridge Companion to Deleuze*, Cambridge University Press, 2012.）ドゥルーズはこうして次のように主張できる。ライプニッツの哲学は，（この哲学がカオスについての観点である限りにおいて，首尾一貫的で，完全で，そして「真実で」あるように）完全に妥当なものであるが，同時に，我々自身の観点［現代の観点，ネオ・バロックの

一致しているということではない。ホワイトヘッドその人が一次的なものとする現働的存在（エンティティ）と永遠的客体とは，実践的理念の経験的構築を許容する。ドゥルーズがそれらに先行させる単なる出来事（カオス）は，そのような進歩主義を排する。ドゥルーズがホワイトヘッドを肯定的に定位するのは，単なる出来事（カオス）から出発する限りにおいてである。ここには還元できない両者の差異がある。

観点］とは共役不可能である，と」。*Affirming Divergence* , p. 178.

Pragmatic Effect of Tautological Reduplication

Takuro Tanaka

1. Introduction

In this paper I will provide an analysis for the interpretation of Japanese negative attitude expression: [noun - nominative morpheme – noun] sequence. Japanese has two kinds of nominative morpheme, *-ga* and *–wa*. It has been said that *-ga* represents that the subject is a focus of a sentence and introduces a presupposition that there should be an individual who will do the action which the VP describes. On the other hand, *–wa* plays a similar role as topic which introduces a new information (Mikami (1960), Shibatani (1990), Noda (1996), and among others).

(1) A: Dare-ga tsugi-no jugyou-de happyou-suru no?
who-(Nom) next-of class-in presentation-do (Q)
B: {Boku-ga / *Boku-wa} yarimasu.
I-(Nom) will do.
A: "Who will make a presentation in the next class?"
B: "I'll do that"

(2) A: Dare-ga tsugi-no jugyou-de happyou-suru no?
Who-(Nom) next-of class-in make a presentation (Q)
B: Sah. {*Boku-ga / Boku-wa} shira-nai yo.
Humm. I-(Nom) know-(Neg) (colloquial marker)
A: "Who will make a presentation in the next class?"
B: "I don't know (who will be the next)."

In Japanese there are expressions with a sequence where two identical NPs are repeated and a nominative morpheme is in between. Henceforce, I will describe this configuration as [N-nom-N]. This fixed pattern of configuration shows up in four kinds of environment.

(3) Subordinated clause of matrix negative sentence
[Minna ga minna] imiron-wo sukina wakedewa nai
everyone (Nom) everyone semantics-(Acc) like (weakness) Neg
"It is not the case that everyone likes semantics"

(4) *Because-of* clause
[[Ziki ga ziki] dakara], yameta hou-ga iiyo
timing (Nom) timing because of stop(Past) option-(Nom) better
"I think it is better for you to stop because timing is not good"

(5) Complement of copula
Kare-wa [[gakusei wa gakusei] da]
he-(Nom) student (Nom) student be
"(He does not look like student, but actually) he is a student"

(6) Tautological copula sentence

[Kodomo wa kodomo] da

children (Nom) children be

"Children are children", which implies that "Children are not adult and children are ill-mannered generally, so it is no use to expect that they behave themselves"

(3) and (4) contain a nominative morpheme *–ga*, and (5) and (6) do *–wa*. These four kinds of expression share the same type of configuration; [N-nom-N]. In the following part of this paper, I will show that this template of expression has a conversational force of negative attitude, and provide an analysis for its interpretation.

2. Data

2.1. Subordinated clause of matrix negative sentence (Aihara, 2000)

Aihara (2000) provides data which show that the [N-nom-N] sequence is a kind of negative polarity items (NPI, henceforth). In this case, each N is a generalized quantifier or an indeterminate pronoun with universal reading, as shown in (7). It has been pointed out that some indeterminate pronouns have universal reading (Kratzer and Shimoyama 2002).

(7) Universal Generalized Quantifiers and indeterminate pronouns in Japanese

zenbu ("all things"), *zenin* ("all people"), *minna* ("all people"),

subete ("everythings"), *daremo* (whoever), *itsumo* ("whenever"),

doremo ("whichever")

The licensing conditions for [N-nom-N] as NPI are the following: (i) [N-nom-N] is an external argument of an embedded clause, and (ii) the matrix clause contains negation. (8) shows the distributions.

(8) a. * [S [Subj N ga N] ... VP ...]
b. * [S [Subj N ga N] ... VP-Neg ...]
c. ✓ [S' ... Neg ... [S [Subj N ga N] ... VP-(Neg) ...]]

If [N-nom-N] sequence appears in the matrix clause, a sentence is ruled out in both cases where the matrix clause is negated and not negated ((8a,b)). If [N-nom-N] shows up in subject position of embedded clause of which the matrix clause has negation, however, the whole sentence is totally fine ((8c)). Typical expressions for matrix clause in this construction are phrases with wide scope negation in (9).

Wide Scope Negation: Neg > ∀

(9) ... (to iu) wake dewa nai "it is not the case that ..."
... to wa kagira-nai "it is not necessary that ..."
... to wa ie-nai "you can not say that ..."
... to wa shinzi rare-nai "it is unbelievable that ..."
... to wa omoe-nai "I do not think that ..."

(Aihara, 2000)

Now let us look at data. Sentences in (10) are examples for (8a), (11) for (8b), and (12) for (8c), respectively.

(10) a. * [Minna ga minna] daigaku-e nyugaku-suru
everyone (Nom) everyone universiy-to enter-do

"Everyone enters an university"

b. * Gengogakka-no gakusei-wa [Minna ga minna]
Ling.Dep.-(Gen) students-(Nom) everyone (Nom) everyone
daigakuin-e shingaku-suru
graduate course-to enter-do
"Every student in Linguistics Department enters a graduate course"

(ibid.)

(11) a. * [Minna ga minna] daigaku-e nyugaku-shinai
everyone (Nom) everyone universiy-to enter-do (Neg)
(koto)
(the thing that)
"(The thing that) it is not the case that for every student x, x enters an University"

b. * [Minna ga minna] cyushoku-wo tabenai
everyone (Nom) everyone lunch-(Acc) eat (Neg)
(koto)
(the thing that)
"(The thing that) it is not the case that for every student x, x eats a lunch"

(ibid.)

(12) a. [S [Zenin ga zenin] sono jugyou-ni syusseki-shita]
all people (Nom) all people that class-(Dat) attend-did
wakedewa nai
be the case (Neg)
"It is not the case that for every x, x attended the class" implies that "Almost all people came, but few people did not come to the class."

b. [$_S$ [Zenin ga zenin] sono jugyou-ni
all people (Nom) all people that class-(Dat)
syusseki-shi-nakatta] wakedewa nai
attend-do-not(Past) be the case (Neg)
"It is not the case that nobody attended the class" implies that "Almost all people did not come, but few people attended the class."
(ibid)

Important thing here is that sentences with this configuration sound that the speaker has a negative attitude for the event or state that the sentence describes. Look at (13). The sentence is totally fine following the appropriate configuration in (8c).

(13) [Minna ga minna] sono jugyo-ni kita wakedeha-nai
everyone (Nom) everyone that class-(Dat) came it is the case-Neg
"It is not the case that for every x, x came to the class"

Let us suppose that the total number of student of a class is 30. (13) means that it is not the case that all 30 students attended the class, and actually a couple of students did not show up there. Besides, this sentence has an implicature; the state which the sentence describes is not preferable for the speakers. A speaker of (13) hopes that everyone comes to the class. Even when this sentences is embedded in "John believes that," this implicature for a speaker survives. (14) does not have negative attitude of John, but of the speaker.

(14) John-wa [$_{CP}$ [minna ga minna] sono jugyo-ni kita
(Nom) everyoue (Nom) everyone that class-(Dat) came

wakedeha-nai to] sinziteiru
it-is-not-the-case-Neg (C) believe(Prog)
"John believes that it is not the case that for every x, x came to the class"

2.1. *Because-of* clause

The [N-nom-N] sequence appear in *because-of* clause, as can be seen in (15).

(15) a. [[Ziki ga ziki] dakara], yameta hou-ga iiyo
timing (Nom) timing because of stop option-(Nom) better
"I think it is better for you to stop because timing is not good"

b. [[Basyho ga basyho] dakara], dare mo konai
place (Nom) place because of who too come(Neg)
kamosirenai
may
"I'm afraid nobody will come here because this place is pretty bad / inconvenient."

c. [[Aite ga aite] dakara], makeru kamoshirenai
opponent (Nom) opponent because of, lose may
"I'm afraid I will lose the game because my opponent is too strong"

d. [[Mondai ga mondai] dakara] , karugarushiku atsuka-e-nai
problem (Nom) problem because of without-care treat-can-Neg
"This problem is so serious as I cannot treat it roughly"

In (15) there is negative nuance for each sentence. These sentences imply that speakers of these sentences have negative or unfavorable attitude for an event in future. NPs in [N-nom-N] are the reasons for such attitude. If statements of matrix clause are preferable ones, the whole sentences do not make sense.

(16) a. # [[Ziki ga ziki] dakara], yatta hou-ga iiyo
timing (Nom) timing because of challenge option-(Nom) better
"I think it is better for you to challenge because of the timing"

b. # [[Basyho ga basyho] dakara], minna kuru to
place (Nom) place because of everybody come (Comp)
omouyo
think
"I think everybody will come here because of this place."

c. # [[Aite ga aite] dakara], kat-eru kamoshirenai
opponent (Nom) opponent because of, win-can may
"It is possible for me to win the game because of my opponent"

d. # [[Mondai ga mondai] dakara], tekitouni yatteokou
problem (Nom) problem because of without-care will-treat
"I will treat this problem so easily because of (importance of) the problem"

2.3. Predicate of copula sentences

The third type of example where [N-nom-N] appears is predicate of copula sentences. (17a) is an ordinal copula construction in Japanese. A structure of [N-nom-N] can be the complement of *da* "*be*" as shown in (17b). In this case, NP-Nom "student-(Nom)" in [N-nom-N] is not subject of *da* "*be.*"

(17) a. John-wa gakusei da
(Nom) student be
"John is a student"

b. John-wa [[gakusei wa gakusei] da]
(Nom) student (Nom) student be
"(John does not look like student, but actually) John is a student"

In this construction, the whole sentence with [N-nom-N] means that an individual given in subject has some property which is described by the complement of "be", but likelihood of the property is less than usual cases. In (17b), for example, John is actually a student, but the likelihood of John to be a student is less than familiar standard of students. In short, John does not look like a student because of some bad reason (his poor appearance, his laziness, and so on). The same kinds of examples are shown in (18). In both sentences in (18), an individual denoted by subject NP does not reach a common-sense standard of property described in complement of "be."

(18) a. Annani toshi-wo totte-iru ga, John-wa [[gakusei wa
such age-(Acc) take-(Prog) but John-(Nom) student (Nom)
gakusei] da]
student be
"Even though he is so old guy, but he is actually students in spite of his old age"

b. Furuku-te yoku kosyou suru ga, kono kuruma-wa
old-and often breakdown do but this car-(Nom)
[[Toyota wa Toyota] da]
(Nom) be
"This car is very old and often gets breakdown, but it is actually Toyota."

If likelihood of an individual of subject NP deviates from some usual standard for good reason, the whole sentence sounds awkward.

(19) a. # Annnani subarashii ronbun-wo kaku ga, John-wa
such brilliant paper-(Acc) write but John-(Nom)

[[gakusei wa gakusei] da]
student (Nom) student be
"He writes very brilliant papers, but he is still a student."

b. # Totemo koukyuuni mieru ga, kono kuruma-wa [[Toyota
very expensive look like but this car-(Nom)
wa Toyota] da]
(Nom) be
"This car looks very expensive, but it is actually just a Toyota"

2.4. Tautological copula sentence (Kagimura, 1998)

Kagimura (1998) provides data which show that the [N-nom-N] configuration appears in the remnant part of *da* "be." This construction is a kind of tautology, but it does contain a conversational force. English also has the same construction as can be seen in (21).

(20) a. [Kodomo wa kodomo] da
children (Nom) children be
"Children are children"

b. [Kisoku wa kisoku] da
rule (Nom) rule be
"Rules are rules"

(21) Mother: Did the children ever clean up their rooms?
Father: Well, *boys will be boys*.

(Gibbs, 1994)

This is quite similar to the third examples which we saw in the previous subsection, but the difference is that N-nom in [N-nom-N] is the subject of

the whole sentence in (20a,b), while the configuration of [N-nom-N] is just a part of complement of "be" in (17b) and (18).

Sentences in (20) share a negative nuance of speaker. The meaning of the whole sentence sounds like tautological statement and vacuous, but actually these sentences have particular intents in a speech act. In (20a) there is some presupposition with bad nuance as common sense, saying that children are noisy and ill mannered generally. The intent of a speaker of (20a) is, for example, saying that "children are not adult and children are ill-mannered generally, so it is no use to expect that they behave themselves." As for (20b), let us suppose a following situation; John made a parking violation, and an officer found out his car parked illegally. When officer gave a violation ticket to John, he asked the officer to let him go by. But unfortunately for John, the officer was a very serious guy, shaking his head and saying (20b), which means "actually there is a rule and I must follow it, so I cannot miss your parking violation." Both (20a) and (20b) are some unpleasant statements. If [N-nom-N] appears in some statements with positive attitudes, such sentences sound odd.

(22) a. # [Kyouju wa kyouju] da
professor (Nom) professor be
"Professors are professors" (in a context where a speaker respects a professor)

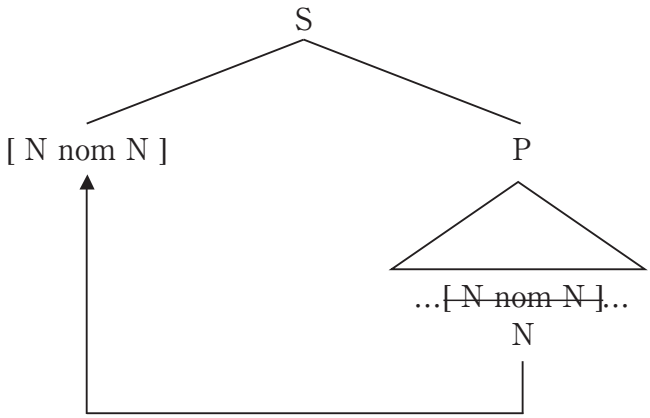
b. # [Abenjaazu wa abenjaazu] da
(Nom) be
"Avengers are Avengers" (in a situation where a speaker is amazed at the great performance of the avengers in a movie)

3. Analyses

Basic idea is the following; interpretation of a sentence with [N nom N] configuration has a presupposition with respect to speaker's negative attitude for event or state which the relevant sentence describes. [N nom N] makes a unit as a trigger of such a negative nuance. Following this assumption I suggest that [N nom N] moves up to the root of a sentence, and it takes the rest of the sentence as its argument. (23) is the LF of the construction. P is the original proposition from which [N nom N] goes out to the top of the tree. As for the proposition P, the trace of [N nom N] is interpreted as an N, which is just a noun without any negative nuance any more.

For example, in an interpretation of a sentence (24) (=(17b)), *gakusei wa gakusei*, which is the part of [N nom N] sequence, moves up to the root of the sentences during the derivation as can be seen in (25), and it takes the rest of the sentence P as its argument. After the movement of [N nom N], its trace of the unit is interpreted as just N, which is *gakusei* instead of *gakusei wa gakusei*.

(23)



(24) [$_P$ John-wa [[gakusei wa gakusei] da]]
(Nom) student (Nom) student be
"(John does not look like student, but actually) John is a student" (= (17)b)

(25) [Gakusei wa gakusei] [$_P$ John-wa [~~[gakusei wa gakusei]~~ da]]

(26) [Gakusei wa gakusei] [$_P$ John-wa [[**gakusei**] da]]

The interpretation of [N nom N] is on the same way as adversative predicates "sorry" (cf. von Fintel, 1999, pp.121-127).

(27) $[\![\text{(N nom N)}]\!]^{f,g}(P)(\alpha')(w)$ is defined only if

(i) $f_i(\alpha', w) = DOX(\alpha, w)$

(ii) $f_i(\alpha', w) \cap p \neq \varnothing$

(iii) $f_i(\alpha', w) - p \neq \varnothing$

if defined, $[\![\text{(N nom N)}]\!]^{f,g}(P)(\alpha')(w) = 1$ iff

$\forall w' \in \max_{gi(\alpha', w)}(F_i(\alpha', w)): w' \notin p$, where;

P: the whole proposition with N instead of [N nom N].

f: the modal base function from pairs of an individual and a world to a set of worlds.

g: the ordering source which maps pairs of an individual and a world to a set of propositions with respect to the subject's preferences

α': a speaker

w: a possible world where α' utters the relevant sentence

DOX(α, w) : the set of worlds compatible with everything α' in w believes (doxastically accessible worlds)

p: a set of worlds where P is true

The denotation of a sentence with [N nom N] can be defined if the following three presuppositions are satisfied. For one thing, f_i (α', w) = DOX(α, w), which means that the modal base should be a speaker's belief in the interpretation of adversative expression. What is more, f_i (α', w) $\cap$ p $\neq$ $\varnothing$, which intuitively means that [[N nom N]] (P) presupposed that "the speaker does not believe that not P". More precisely, the intersection between the set of a speaker's belief and the set of worlds where John is a student should not be null set. One final point is f_i (α', w) $-$ p $\neq$ $\varnothing$, which requires that the truth of [[N nom N]] (P) presupposes that "α does not believe that p." This means that the intersection between f_i (α', w) and the complementary set of p should not be null. In the interpretation of (24), for example, the sentence is defined only if (i) in a speaker's belief in w, (ii) a speaker does not believe that John is a student, (iii) and a speaker does not believe that John is not a student.

If defined, the denotation of a sentence with [N nom N] is true iff for all P-best worlds for a speaker with respect to the ordering relation g, these worlds are not the elements of the set of worlds where P is true. In other words, it is true iff in the best of all relevant worlds to speaker, P is not true. This interpretation follows the basic intuition that the sentence with [N nom N] have a flavor that a speaker does not like a situation P is true, and hopes P is not true. (28) is an implementation of the interpretation of (24) based on the way of interpretation in (27)

(28) If (24) is defined,

$$[[\ (24)\ ]]^g = 1 \text{ iff } \forall w' \in \max_{g(\text{speaker, w})}(\{w\text{: w is compatible with speaker's belief}\}): w' \notin \{w\text{: John is a student in w}\}$$

4. Further Direction

As we have seen earlier, the structure of [N-nom-N] appears in some undesirable statements, but this explanation does not cover all of the data with the structure of [N-nom-N]. For example, the fourth kind of examples in 2.4., the interpretation in (27) does not work because P would not be a proposition in this case. In data in 2.1., there is an issue to be addressed; if [N nom N] is a kind NPI, why is the configuration in (8b) prohibited? The reason why it is not allowed may be in the syntax, not in semantics or pragmatics.

Then, we need to investigate the interpretation for each four kinds of example one by one, not trying to explain the whole range of data all at once. After formalizing the interpretation for each example, we will try to generalize the four kind of analysis with respect to "negative statement."

References:

Aihara, Masahiko. (2000) Nitchieigono Hiteikoubunno Kenkyu ("The Comparative Study of Negative Constructions in Japanese and English"), ms. Kanda University of International Studies.

Gibbs, Raymond W. (1994) *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language and Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kagimura, Kazuko. (1998) The Figures of Pragmatics, Ph.D Dissertation. Kaisai University of International Studies.

Kratzer, Angelika and Shimoyama, Junko. (2002) Indeterminate Phrases: the View from Japanese. In *The Proceedings of teh Third Tokyo Conference on Psycholinguistics*, ed. Yokio Otsu, 1-25. Tokyo: Hitsuzi Syobo.

Mikami, Akira. (1960) *Zou-wa Hana-ga Nagai ("An Elephant has a long nose")*. Tokyo: Kuroshio.

Noda, Hisashi. (1996) *wa to ga ("-wa and -ga")*. Tokyo: Kuroshio.

Shibatani, Masayoshi. (1990) Joshi-no Imi-to Kino-ni Tsuite; wa to ga wo cyuushinni ("The meaning and function of particles; the case of -wa and -ga"). In *Bunpou-to Imi-no Aida ("Between the Grammar and Meaning")*, ed. The committee of papers

in honor of Tetsuya Kunihiro. Tokyo: Kuroshio Syobo.
von Fintel, Kai. (1999) NPI-licensing, Strawson-Entailment, and context dependency. *Journal of Semantics* 16: 97-148.

ラグビー選手における
トレーニング合宿前後の体組成変化

高　階　曜　衣

緒言

15人制ラグビーは，それぞれ15名からなる２つのチームが得点を競う競技であり，試合時間が80分にも及ぶ高強度の間欠的な競技である（Ian，2007[1]；八百ら，2013[2]）。ポジションは15通り存在し，フォワード（以下「FW」と略す）とバックス（以下「BK」と略す）の２つに大別することができる（日本ラグビーフットボール協会，2006[3]）。

近年，競技力向上やコンディショニングのために，国内外のスポーツ現場において体重や体組成の測定が行われている。Wilmore（1983）[4]や Olds（2001）[5]は，スポーツを行う上で体組成を知ることは重要であると指摘しており，実際にあらゆる競技において体組成に関する研究が数多く報告されている（Alejandro et al.，2015[6]；Lago-Peñas et al.，2011[7]）。ラグビー選手を対象に体組成を検討した研究では，日本人選手はニュージーランド選手と比べ，体脂肪率が高いことが明らかにされている（Ueno and Araki，1990[8]）。国内においても，九州学生ラグビー連盟に所属するチームを対象に競技レベルで比較した結果，上位チームの選手は下位チームの選手に比べ，除脂肪量が有意に高い値を示し，一方，体脂肪率は下位チームの選手の方が高い傾向にあるといわれている（石原ら，1997[9]）。さらに，ポジションで比較した研究では，FW は BK と比較して体重が重く，体脂肪率が高いことが指摘されている（Gabbett，2002[10]；

谷嶋・春口，2003[11]；Mashiko et al.，2004[12])。このように，競技レベルやポジションごとに検討した報告は散見されるが，トレーニング合宿のような長期の運動負荷が体重や体組成に与える影響を検討した報告は極めて少ない(Mashiko et al.，2004[12])。

これまで体組成に関する報告では，水中体重秤量法や二重エネルギーX線呼吸法などが用いられ評価が行われてきた。しかし，測定に掛かる時間や費用等を鑑みると，これらの測定法を用いて日常的に多くのスポーツ選手の体組成を測定することは困難である。そこで本研究では，スポーツ現場において，継続的かつ簡易的に計測することが可能な生体インピーダンス法を用いて体組成を評価し，長期の運動負荷前後の変化を明らかにすることを目的とした。

対象と方法

1．対象

A大学保健体育審議会ラグビーフットボール部に所属する男子学生15名（年齢：19.2±0.1歳，身長：175.2±1.9cm，競技歴：9.9±1.0年）を対象とした。本研究は，所属機関における倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：27-9）。なお，被験者には事前に，研究の主旨及び内容，予想し得る危険性，研究への参加を辞退することが被験者にとって不利益にならないということ，いつでも途中辞退ができるということ，研究で得た個人的なデータは個人が特定できないように管理をすること，を十分に説明した。その後，書面にて実験協力の同意を得た。

2．実験手順

被験者は長期の運動負荷として，夏期に行われたトレーニング合宿に参加した。合宿は休養日3日間を含め全25日間であった。合宿前と合宿における最後の運動終了から24時間後に，体重および体組成を測定した。

3．測定項目及び測定機器

体重および体組成の測定機器及び測定方法は以下の通りである。体組成は，

体脂肪量，体脂肪率，骨格筋量，骨格筋率を測定した。

体組成測定は，Inbody 570 Body Composition Analyzer（BIOSPACE社，KOREA）を用い，体内に微弱な電流を流し，その抵抗値により分析を行う生体インピーダンス法にて測定した。同様に体重を測定した。測定実施４時間前より水分補給を含めた飲食を控えさせ，測定をする際は，足底および手のひらの汗のふき取りを行った。測定時間は，午後１時であった。なお，衣類による誤差を少なくするため，測定時は下着のみの着用であった。

４．合宿における練習の概要

本研究の対象となるトレーニング合宿は，秋季リーグ開幕に向けて例年行われている合宿であり，休養日３日間を含め全25日間行われた。なお，前半の11日間は，岩手県北上市，後半の11日間は長野県上田市で実施された。それぞれの内容を以下に記す。

初日は，宿舎到着後は練習場でグランド設営し，軽く汗をかく程度に体を動かした。19時から夕食を取り，20時よりミーティングを実施した。２日目から10日目までの一日の流れは，図１の通りである。朝４時半に起床し，各自７時の朝食に間に合うよう，宿舎から片道約４km離れたダムを起点に折り返すランニングを行った。朝食後，宿舎から練習場へ向け，各自片道約７km走って移動した。９時から11時までの午前の練習は，ポジション練習を中心に行った。練習後は宿舎まで走って移動し，12時から昼食と休憩を取った。午後は，15時からの練習に合わせ，各自練習場へ移動。チーム練習が主となり，試合形式の練習を行った。練習終了後，各自宿舎まで移動し，19時から夕食を取り，20時から約１時間程度ミーティングを実施した。その後は就寝まで自由時間となり，体幹トレーニングをする者，休息を取る者など様々であった。最終日は，午前中に片付け等を終えたのち，寮へ移動し，到着後解散した。

休養日３日間を挟んだ後，後半のトレーニング合宿が実施された。後半の11日間はリーグ戦に向けての対外試合を主に行った。初日は，15時から17時半までＢ大学と合同練習を行った。夕食は19時から取り，20時からミーティングを実施した。２日目から６日目までの一日の流れは図２の通りである。グラン

ドがホテルに併設されているため，早朝５時半よりポジションごとに軽めの練習を行った。９時から11時までは午後の練習試合に向けてのチーム練習を行った。午後は，他大学と練習試合を行った。19時から夕食を取った後，20時より試合内容に関するミーティングをし，その後は就寝時間まで自由時間だった。

７日目から10日目までは先の練習試合の内容を踏まえ行われた。午前の練習開始までは２日目から６日目までと同様であった。前半の合宿同様，９時から11時まではポジションごとに練習を行い，15時から17時半はチーム練習を行った。なお，８日目の午後のみ他大学の練習試合を見学した。

以上が本研究で実施したトレーニング合宿の概要である。なお，合宿実施前に行われていた日常の練習は，走り込み１時間程度，ポジション，チーム練習２時間程度，各自ウエイトトレーニングを行うという内容だった。

図１　合宿前半の一日の流れ

８月８日（土）	
早朝 ７：00	ダムヘランニング 朝食
９：00 11：00	練習
12：00	昼食
15：00 17：30	練習
19：00	夕食
20：00	ミーティング

図２　合宿後半の一日の流れ

８月22日（土）	
５：30 ７：00	練習 朝食
９：00 11：00	練習
12：00	昼食
13：00 17：30	vs B 大学
19：00	夕食
20：00	ミーティング

統計分析

測定結果は平均±標準誤差（mean ± S.E.）で示した。合宿前後の比較には，対応のあるｔ検定を用いた。相関関係は，Pearson の積率相関係数で求めた。

いずれも有意水準は５％未満とした。分析には，SPSS statistics 21.0（IBM, USA）を用いた。

結果

１．体重および体組成

表１に合宿前後の体重および体組成の比較を示した。体重（pre：88.9±2.5kg, post：84.7±2.5kg，t(14)=11.09，p<0.01），体脂肪量（pre：18.3±1.7kg，post：14.9±1.5kg，t(14)=7.5，p<0.01），体脂肪率（pre：20.2±1.4%，post：17.2±1.3%，t(14)=7.5，p<0.01）はいずれも，合宿前と比較して合宿後，有意な減少を示した。骨格筋量は合宿前後で有意な変化を示さなかった（pre：40.5±0.9kg，post：40.3±1.0kg，t(14)=0.79，n.s.）。骨格筋率は合宿前と比較して合宿後，有意な増加を示した（pre：45.8±0.8%，post：47.8±0.8%，t(14)=7.73，p<0.01）。

表１　合宿前後の体重および体組成の比較

	合宿前	合宿後	p 値
体重（kg）	88.9±2.5	84.7±2.5	p<0.01
体脂肪量（kg）	18.3±1.7	14.9±1.5	p<0.01
体脂肪率（%）	20.2±1.4	17.2±1.3	p<0.01
骨格筋量（kg）	40.5±0.9	40.3±1.0	n.s.
骨格筋率（%）	45.8±0.8	47.8±0.8	p<0.01

mean　S.E.
n.s. : not significant

２．相関関係

図３に体重変化率と体脂肪量変化率，図４に体重変化率と骨格筋量変化率の相関関係を示した。体重変化率（-4.79±0.4%）と体脂肪量変化率（-19.2±2.0%）の間に有意な正の相関関係が認められた（r=0.617，p=0.014）。一方，体重変化率と骨格筋量変化率（-0.57±0.6%）の間には有意な相関関係は認められなかった（r=0.485, p=0.067）。なお，変化率は，合宿前から合宿後の値によって算出した。

図 3　体重変化率と体脂肪量変化率の相関関係

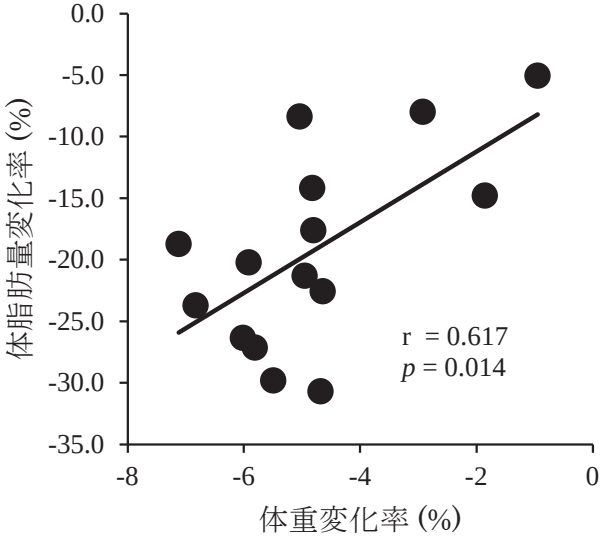
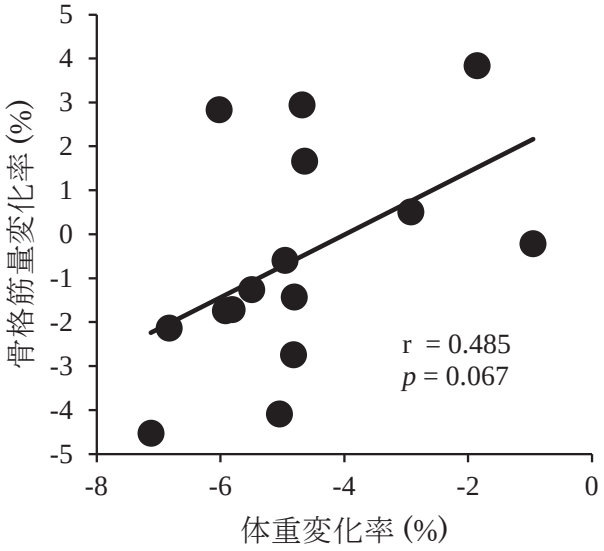


図 4　体重変化率と骨格筋量変化率の相関関係



考察

近年，余分な体脂肪の蓄積は競技パフォーマンスに悪影響を及ぼすという報告が散見される。Olds et al.（1985）[13]は，自転車競技者を対象に検討したところ，体脂肪量が 2 kg 増加すると，4000m 個人追い抜きの記録が約1.5秒遅くなることを明らかにしている。バスケットボール選手を対象にした報告では，体

脂肪の多い選手は，最大酸素摂取量の推定値が低いことを指摘している（Alejandro et al.，2015[6]）。国際大会および全日本柔道優勝大会出場者を含む計63名の大学柔道選手を対象にした研究では，体脂肪率が高くなるにつれて，瞬発性持久力と動的平衡性は低下すると報告されている（Iida et al.，1997[14]）。さらに，ブラジルのナショナル男子柔道選手22名を対象にした研究では，体脂肪率が高い人ほど最大酸素摂取量が低いことが明らかにされており，体重移動を伴う体力指標において不利であることが指摘されている（Franchini et al.，2007[15]）。したがって，体組成と競技力向上に関与する体力指標との間に関連があることが明らかにされている。さらに，余分な体脂肪は体力指標に悪影響を及ぼすだけでなく，下肢の外科的疾患を中心とするスポーツ傷害の誘因になると考えられている（山本，1996[16]）。

実際，ラグビー選手を対象にした研究において，体脂肪が高い選手は有酸素能力や走速度の低下，体重比パワー，体温調節機能の低下が認められることが明らかにされている（Wilmore，1983[4]；Withers et al.，1987[17]；Meir et al.，2001[18]）。ラグビーにおける一般的な体力要素が，筋力，筋持久力，速さ，加速度，機敏さ，有酸素能力，柔軟性であるとされていることや（Meir，1993[19]），競技レベル別に比較した研究結果をもとにしても（Ueno and Araki，1990[8]；石原ら，1997[9]），余分な体脂肪の蓄積は，ラグビーの競技パフォーマンスに対し負の作用をもたらす可能性がある。したがって，体組成は競技力，パフォーマンス向上や下肢を中心とするスポーツ傷害の発症防止を図る上で重要な指標となり得る。

本研究のトレーニング合宿に参加した選手は，合宿後，体重および体脂肪量，体脂肪率が有意な減少を示し，骨格筋率が有意な上昇を示した。体脂肪率および骨格筋率に有意な変化が認められた理由は，体重および体脂肪量の絶対量に有意差があったためである。さらに，合宿前後にかけての体重変化率と骨格筋量変化率の間に有意差は認められず（図４），体重変化率と体脂肪量変化率の間に有意な相関関係が認められたことから（図３），合宿前後で体重が有意な減少を示した原因は，体脂肪量の減少に起因していると考えられる。

一般に，体重の増減は，食事による摂取エネルギー量と代謝や運動によるエネルギー消費の釣り合いに依存し，消費エネルギー量の増大により体重や体脂肪量が減少するといわれている（岡・加藤，2012[20]；下山，2018[21]）。この他にも有酸素運動の実施により脂肪燃焼が促進するといわれているが，体重や体脂肪は，運動強度に関係なく，エネルギー消費量の変化量に依存して変動することが明らかにされている（Nicklas et al.，2009[22]；松原ら，2011[23]）。本研究で実施したトレーニング合宿は，図１，図２に示した通り，約３時間の日常練習と比較し，運動実施時間が長いため，エネルギー代謝が亢進していたと考えられる。さらに，合宿前半において早朝と移動時のランニングのみで走行距離が約36km に達していたことからも，エネルギー消費量が増大していたことが明らかである。そのため，合宿前後の体重および体脂肪量の著しい減少は，高強度の運動負荷量によって摂取エネルギー量と消費エネルギー量の出納バランスが大きく変化したものと推測される．体脂肪の蓄積がラグビーに必要な体力要素の低下を招く可能性があることからも（Wilmore，1983[4]；Withers et al.，1987[17]；Meir，1993[19]；Meir et al.，2001[18]），本合宿の実施による体組成の変化は競技パフォーマンス向上に寄与する可能性が示唆される。しかしながら，体重は Quarrie and Hopkins ら（2007[24]；角谷ら，2013[25]）が報告しているように，コンタクトスポーツにおいては重要な要素の一つであると考えられている。したがって，今後は，“単に体の重さを獲得する”ことのみに焦点を当てるのではなく，競技パフォーマンスに悪影響を及ぼし，下肢を中心としたスポーツ傷害の誘因になり得るとされる余分な脂肪を落とし（Wilmore，1983[4]；Withers et al.，1987[17]；山本，1996[16]；Meir et al.，2001[18]），除脂肪量増量による体重増加を目指すべきである。

一方，本合宿の問題点として，急激な体重の減少が挙げられる。日本肥満学会は，肥満症治療ガイドラインにおいて３ ヵ月から６ ヵ月で５kg の体重減少を推奨しており（肥満症治療ガイドライン作成委員会，2006[26]），さらに，アメリカのスポーツ医学会は，１週間に１kg 以内の減量に止めるべきであると勧告している（American College of Sports Medicine，1976[27]）。これらはスポーツ選手

のみを対象にしているわけではないが，いずれも急激な体重変動は健康を害する危険性があるとして，緩やかな体重減少を行うべきであると啓蒙している。本被験者においても，秋季リーグ戦開幕２週間前の時期に大幅に体組成が変化することは競技パフォーマンスやコンディショニングに悪影響を与えることが危惧される。今後は，日常的に選手の体組成に着目し，体脂肪量の変化が適切に行われるような運動負荷量の設定や栄養管理を行っていくことが重要であると考えられる。もちろん，競技スポーツにおいては，メンタル面のタフさを高める行動の一つとして高強度の運動負荷を課すことも慣例としてあるかもしれないが，その際は十分な健康状態把握に努めることが最優先であろう。

結論

本研究は，25日間のトレーニング合宿前後の体重および体組成変化を検討した。その結果，体重，体脂肪量，体脂肪率が有意な低下を示した。骨格筋量に有意な差は認められなかったが，骨格筋率が有意な増加を示した。さらに，体重変化率と体脂肪量変化率の間に有意な正の相関関係が認められた。一方，体重変化率と骨格筋量変化率に有意な相関関係は認められなかった。

注

本論文は，日本大学学位請求論文「長期の運動負荷に対する免疫応答および神経内分泌反応」（2018年３月学位授与）の一部に加筆修正を加えたものである。

参考文献

１） Ian Jeffreys（2007）Post Game Recovery Strategies for Rugby. NSCA’ s Performance Training Journal 6(4)：13-16.

２） 八百則和・小山孟志・西村一帆・花岡美智子・加藤譲・藤井壮浩・栗山雅倫・木村季由・田村修治・今川正浩・陸川章・積山和明・位高駿夫・宮崎誠司・町田修一・内山秀一（2013）競技種目におけるフィールドテストによる運動能力評価の開発に関する研究―男女バレーボール，男女ハンドボール，男子バスケットボール，

男子ラグビー，男子サッカーの種目横断的研究―．Tokai J. Sports Med. Sci. 25：37-44.

3）日本ラグビーフットボール協会（2006）わかりやすいラグビーのルール．成美堂出版．東京：190-191.

4）Wilmore JH（1983）Body composition in sport and exercise: directions for future research. Med Sci Sports Exerc 15(1)：21-31.

5）Olds T（2001）The evolution of physique in male rugby union players in the twentieth century. Jour Sports Sci 19：253-262.

6）Alejandro V, Santiago S, Gerardo VJ, Carlos MJ, Vicente GT（2015）Anthropometric Characteristics of Spanish Professional Basketball Players. J Hum Kinet 46：99-106.

7）Lago-Peñas C, Casais L, Dellal A, Rey E, Dominguez E（2011）Anthropometric and Physiological Characteristics of young soccer players according to their playing positions: relevance for competition success. J Strength Cond Res 25(12)：3358-3367.

8）Ueno Y, Araki Y（1990）IMPORTANCE OF LEAN BODY WEIGHT（LBW）TO GAIN ANAEROBIC : POWER INDISPENSABLE FOR RUGBY FOOTBALL．流通経済大学社会学部論叢：137-142.

9）石原一成，堀田昇，高杉紳一郎，照屋博行，三村寛一（1997）九州ラグビーフットボール選手の脚筋力および形態・体力．J. Health Sci 19：53-66.

10）Gabbett TJ（2002）Physiological characteristics of junior and senior rugby league players．British Journal of Sports Medicine 36：334-339.

11）谷嶋二三男・春口廣（2003）大学ラグビー選手の骨密度や体脂肪率と体格や体力との関係．横浜市立大学紀要体力医学編 31：1-6.

12）Mashiko T, Umeda T, Nakaji S, Sugawara K（2004）Position related analysis of the appearance of and relationship between post-match physical and mental fatigue in university rugby football players. Br J Sports Med. Oct38(5)：617-21.

13）Olds TS, Norton KI, Craig NP（1985）Mathematical model of cycling performance. J Appl Physiol 75(2)：730-737.

14）Iida E, Nakajima T, Matsuura Y, Takeuchi M, Matsumoto D, Tanaka H, Komori F（1997）The relationship between basic physical fitness and body fat in +95kg category university judo athletes．武道学研究 30(1)：22-30.

15）Franchini E, Nunes AV, Moraes JM, Del Vecchio FB（2007）Physical fitness and anthropometrical profile of the Brazilian male judo team. Journal of Physiolosical Anthropology 26(2)：59-67.

16）山本利春（1996）傷害予防の観点からみた柔道選手の階級別脚筋力と身体組成の評価．臨床スポーツ医学 13(4)：429-433.

17）Withers RT, Craig NP, Bourdon PC, Norton KI（1987）Relative body fat and

anthropometric prediction of body density of male athletes. Eur J Appl Physiol 56：191-200.
18） Meir R, Newton R, Curtis E, Fardell M, Butler B（2001）Physical fitness qualities of professional rugby league football players: Determination of positional differences. J Strength Cond Res 15：450-458.
19） Meir R（1993）Evaluating players' fitness in professional rugby league: Reducing subjectivity. Strength and Cond Coach 1：11-17.
20） 岡拓矢・加藤元美（2012）ヒトにおける体重と体組成の変動パターンおよび体脂肪率に変化を与える要因．黒潮圏科学 5（2）：161-167.
21） 下山寛之（2018）アスリートにおけるエネルギー代謝および身体組成．体力科学 67(5)：357-364.
22） Nicklas BJ, Wang X, You T, Lyles MF, Demons J, Easter L, Berry MJ, Lenchik L, Carr JJ（2009）Effect of exercise intensity on abdominal fat loss during calorie restriction in overweight and obese postmenopausal women : a randomized, controlled trial. Am J Clin Nutr 89：1043-1052.
23） 松原建史，柳川真美，小池城司（2011）日常生活での相対的中等強度の身体活動が体重，体脂肪率，最大下有酸素性作業能力と脚力の変化に及ぼす影響．体育学研究56：105-113.
24） Quarrie KL, Hopkins WG（2007）Changes in player characteristics and match activities in Bledisloe Cup rugby. J Sports Sci 25(8)：895-903.
25） 角谷雄哉・上嶋繁・川西正子・時本昌樹・松浪登久馬・佐川和則・明神千穂（2013）大学アメリカンフットボール選手における身体組成，血液検査および栄養摂取状況の所見―ポジションによる相違―．体力科学 62(5)：413-423.
26） 肥満症治療ガイドライン作成委員会（2006）肥満治療ガイドライン2006．日本肥満学会誌12：12.
27） American College of Sports Medicine（1976）Position statement on proper and improper weight loss program. Med Sci Sports Exerc 8：11-14.

【緒言】競技スポーツ選手の多くは，競技大会での勝利や自己記録の更新に向けて合宿を度々行っている。スポーツ選手のパフォーマンスに影響を及ぼす要因の一つに体組成が挙げられる。これまで競技レベルやポジションごとに検討した報告は散見されるが，トレーニング合宿のような長期の運動負荷が体重や体組成に与える影響を検討した報告は極めて少ない。そこで本研究では，ラグビー部の合宿に着目し，合宿前後の競技スポーツ選手の体組成の変化を検討した。

【方法】A 大学ラグビー部に所属する男子選手15名を対象とした。被験者は長期の運動負荷として，夏期に行われた25日間のトレーニング合宿に参加した。生体インピーダンス法を用い，合宿前と合宿における最後の運動終了から24時間後に，体重および体組成を測定した。

【結果】体重，体脂肪量，体脂肪率はいずれも合宿前と比較して合宿後に有意に低下した（$p<0.01$）。骨格筋量に有意差が認められなかった。しかし，骨格筋率は合宿前と比較して合宿後に有意に増加した（$p<0.01$）。体重変化率と体脂肪量変化率の間に有意な相関関係が認められた（$p=0.014$）。一方，体重変化率と骨格筋量変化率に有意な相関関係は認められなかった（$p=0.067$）。

【考察】合宿前後の体組成を検討した結果，上述の通り，明らかになった。先行研究により，体脂肪の蓄積がラグビーに必要な体力要素の低下を招く可能性が指摘されていることからも，本合宿の実施により体組成の改善に努めることができたと考えられる。一方，本合宿の問題点として，急激な体重の低下が挙げられる。スポーツ選手のみを対象にしているわけではないが，急激な体重変動は健康を害する危険性があるとして，緩やかな体重減少を行うべきであると啓蒙されていることからも，今後はシーズンイン直前の合宿により体重および体組成の改善をするのではなく，日常的なトレーニングの中で体重および体組成の管理を行っていくべきであると考えられる。

【結論】本研究の結果，合宿後に体重および体脂肪率が低下し，骨格筋率が増加した。この事実は，筋肉量が増えたことによって生じたのではなく，余分な体脂肪量と体重の低下によるものであることを明らかにした。

【Introduction】Many competition athletes often participate in a camp to update their self-record and to win in a game. In this study, we investigated a training camp of a rugby club and examined the change in body composition of competition athletes before and after the camp.

【Methods】The subjects were 15 university students who were members of rugby football clubs. Using bioelectrical impedance analysis, we calculated

their body composition before and after the camp.

【Results】The weight, fat mass, and body fat percentage showed a significantly low value after the camp in comparison with before the camp ($p<0.01$). Skeletal muscle mass showed no significant difference. However, Skeletal muscle percentage showed a significantly high value after the camp in comparison with before camp ($p<0.01$). There was significant correlation between rate of weight and rate of body fat percentage between pre and post after the camp ($p=0.014$).

【Conclusions】This study demonstrated a decrease in weight and body fat percentage and an increase in skeletal muscle percentage in the subjects after the camp. However, these changes were not due to an increase in the quantity of muscle, but were due to a decrease in extra fat mass and weight.

Keyword：Training camp, Rugby, Body composition

吉田松陰『涙松集』の「吉備宮」歌解釈考

――今の世は君の誘子そいとおふみたふれきためてくしのみをとり――

小野美典

キーワード：吉備津神社、吉備真備、孔子、松陰と儒学

一　はじめに

『涙松集』は、吉田松陰の最後の上京の際の旅中詠を、日次の順に配列した歌集である。

幕府は、安政の大獄に際して梅田雲浜との関係から松陰の事情聴取を必要と考え、安政六年（一八五九）四月、長州藩に松陰の江戸送致を命じる。罪人扱いの松陰は、役人ら三十数名が同行する中、錠前付きの檻輿の中に腰縄もしくは手鎖の状態で置かれて護送される。一行は、同年五月二十五日に長州萩城下を出発して、郊外の涙松のほとりで小休止。ここで松陰は『涙松集』の一番「涙松」歌を詠んだ。これ以降、山陽道・東海道を東上、六月二十四日に江戸桜田の長州藩邸に到着。それまでの旅中に松陰は十八首を詠じ、江戸到着後も二首を詠作。七月九日に評定所からの呼び出しがあり、以降は伝馬町の獄舎で尋問を受け、同年十月二十七日、獄内で処刑され

た。享年三十歳である。

如上のように、松陰の上京の旅中と江戸到着後に、計二十首の歌が詠まれているが、これらを収載したのが『涙松集』である。檻送という特殊な状況下で、紙筆を持つことが許されなかったため、これらの和歌は松陰が口授したものを檻の傍らの藩士（片野十郎ら）が筆記したものであった。この二十首をもとに、和歌本文や詞書が添削・改変され、さらに歌が増補されて『涙松集』諸本が成立した。最も歌数が多いのは、本来の歌数の倍にあたる四十首を収載する流布本である。それら諸本の成立をめぐる問題と編纂目的等に関しては、旧稿[1]ならびに別稿[2]で詳述した。本章冒頭に記した松陰護送の旅の詳細も含めて旧稿・別稿を参照されたい。

それらの論考で触れ得なかった問題に、12番「吉備宮」歌の解釈とその削除をめぐる問題がある。

12番歌は、『涙松集』の核をなす旅中詠の一首で、松陰の心情が吐露された重要な歌である。にもかかわらず、この歌は流布本では削除されている。先行研究では、当該歌は非常に難解な歌として試解が提示されるのみであり、また部分的な語句に関しても解釈に大きな揺れがある。この歌意が掴みにくい（難解な歌）ということが削除の大きな理由として考えられるが、松陰詠をそのまま筆写したとされる原本[3]に施された添削やそれを踏まえた他の写本、また同時期の松陰の著作、思想的状況などを総合的に勘案すると、ある一定の解釈が可能なのではないかと思われる。

本稿は、先行研究において解釈の一致を見なかった12番歌に関して、それら諸説をまず整理し、先学が利用しなかった諸資料を援用することによって、現段階で最も妥当と思われる解釈試案を提示することを目的とするものである。

二　12番歌をめぐる先行研究と問題点

まず、松陰本所収の12番歌を、前後数首とともに挙げる。(4)

広島にて駕籠の戸を明よと警固の人に頼むとて
10世の中に思ひのあらぬ身なからもなを見まほしき広島の城　同（廿九日）
備前路（国にて）
11郭公まれになり行く夕くれに雨なら（たに）なくは聞さらましを　六月五日
吉備宮
12今の世は君の誘子（イサゴ）そいとおふ（ほ）みたふれきためてくしのみをとり　同
淡路島
13別れてはふたゝひ淡路島そとは知らてや人のあたに過らん　八日

五月二十五日に萩を立った一行は、二十八日に周防国の国境小瀬川を渡り、安芸国に入る。松陰は二十九日に厳島（9番）と広島城（10番）の歌を詠み、しばらく詠歌がないまま六月五日になって詠んだのが、11番歌・12番歌である。

11番歌の詞書は、本来の松陰詠では「備前路」であったが、松陰没後に後人(5)の手で「備前国にて」と改変されている。

さて、続く12番「吉備宮」歌が流布本において削除された歌である。

本歌は、非常に難解な歌として、先学の間でも解釈に揺れの見られる歌である。先行研究を以下に挙げる（傍線部は稿者。以下同断）。

《A》福本義亮・昭和12年[6]

吉備宮は①備後国真金村一宮吉備津神社、官幣中社、祭神は吉備津彦命、四道将軍の一、崇神天皇の十年に創建せらる、然し松陰先生の此歌は恐らく吉備真備を指されたものであらう、真備は入唐留学帰朝の後、大臣帝師となり、和気清麿と時を同ふして朝に立つて居た、清麿の遭難に際し道鏡の圧迫を蒙り遂に一語半句も彼が救済に言及せざりしは実に千歳の遺憾とする所である。　○此歌の大意を察するに「今の世（当世には）は君（真備）の同類が②多きこと故に、兇頑（道鏡をさしつゝ広く奸臣を諷す）を膺懲するに当つて、③徒に孔子の学（支那流といふの意）を尊重して清磨の正気を助くることなかりしは、国体擁護の日本精神に悖りたるものであつて実に遺憾なりとされたるものなるべし　○「誘子」（イザゴ）誘ふ子、即ち同類又は弟子の意　○「いとおほみ」いと多きこと故　○「たふれ」兇頑又は頑迷狂人の意　○「きため」罪する又は糺す、膺懲すること　○「くし」孔子の称であつて、④此句は孔子の実をとるのであつて、転じて漢籍にかぶれる即ち支那人流となつて真の日本精神なしと諷したるものならんか　○此の歌は流布本にはない、松陰全集による、⑤難解のものなれば敢て識者の教を請ふ。

・　・

《B》普及版全集の頭注・昭和14年[7]

君の誘子：君とは祭神の子孫なる儒学者吉備真備をさせるならん

四

たふれきため：たふれは狂人又は頑冥人、きたむは罪を鞠しただすこと
くし：孔子のこと。⑥儒教精神の真髄をとらんことを力説せるならん
・　・
《C》　大衆版全集の頭注・昭和48年[8]
吉備宮：⑦岡山県吉備郡高松町吉備津にある吉備津神社。吉備津彦命を祭る。
君：君とは祭神の子孫といわれる吉備真備のことか。
たふれきため：たふれは狂人、頑迷な人。きたむは罪をしらべただすこと。
くし：孔子のこと。⑧儒教精神の真髄をとるべきことを力説したものであろう。
・　・
《D》　山中鉄三論文・昭和56年[9]
不分明な歌だが、「君の誘子」は吉備津彦の鬼退治の話を頭に浮かべ、当世は鬼が⑨多いので頑迷な奴らをこらしめるため祈って籤だけを取ったことだ、ぐらいに解しておく。

これら先行論について、若干補足しておく。

傍線部①に「備後国」とあるが、「備中国」の誤りであろう。《C》の大衆版全集頭注の傍線部⑦「岡山県吉備郡高松町吉備津にある吉備津神社」が正しい（現在、高松町は岡山市に編入）。松陰が12番歌で詠んだ「吉備宮」がどの神社を詠じたものかは、後の考察に重要な意味を持ってくるので、以下慎重に考察しておく。

12番歌の詞書「吉備宮」は、備中国一宮「吉備津神社」と考えられる。備後国一宮も同名の「吉備津神社」

（当地では「一宮さん」と俗称されるという）であるが、こちらは、平成の大合併で福山市に編入する以前は、広島県芦品郡新市町宮内と呼ばれた地に鎮座していた。現在の地名表示では福山市となっているものの、同市のかなり北部に所在する神社で、当時の山陽道（西国街道）からは外れた地である。

松陰の護送の旅（『涙松集』の旅）には詳細な記録が残っている[10]が、宿泊地・休憩地等の記載は見当たらない。前掲の10番歌「広島にて駕籠の戸を明よと警固の人に頼むとて」が広島城を詠み、11番歌「備前路」で山陽道を備前国に向かう道へと入ったことを詠んでいるので、位置的には備後国一宮を詠んだ可能性もないとは言えない。しかし、松陰の旅は「中国路山崎路共陸路通行之事[11]」などと細かく規定されており、指定された中国路（西国街道・山陽道）を外れて備後国一宮を参拝（或いは社前通過）することはまずありえない。護送の役人の伏見からの報告にも「吉田寅次郎事去月廿五日御地出立後中国路都合日積之通一連一同罷登播州正条川ニ而一日川留有レ之其外聊無二故障一今夕伏見之駅到着[12]」とあり、中国路は予定通りの通過だったことがわかる。よって、詞書の「吉備宮」は、備後国の吉備津神社ではないと考えてよかろう。

なお、《A》の福本自身も傍線部①の後に「真金村」と記しており、当該村名は現在の吉備津神社（備中国一宮）の鎮座地（岡山市北区吉備津）の旧地名であり、傍線部①は誤植ないしは思い違いと思われる。

ところで、備前国一宮として「吉備津彦神社」が存在する。当社は、備中国一宮の吉備津神社から一キロメートルほど離れているだけで、歌枕として著名な吉備の中山を間に挟んで、北東麓が吉備津彦神社、北西麓が吉備津神社である[13]。この吉備津彦神社は、江戸時代には岡山藩主池田家の尊崇を受け、広大な敷地と社殿を誇っていたが、昭和五年十二月の失火で社殿・宝物の多くを焼失した。祭神も吉備津彦命をはじめ吉備津神社と同一である。明治二年冬の備中への旅を記した、成島柳北の『航薇日記[14]』には、「備前備後みな吉備の宮あれ共此備中の

宮最も上古のさまを存すと云ふ」とあり、備前の吉備津彦神社、備後の吉備津神社、備中の吉備津神社、ともに「吉備の宮（傍線部）」と呼ばれていたことがわかる。『涙松集』12番歌の「吉備宮」が備後のそれでないことは先述の通りであるが、備前の吉備津彦神社でないことは現段階では稿者には断定できない。ただ、松陰の12番歌は「吉備宮」からの連想で生じた思いであり、備前の吉備津彦神社、備中の吉備津神社、いずれで詠んだにせよ、対象とする祭神は同一であるということをここに記しておく。

ただし現実的な問題として、先述のように事前に通行する街道まで指定され、かつ罪人としての檻送という状況下で、神社に参拝したことは考えられない。恐らく山陽道の板倉宿（岡山の一つ西側の宿駅）あたりで宿泊ないしは休憩した折に、吉備宮を想起して12番歌を詠じたのが真相のようにも思われる。土井作治によれば、「板倉宿は、岡山城下町をひかえた宿駅であることから、参勤大名をはじめ旅行者のほとんどが旅装をといたといわれ、さらにすぐそばに吉備津神社前の宮内村に旅宿を兼ねた歓楽街があり、その影響をつよく受けていた」[15]という。11番歌の内容が夕暮れ時の郭公を詠んでおり、それと同日の詠である12番歌は、宿泊した場所で詠んだ可能性が高い。とすれば、板倉宿か岡山城下あたりで、昼間の感懐を詠じたと考えても間違いなかろう。

以上から、12番歌詞書の「吉備宮」は板倉宿近くに鎮座する備中国一宮の吉備津神社を指すものとして、以下考察を進めたい。

さて、12番歌に関して、先行論で見解に相違のない部分と相違のある部分とを確認しておく。

松陰本『涙松集』の添削が文法・語法上の誤りを訂正することを一つの目標にしたことは、注(2)の別稿で述べた。松陰本の三句「いとおふ(ほ)み」に添削が施されているということは、添削者（松陰と同時代の者）が本来ならば「いとおほみ」となるべきと解したと考えられる。よって当該箇所は、形容詞「多(おほ)し」の語幹に原因・理由の

接尾語「み」が下接した「いと多み」と考えてよかろう。《A》の傍線部②「多きこと故に」、《D》の傍線部⑨「多いので」などは妥当な解釈といえる。

四句の「たふれきためて」については、旧説は全て「たふれ」と「きため」と解している。角川『古語大辞典』[16]は、それぞれ次のように立項する（用例省略）。

たぶる【狂】動ラ下二　気が違う。くるう。

きたむ【懲】㊀動マ四　罰を下す。懲罰する。㊁動マ下二　こらしめる。罰する。

旧説は「狂る（たぶ）」の連用形「狂れ（たぶ）」が転成名詞となったと解し、「兇頑又は頑迷狂人」《A》、「狂人又は頑冥人」《B》、「狂人、頑迷な人」《C》、「頑迷な奴ら」《D》などと、全て「狂人」の意で解している。そして、その「狂人」を「懲（きた）む（罰する）」とする点では共通している。

旧説の一致は、以上までである。

二句の「君の誘子」は、「吉備真備か」《A・B・C》と推測する説と、「吉備津彦の鬼退治の話を頭に浮かべ」《D》とやや曖昧な表現で説明したものとに分かれる。結句「くし」も、語義として「孔子（くし）」《A・B・C》・「籤（くじ）」《D》の二義に説が分かれ、前者は更にその内容も、《A》の福本は傍線部③④に詳述するように孔子を批判的に詠じたとし、《B・C》の傍線部⑥⑧「くし」は、儒教精神の真髄を採用することを松陰が力説したとして肯定的に見ている。しかし、そのどの意見も末尾に推量や疑問の表現を伴っており、結局のところ福本が傍線部⑤で付言するように、「難解のものなれば敢て識者の教を請ふ」ということになるのであろう。

以上、先行論の一致点と相違点をやや詳しく見たが、次章以下、これらを踏まえて12番歌の最も妥当な解釈を探っていきたい。

三　12番歌の解釈（「君の誘子」「くし」の解釈とその周辺）

まず、12番歌を挙げる。三句は前章で見た「多み」に改め、清濁も施して分かりやすい表記とする。なお、考察の過程で、適宜二章の先行研究を参照する。

吉備宮
今の世は君の誘子（イサゴ）ぞいと多（おほ）み狂（たぶ）れ懲（きた）めてくしのみをとり

(1)　今の世は君の誘子ぞ

前章で考察した通り、詞書の「吉備宮」は備中国一宮の吉備津神社と考えられる。仮に、備前国一宮の吉備津彦神社であっても、祭神は同一で、四道将軍の一人、吉備津彦命（『日本書紀』の表記）である。

まず「誘子」から考える。松陰本の「誘子（イサゴ）」という振り仮名は、松陰と同時代の添削者によるものである。この歌における当該漢字の読み方は、松陰と同時代の者にとって「いさご」と認識されたことがわかる。しかし、この「誘子」なる熟語は一般的ではない。各種辞典や方言辞典なども閲したが見当たらなかった。管見に入る限りでは、『大漢和辞典』に「【誘子】をとり。誘物」[17]とあるのみで、「誘子」を「いさご」と訓（よ）んだ例はなかった。「いさご」に関しても、「砂（すな）」が各種辞典に立項されるだけである。

前章《A》の福本が何を手掛かりに「「誘子」（イザゴ）誘ふ子、即ち同類又は弟子の意」としたのかは不明である。松陰本の振り仮名「イサゴ」を「イザゴ」と改めた理由もわからない。ただ、『大漢和辞典』が「誘子」

の意味として挙げる「おとり（囮・媒鳥）」が、本来鳥獣の捕獲の際に同じ鳥や獣を誘い寄せるために使ったことから考えると、福本注釈もあながち間違っているとも言いがたい。語義がはっきりしないので、最大限幅を持たせた解釈をして、「今の世は君と同類の者だ、同じだ」の意で解しておく。

さて、問題は「君」である。

前章《D》の山中論文は祭神の吉備津彦命からの連想で、その鬼（温羅）退治と関連させて解釈する。温羅伝説には複数の伝承があるが、藤井駿は「遅くとも室町時代の末期にはほぼ今日知られるような形において成立」という[18]。嘉永六年（一八五三）以降の同年に近いころの成立とされる『備中誌』[19]所載の『吉備津宮縁起』に依ると温羅伝説とは、百済国の皇子の温羅（両目を爛々と輝かせ鬢髪が赤い身長一丈四尺の大男）が来朝して備中国賀陽郡新山に城郭（鬼の城）を構えて悪事を重ねたのを、吉備津彦命が策を用いて退治した、という話である[20]。温羅を夷狄と考えれば「攘夷」に通じて山中説も成立しそうだが、吉備津彦命が退治した鬼を「君」と呼ぶのは不自然であろう。二十首しかない松陰本『涙松集』を閲しても、「君」という語は、2番「菅公廟」歌では菅公即ち菅原道真、3番「鈴木大人に贈る」歌では天満宮の神官鈴木高鞆、5番「薬師を付けらるると聞きて」では長州藩の当代藩主毛利慶親（敬親）、などに対して用いられている。全て敬うべき存在を「君」としている[21]。従って、この12番歌も「君」は祭神或いは吉備津神社ゆかりの者と考えるべきであろう。

そこで参考になるのは、前章の《A・B・C》すべてが挙げた「吉備真備」である。吉備真備に関しては、宮田俊彦が次のように記す[22]。

『続日本紀』巻三十三、光仁天皇宝亀六年（七七五）十月壬戌（二日）吉備真備の薨去の条に、その略伝を掲

げて、右衛士少尉下道朝臣国勝の子、と書き始めているのでわかるように、真備はもと下道朝臣であって吉備朝臣ではない。吉備朝臣の姓を賜わったのは天平十八年（七四六）十月丁卯（十九日）の条に、「従四位下下道朝臣真備に姓吉備朝臣を賜ふ」とあって、吉備真備と称するのはこの天平十八年以後である。

歴史的にはこの宮田の言説が正しいのだろうが、松陰が生きた時代、すなわち近世後期にどのように認識されていたのかが重要である。

徳川光圀編『大日本史』の列伝に吉備真備が立項され、「吉備真備〈割書略〉本姓下道朝臣、其先出レ自二吉備彦命一、世居二吉備一」[23]と冒頭に記す。傍線部に「其の先は吉備彦命より出で」[24]とし、先祖を吉備津彦命即ち吉備津神社の主祭神と認識していたことがわかる。本居宣長の『古事記伝』も諸書を博捜して「さて此神社は、世にいはゆる吉備津宮にて、宮ノ内村と云フに在リ」とし、その子孫が下道臣でそこから吉備真備が出たことを述べる。[25]松陰の読書記録である『野山獄読書記』[26]の安政三年（一八五六）十月から翌年一月の条には、『古事記伝』が頻繁に記載されており、松陰は『古事記伝』に通暁していたことが推測される。

以上を勘案して、歌中の「君」は吉備津彦命から連想される、その子孫（と近世後期には認識されていた）吉備真備と考えてよかろう。歌の上の句の意味は「今の世の中は、吉備真備公と同類の者たちばかりで、そうした者が多いものだから」と解し得る。

(2) 狂れ懲めてくしのみをとり

結句の「くし」は難解である。前章で見た先行論は、「孔子」《A・B・C》・「籤」《D》の二つに説が分かれ

ている。

ここで参考になるのは、宮内庁書陵部所蔵の写本『涙松集』である。萩市松陰神社所蔵の松陰本『涙松集』には、仮名遣いの誤りを正したり和歌表現を推敲して添削したりした書き込みがあるが、それを忠実に筆写したのが書陵部本で、松陰本の添削が完了（歌集中の最も遅い日付「安政六年（一八五九）七月九日」から添削者と思しき鈴木高鞆の没年月日「万延元年（一八六〇）四月四日」までに完了）してから比較的早い段階で書写されたと考えられる。[27]そこには、当該歌が次のように書かれる。[28]

吉備宮　　同日

今の世は君の誘子（イサゴ）そいとおほみたふれきためてくし（孔子）のみをとり

前掲の松陰本の三句「いとおふみ」の添削の形「いとおほみ」を書陵部本は採用。そして注目すべきは、松陰本添削になかった結句のルビ（振り漢字）である。「孔子」としている。おそらく、松陰本のままでは解釈しづらいと考え、「孔子」という振り漢字を施したのであろう。松陰とほぼ同時代の者の当該歌の解釈として、この振り漢字は尊重してよかろう。

先行論で「くし」に対して「孔子」以外を想定したのは、前章《D》山中論文のみであった。「頑迷な奴らをこらしめるために祈って籤だけを取ったことだ」とするが、二章冒頭で見た通り、罪人としての檻送の身の松陰が神社に参拝することは考えにくく、ましてや籤を引くことはほぼ不可能といえる。山中説は考察から除外してよかろう。なお、「孔子（くし・くじ）」の清濁については、辞書類は「くじ」とするものが多いが、稿者には判

断がつきかねる。一応「くし」と清音のままで翻字しておくことにする。

以上、当該箇所は「孔子」を指すものと考えて、次章において『涙松集』の周辺資料や松陰の「孔子」観にも目を向けて、当該歌を総合的に解釈したい。

四　「吉備宮」歌の解釈と松陰の「孔子」観

三章で見た先行論では、《A・B・C》の三つが結句を「孔子のみをとり」と解していた。ただし、《A》の福本は孔子を批判的に詠んだとし、《B・C》の全集頭注は儒教精神の神髄を採用することを松陰が力説したとして肯定的に見ている。正反対の解釈である。

そもそも松陰は、儒家の祖である孔子をどのように見ていたのか。

松陰が大変な読書家であったことは有名である。注(26)の『野山獄読書記』の詳細な検討をおこなった桐原健真は、安政元年（一八五四）十月二十四日から同四年十一月に至るまで、全読了冊数を千四百六十冊と確定している。[29] そしてその詳細な分析から、安政三年六月から十二月にかけて、松陰の読書の内容（対象とする書籍の種類）に大きな「転回」があったとし、「それまで全く読まれていなかった国学・神道系著作が激増し、それに合わせるように水戸学・漢学系著作が激減している」[30]と述べる。これは、従来指摘されていた松陰の思想の変転を数量的に分析した点で画期的といえる。桐原は、これが宇都宮黙霖との書簡論争によって導き出されたとし、「対外的危機を声高に叫びつつ尊王敬幕を掲げる水戸学からの乖離であり、同時に、日本神話をありのままに信じ、日本のことばで「日本」という自己像を語ろうとする国学への接近であった」[31]と、松陰の読書傾向の変化から松陰の思想的変遷を鋭く剔抉する。

また、本山幸彦は松陰の思想を四期に分類し、第三期（一八五四～一八五八年）の入獄・自宅謹慎・松下村塾での教育活動の時期に「兵学との調和が必要だとして要求されていた経学が、はっきり歴史の学に変ってきた」[32]とし、儒家の著した経典（経書）研究から離れていくという重要な指摘をしている。そして、「安政五（一八五八）年七月十一日、幕府の違勅調印を知り、それまでの学究的、教育者的態度を改め、幕政改革を実施し、日本の独立を全うするため、尊王攘夷運動を次々と計画するようになる」と述べ、松陰の思想の第四期（一八五八～一八五九）の末期、即ち『涙松集』の旅の時期について、「門下生たちも、彼を過激だとして松陰に自重を求め、聞き入れられないのを知って彼から離れて行く。松陰は孤立に苦しみ、焦慮感にさいなまれ、絶望して死を願う日がつづく。しかし、安政六年に入って草莽崛起に希望をつなぐ」[33]とする。

桐原、本山ともに野山獄入獄以降の松陰の思想的転換を指摘し、儒家の経典を研究の対象と見る立場からの変化を言う。

ここで、12番歌の解釈に行く前に、松陰の重要な作品に目を向けたい。

それは、『涙松集』と同時に成稿した漢詩集『縛吾集』である。勿論、『涙松集』と同様に護送役の藩士が筆記したものである。この中に、12番歌が詠まれたのと同じ日（六月五日）に作られた漢詩二首がある。以下に二首を挙げる。[34]

五日

夢中夢作レ真（夢中の夢は真と作（な）り）
醒後忽為レ幻（醒めて後、忽ちに幻と為（な）る）

何時大夢醒（何れの時か大夢醒め）
脱二却人生患一（人生の患を脱却せん）

又

①千五百秋大八洲（千五百秋大八洲）
②太陽昭乎　皇統悠（太陽昭乎として皇統悠たり）
③安容猾賊海外内（安んぞ容れん、猾賊、海の外内）
④膺懲廃矣名分晦（膺懲廃れたり、名分晦し）
嗚呼孤臣此行萬人観（嗚呼、孤臣の此の行、萬人観る）
生豈容易死亦難（生豈に容易ならんや、死も亦難し）

一首目の詩は、大夢の中のような今が苦患の状態であることを述べ、憂国慨世の思いを吐露したものであろう。注目すべきは二首目。「とこしなえに続く日本国を寿ぎ（傍線部①）、太陽が光り輝き皇統が悠久たる（傍線部②）」ことを述べる。そして「絶対に許すことはできない、悪がしこい賊徒がこの日本を取り巻く海や日本の国内に入ってくることを（傍線部③）。（そんな猾賊を）征伐してこらしめようとすることもなくなり、大義名分も立たない（傍線部④）」と述べる。傍線部④は、松陰の思想的転換を招来する要因となった違勅調印以降の幕府の態度への批判であろう。そして、傍線部③に戻ると、ここには強い排外思想・攘夷思想が窺われる。勿論、松陰の中では、その前（傍線部①②）で述べられている尊王思想と強固に結びつくものである。

この漢詩と12番「吉備宮」歌が同じ日に詠まれたことは注目してよかろう。この時、松陰は猾賊（外国勢力）を日本近郊の海は当然のこと、日本国の中に容れることを拒否していた。先に見たように、松陰はこの段階には儒家の経典研究から離れつつあった。その内実について、高橋文博は次のように指摘する。(35)

彼は、書物自体の抱く主張を内在的に理解して、そこに含まれる意味を明らかにする態度をとらない。彼にとって、日本の国家的危機とその運命が最大の関心事であり、その関心に応じて「孟子」を読む。ここから孔子・孟子への批判が導かれる。〈中略〉松陰の孔孟批判は、孔孟の全面的否定ではなく、孔孟が聖賢であることを認めた上で、中国では孔孟の主張は通用するが、日本では通用しないとするものである。

松野敏之は先行研究の指摘とはやや異なり松陰は孔子を肯定的に見ていると主張するものの、「「孟子序説」において孔子が魯を去ったことを批判するのは、孔子・孟子の道理ではおおいつくすことのできない、日本独自の国体があるからだと主張するためであった。〈中略〉安政二年以降、孔子を批判的にとらえるようになったとは言えない。むしろ困難な出処進退にも迷うことなく、国のために行動した人物として認識しなおされていくのである」(36)とする。松野も部分的には松陰は孔子を批判しているとの立場であり、松陰の孔子への理解は高橋説（傍線部「松陰の孔孟批判は、孔孟の全面的否定ではなく」）に集約できよう。

如上の研究に全面的に依拠するならば、12番歌の下の句「狂れ懲めて孔子のみをとり」を、海外から入ってきた儒家の祖である孔子ばかりを尊重する風潮を批判的に述べたと解してよいのではなかろうか。「のみ」という限定が重要なのである。決して松陰は孔子を盲目的に礼賛しようとするのではない。そして、直前の「狂れ懲め

て」に関しても、旧説は「狂(たぶ)れ」を転成名詞として「狂人」と解していたが、ここは動詞「狂(たぶ)る」と動詞「懲(きた)む」の複合動詞と考えて、「気がふれて処罰を下し、（日本国の本来の思想でもなく日本にはそのままでは通用しない）孔子の教えばかりを尊重している」と解せるのではないか。勿論、幕府の外国勢力に対する一連の対応を批判しているのである。

そして上の句でも、先に考察した通り、吉備津神社からその主祭神の子孫の吉備真備を連想し、儒学を尊重した学者として真備を批判的に述べたと考えられる。

これらを踏まえて、12番歌の解釈としては以下のような試案を提示したい。

吉備宮

【和歌】　今の世は君の誘子(いさご)ぞいと多(おほ)み狂(たぶ)れ懲(きた)めて孔子(くし)のみをとり

【通釈】　今の世の中は、吉備津神社の御祭神吉備津彦命の子孫である吉備真備公と同類の人たちばかりだ。そんな人たちが多いので、（経学ばかりを尊重して真の道がわかっておらず）気がふれて処罰を行い、孔子ばかりを尊重している。

先行論とのかかわりで言えば《A》福本説に近いが、「狂(たぶ)れ懲(きた)む」を複合動詞と考えることにより、上の句と下の句の意味が統一的に解釈できる。実行を伴わず経学ばかりを尊重する「今」の風潮を批判するとともに、誤った道を進んで「狂(たぶ)れ懲(きた)む」行動をとっている幕府を鋭く批判する歌なのである。

五　おわりに

以上、松陰本『涙松集』の12番「吉備宮」歌に関して、先行研究、並びに松陰の著作や松陰の思想研究にも目を向けて、解釈試案を提示した。一体、12番「吉備宮」歌の解釈が難解であることは確かである。それゆえに、当該歌が流布本から削除された可能性も高い。稿者の提示した解釈もあくまで「試案」の域を出ず、別な解釈も十分あり得る。

ところが、ここに一つの疑問が生じてくる。流布本の他の歌が松陰本の原歌を大幅に添削修正して掲載していることについては、注(2)の別稿で論じた。ということは、当該歌に関しても、難解であったのならばそれなりの改変を施して流布本に掲載してもよかったのではないか。つまり、なぜ「削除」という形での処理がなされたのかという疑問である。稿者はその回答を持ち合わせていないが、一つの思い当たるふしがある。それは、幕末において長州藩の藩校明倫館やそれに準じる教育施設で行われていた「釈菜（せきさい）」と、その行事の対象となる聖廟に祀られた聖賢に関するものである。

村田清風の藩政改革基本方針に沿って、藩校明倫館は移転・拡充となり、嘉永二年（一八四九）二月に新明倫館の落成祭が挙行された。新明倫館では矢継ぎ早の改革が行われ、その移転・開設を機に、朱子学による教学の統一が図られた[37]。「釈菜」は儒学の先哲（特に孔子）を祀る儀式だが、長州藩では孔子と併せて菅原道真が祀られ、春の釈菜は藩校における最も重要な年中行事と認識されて藩主自らが祭主となった[38]。この釈菜については、幕末の長州藩では、「文久以後は、従来の釈菜を神祭式に改め、聖廟を孔子堂といひ、文宣王を孔子（クシ）の神（カミ）と唱へた。又毛利氏の先祖を霊社と唱へて祀つたこともある。後、孔子を孔宣父と唱へたこともあつた。元治元年夏には孔

子堂の名を改めて学校祠堂といひ、菅原道真と合せ祀るべき令を発し[39]〈後略〉」と、目まぐるしく扱いが変わったようだが、少なくとも元治元年（一八六四）頃まで、即ち松陰没後五年間ほどは、「孔子」は藩主の自祭する釈菜で祀られた人物であった。流布本『涙松集』の成立年がはっきりしないので軽々なことは慎むべきであろうが、もしかして流布本から12番「吉備宮」歌が削除された背景には、「孔子のみをとり（孔子ばかりを尊重している）」という結句部分が、藩主批判へと解されかねない（拡大解釈されかねない）点を慮った結果だったのかもしれない。「吉備宮」歌削除と「釈菜」との関係は、更なる調査・考察が必要であろうが、こうした問題も視野に入れながら、松陰詠は考察していく必要があろう。

死を覚悟して江戸に護送されていく松陰が、檻の中という極限状況で詠出した歌の真意を探ることは重要である。奇しくも、本稿では、最晩年の松陰の思想や孔子への理解と表裏一体となった解釈が導き出された。松陰の口授そのままの『涙松集』（松陰本）所収歌には、他にも歌意のつかみにくい箇所や理論の飛躍している箇所が見られるが、松陰の他の著述や思想的背景を参酌しながら原歌に即した丁寧な解釈を行うことで、新たな松陰の歌の世界が見えてくるのではなかろうか。

〔注〕

（1）小野美典「《読む》吉田松陰の流布本『涙松集』を読む――作られていく松陰像――」〔日本文学協会『日本文学』67巻12号、平成30年12月〕

（2）小野美典「吉田松陰の歌集『涙松集』について――松陰本から流布本への改作と松陰像の造形――」〔山口大学人文学部国語国文学会『山口国文』四三号、令和2年3月刊行予定〕

（3）現在、山口県萩市松陰神社所蔵。ただし、これも転写本であろう（注(2)の拙稿参照）。

（4）松陰本『涙松集』の添削・書き入れは、左記の全集（所謂「定本版」）が唯一翻刻しているので、本稿では特に断らない限り、松陰の著作はすべてこれを用いる。なお、添削部分を波線（右傍）で示し、添削部分はルビ（振り仮名・振り漢字）の形で表示した。定本版が区別している変体仮名の字母の異同、片仮名・平仮名の区別は、現行の平仮名で統一した。便宜的に歌番号を通し番号で付した。

山口県教育会編『吉田松陰全集　第一巻～第十巻』〔岩波書店、昭和9～11年〕

（5）松陰本の添削者は鈴木高鞆と言われている（注(2)の拙稿参照）。

（6）福本義亮『訓註　吉田松陰殉国詩歌集』〔誠文堂新光社、昭和12年12月〕。本書は流布本『涙松集』の注釈書だが、あえて流布本が収載しない当該歌も取り上げて注釈・考察を施している。

（7）山口県教育会編『吉田松陰全集　第七巻』〔岩波書店、昭和14年11月、三一四頁〕、以下「普及版」と略す。

（8）山口県教育会編『吉田松陰全集　第六巻』〔大和書房、昭和48年10月〕、以下「大衆版」と略す。

（9）山中鉄三「吉田松陰の詩藻――和歌・俳句編――」〔徳山大学経済学会『徳山大学創立十周年記念論文集』昭和56年11月〕

（10）定本版全集九巻に「東送関係文書　安政六年」を立項して一括して所収。また、山口県文書館毛利家文庫蔵「杉百合之助育吉田寅次郎公儀御吟味有之江戸連出一件」があり全集未収録の資料も含まれる。毛利家文庫のものは「吉田松陰護送一件」の名で同館のウェブ上で公開されている。

（11）「江戸より萩へ松陰東送に関する指令伝達（安政六年四月廿五日）」〔定本版全集九巻、四二九頁〕

（12）「護送人より萩へ伏見着の報告（安政六年六月十一日）」〔定本版全集九巻、四四〇頁〕

（13）藤井駿『吉備津神社』〔日本文教出版、昭和48年3月〕参照。

（14）『明治文学全集4　成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集』〔筑摩書房、昭和44年8月、一〇三頁〕

（15）土井作治ほか『街道の日本史40　吉備と山陽道』〔吉川弘文館、平成16年10月、二六頁、土井執筆担当〕

（16）中村幸彦ほか『角川古語大辞典　二巻／四巻』〔角川書店、昭和59年3月／平成6年10月〕

（17）『大漢和辞典（修訂第二版六刷）　巻十』〔大修館書店、平成13年10月〕

（18）注(13)の『吉備津神社』六八～七一頁。

（19）『備中誌』賀陽郡中〔岡山県編集発行、明治37年4月、二八八～二九一頁〕。なお、塚本吉彦による本書解題（明治35年3月付）には、「著者未詳〈中略〉行文中嘉永六年迄年代云云トアルニヨリ考レハ当時ノ編纂ナルコト疑フベカラ

ズ」とある。

(20) 温羅伝説については、中山薫『温羅伝説――史料を読み解く――』〔日本文教出版、平成25年6月〕も参照。

(21) 16番歌（詞書欠）では天皇を詠むが、天皇に対しては「公」の字を使っている。振り仮名はないが「きみ」と読むと思われる。

(22) 宮田俊彦『（人物叢書新装版）吉備真備』〔吉川弘文館、昭和63年9月、一頁〕

(23) 徳川家蔵版『大日本史』第十四冊巻百二十三列伝〔明治33年吉川半七刊の和装本〕

(24) 『大日本史』本文は「吉備彦命」だが、上代語の格助詞「つ」を補って「吉備彦命（きびつひこのみこと）」と読みうる。川崎紫山の『譯註大日本史　四列伝』〔彰考舎、昭和14年5月、一九〇頁〕は「きびつひこ」と振り仮名を付す。これと関連して、12番歌の詞書「吉備宮」は、もしかしたら「きびつみや」と読むのかもしれない。

(25) 『古事記伝二十一之巻』の「黒田宮巻」（孝霊天皇）〔『本居宣長全集　第十巻』筑摩書房、昭和43年11月、四九四～四九六頁〕

(26) 定本版全集七巻の三三五～三七八頁。

(27) 注(2)の拙稿参照。

(28) 宮内庁のウェブサイト「書陵部所蔵資料　画像公開システム」掲載の画像を使用。

(29) 桐原健真『吉田松陰の思想と行動――幕末日本における自他認識の転回――』〔東北大学出版会、平成21年6月〕
桐原健真『松陰の本棚――幕末志士たちの読書ネットワーク――』〔吉川弘文館、平成28年11月〕

(30) 注(29)の『吉田松陰の思想と行動』一五九頁。

(31) 注(29)の『吉田松陰の本棚』一〇一頁。

(32) 本山幸彦『吉田松陰の思想――尊王攘夷への思想的道程』〔不二出版、平成22年4月、一一一頁〕

(33) 注(32)の『吉田松陰の思想』二〇～二一頁。

(34) 定本版全集四巻の四七八頁。なお、括弧内の書き下し文は稿者に依る。

(35) 高橋文博『人と思想144　吉田松陰』〔清水書院、平成27年9月、九二～九四頁〕

(36) 松野敏之「吉田松陰の孔子観」〔『国士舘大学漢学紀要』第十九号、平成29年3月〕

(37) 明倫館の移転・拡充と新明倫館の教学に関しては左記を参照。
萩市史編纂委員会編『萩市史　第一巻』〔萩市発行、昭和58年6月、八五三～八六三頁〕

小川國治・小川亜弥子『山口県の教育史』〔思文閣出版、平成12年12月、六二～八三、一一六～一一九頁〕

(38) 長州藩の「釈菜」に関しては左記に詳しい。

『山口県教育史　上巻』〔山口県教育会編集発行、大正14年3月、二八三～二九八頁〕

(39) 注(38)の『山口県教育史　上巻』二九七頁。なお、「孔子（クシ）の神（カミ）」の振り仮名は原典のママであり、幕末の長州藩では「孔子（クシ）」はごく普通に理解可能な語であったことがわかる。

『桜文論叢』執筆要領

平成１６年２月１０日大宮校舎委員会決定
平成１７年９月２９日桜文論叢編集委員会改正
平成１７年９月２９日施行
平成１９年７月　５日改正
平成１９年７月　５日施行
平成２２年７月　１日改正
平成２２年７月　１日施行
平成２５年５月３０日改正
平成２５年５月３０日施行

1　原稿は未発表の完全原稿とし，提出締切日を厳守する。他誌に投稿中でないものに限る。また，審査の迅速化のため，原稿の要旨を添付する。翻訳原稿については，必ず原著者又は原出版社の許可を得てから提出することとし，許可の確認ができる文書等も添付する。

2　文章は原則として常用漢字，現代仮名遣いを用いる。学術上必要な場合は，その限りではない。

3　原稿は，原則として，Microsoft Word で作成し，フォントは和文では「MS 明朝」，欧文では「Times New Roman」を使用し，いずれも下部にページ番号を付すこととする。注は，原則として，「挿入」メニューの文末脚注機能を使用せず，すべて尾注とする。

4　原稿の提出は原則として，電子メールの添付ファイルで研究事務課（kenjimu.law@nihon-u.ac.jp 宛）へ送付するとともに，印刷した原稿２部を同課へ提出する。

5　原稿の長さは，表題，氏名，本文，注，引用文献を含めた上で，和文の場合 20,000 字以内，欧文の場合 10,000 語以内とする（和文は「ツール」メニューの「文字カウント」で「スペースを含めない文字数」，欧文は「単語数」でカウントする）。なお，多少の超過はやむを得ないものとする。表題と氏名は，和文表記及び欧文表記を併記する。

6　要旨は和文 600～1,000 字程度，欧文 300～500 語程度とし，Ａ４版１枚に収めるものとする。

7　校正については，初校の際の加筆，訂正はやむを得ない場合に限るものとし，再校以後の加筆，訂正は避ける。

執筆者による校正は再校までとし，初校，再校ともに入手後１週間程度で返却する。再校返却の際は，タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

8　文献の引用について

①　横書きの場合，本文の当該箇所の右上（行間）に括弧つきの算用数字で注記番号を付し，各章等の後に引用文献等を表示する。縦書きも同様とする。

②　表示については，著書の場合，著者名，書名『　』，発行年，頁等を示し，論文の場合は，執筆者名，論文名「　」，掲載誌名，巻・号，発行年，頁等を示すことを原則とする。

以　上

執筆者紹介（掲載順）

石橋正孝　日本大学准教授
吉澤　保　日本大学専任講師
田中拓郎　日本大学非常勤講師
高階曜衣　日本大学非常勤講師　日本大学文理学部人文科学研究所研究員
小野美典　日本大学教授

機関誌編集委員会

委員長　大岡　聡
副委員長　賀来健輔
副委員長　南　健悟
委員　江島泰子
委員　大久保拓也
委員　小野美典
委員　加藤雅之
委員　児玉直起
委員　髙畑英一郎
委員　友岡史仁
委員　水戸克典
委員　横溝えりか
委員　渡辺徳夫
委員　石川徳幸
委員　岡山敬二
委員　加藤暁子
委員　杉本竜也
委員　中静未知
委員　野村和彦
委員　松島雪江
委員　石崎和文
委員　田村　武

桜文論叢　第101巻（非売品）

令和2年3月27日発行

発行者　小田　司

発行所　日本大学法学部
機関誌編集委員会
東京都千代田区神田三崎町2-3-1
電話　03（5275）8510番

印刷所　株式会社メディオ
東京都千代田区神田猿楽町2-1-14 A&Xビル

ISSN 0288-1411

ŌMON RONSŌ

Vol. 101, March 2020

CONTENTS

— ARTICLES —

ISHIBASHI Masataka, The Military Revolution in the Works of François Rabelais ···· 001

YOSHIZAWA Tamotsu, Whitehead dans *le pli : Leibniz et le baroque* de Deleuze ····· 025

TANAKA Takuro, Pragmatic Effect of Tautological Reduplication ····· 071

— NOTE —

TAKASHINA Terue, Change in the Body Composition of Rugby Players between before and after a Training Camp ····· 087

— ARTICLE —

ONO Yoshinori, An Interpretation of “Kibi-no-miya,” a Poem in Yoshida Shôin’s *Ruishô-shû* ····· 122